

Ⅲ 昭和三陸地震津波（昭和8年3月3日）

1 災害・三陸地震津波「昭和ニュース事典Ⅳ」

① 東北・関東に強震、釜石に津波襲う

〔昭和8年3月3日 東京日日〕

三日午前二時三十二分十四秒、東京地方に最近珍しい強震あり、熟睡中の市民はいずれも戸外に飛び出した。午前三時半中央気象台発表によれば、最大震幅四十ミリ、震度弱震、性質緩とあるが、人体に感じた時間が長かったので市民は余震を案じたが、警視庁管内には被害はない模様である。なお各地からの報告によれば、震源地は東北地方の見込みである。

強震 福島、筑波山。強震（弱） 足尾。弱震 三島、山形。

〔本多技師談〕 震域はかなり広く、青森から東北、関東地方ほとんど全部にわたって強震或いは弱震を感じ、午前三時まで集まった電報によると、震央は福島県塩屋崎沖方面に当ります。今のところ大した被害はないようですが、東京では先年の伊豆の地震よりやや小さい感じでした。

午前三時二十分までには内務省警保局になんら異変の通報なし。なお東京市内の被害についても警視庁警務部で管下各署に調査を命じたが、同時刻までには被害の報告なし。

未曾有の地震〔釜石発〕 三日午前二時十六分より数分間にわたり、岩手県釜石地方はじまって以来かつてない大地震が襲来、同二十一分頃、再び揺り返しがあり、六十歳の老人もはじめてだといっている物すごいものである。

〔秋田発〕 三日午前二時三十二分、秋田地方に近年に例のない強震あり、時計の振子が止まり、商店などの棚の物はガラガラ落ちるといふ騒ぎで、凍えるような風雪の暗夜に市民は飛び出して極度の恐怖に襲われたが、約二分間でようやくしずまった。この強震は秋田全県に及び、大館、能代、土崎、本庄、大曲、横手各地も同様で、大正三年以来の強震である。



〔仙台発〕 仙台地方に三日午前二時三十三分頃から約五分間強震あり、棚のものは落ち、時計の振子とまり、人々は戸外に飛び出したが、数カ所電話線も切断されたほか被害は判明しない。同地方では関東大震災の当時より強く、近來にない強震である。

〔一関発〕 三日午前二時二十四分頃から約六分間にわたり、岩手県一関地方に水平動の強震あり、時計の振子は止まり、人々はみな戸外に飛び出し、零下五度の寒さにふるえつつ避難した。古老達はこんなひどい地震を知らないといっている。被害多い見込みで、一関署で取り調べ中。

釜石沿岸民大狼狽〔釜石発〕 釜石地方では三日午前三時、海水がひきはじめたので、沿岸民は裏山に続々避難しはじめたが、三時五分ごろ、大音響とともに海水が押し寄せたため電話線は切断し、釜石海岸通りは暗黒となり、床下三尺の海水が押しよせたので半鐘を鳴らして警報した。約五分間で海水はひきはじめたが、避難民はいずれも襦袢一枚で逃げまどった。岩手県下閉伊郡宮古町では午前二時半、鳴動とともに地震あり、棚の物は倒れ、時計の振子は止まり、電線が切断され、海岸通りからは海嘯が襲来すると騒ぎ、群衆が下閉伊支庁の前に押しかけ篝火を焚いて警戒した。三時には流失漁具等も多数あり、発動機船数隻も流失した。

② 震源は金華山沖、被害甚大

〔昭和8年3月3日 東京日日（号外）〕

津波襲来、暗黒の中を逃げ惑う 三日午前二時三十二分十四秒、東京地方に最近珍しい強震あり、熟睡中の市民はいずれも戸外に飛び出した。中央気象台発表によれば、最大震幅四十ミリ、震度弱震、性質緩であったが、震央が福島県塩屋崎沖方面であったため東北、殊に三陸沿岸地帯は被害甚大で、秋田は大正三年、岩手県では数十年来の強震といわれ、電信、電話、電灯線の切断数知れず暗黒となった。釜石地方は突如海嘯押し寄せ漁船流失し、加えて町内より発火し避難民で大混乱となり、同地方は酸鼻の極みで、その他三陸沿岸地方には押し

寄せる海嘯のために漁船流失、家屋浸水相当あり、続々情報が到着しているが、釜石地方の古老の話によれば三陸海嘯以来の大地震といわれている。なお震源地は金華山沖である。

午前三時半中央気象台発表によれば、最大震幅四十ミリ、震度弱震、性質緩とあるが、人体に感じた時間が長かったので市民は余震を案じたが、警視庁管内には被害はない模様である。各地の地震の模様は左の通りである。

福島強震、足尾強震(弱)、三島弱震、北海道網走弱震、室蘭強震弱き方、函館同、青森弱震、宮古強震、盛岡強震の弱き方、秋田弱震、石巻強震、仙台同、福島同、山形弱震、小名浜強震の弱き方、水戸、同筑波山強震、銚子弱震、宇都宮同、熊谷強震の弱き方、前橋同、甲府同、沼津弱震、長野弱震の弱き方、松本微震、釧路強震の弱き方、千葉、館山弱震の弱き方。

〔国富技師談〕震源地は塩屋崎の北東、金華山の南東で、東北、関東地方は元より遠くは北海道、近畿、四国あたりまで感じたらしい。この地震帯は外側地震帯によるもので、小さいのは一カ年何千回となくあるが、こんな大きいのはこの十年来珍しいものだ。余震も相当多い見込みである。震央は東経百四十三度、北緯三十八度、金華山沖東南二百キロのところ、海底にはかなり変化があったらうと見られる。ちようど明治二十九年六月十五日の三陸の大海嘯と同じ形式をとりはせぬかと心配している。その当時は地震の被害より海嘯の被害の方が強く、流失住宅六千四百九十九戸、全壊五百二十七戸、半壊七百七十一戸、非住宅二千四百七十九棟流失、死者二万九千五百五十七人を出した。その時は地震後五十分後に海嘯があったが、今度もあれば一時間くらいの間には海嘯がありはせぬかと心配される。海嘯の来る時は海の浪がぐつと高くなつて来るから注意が必要だ。

宮城県下は五尺の怒濤「仙台発」宮城県下の海嘯につき、その後の支局に入った情報は左の通りである。牡鹿郡女川港は地震の後二十分ばかり過ぎて第一回、続いて四回海嘯襲来し、いずれも約五尺の怒濤であった。浸水家屋二、三百戸に達し、家具の流失おびただしく、波

伊支庁の前に押し寄せ、篝火をたいて避難している。午前三時頃に至り一度大浪が襲来し、沿岸につないであった発動機船数隻は流失、漁具等も多数大浪にさらわれた。同町の古老の話では明治二十九年の三陸地方の海嘯の時よりも地震が大きく、地方民は恟々としている。

〔盛岡発〕岩手県宮古町は地震とともに怒濤押し寄せ、町の中央を貫流する宮古川を遡って一丈余の海嘯が押し寄せ、宮古川に繋留してあった発動機船二十数隻は全部流失、宮古・山田間をつなぐ宮古橋(長さ百間)は中央から陥落し交通杜絶した。なお午前五時に至るも電灯はつかず、町民は闇の中を悲鳴をあげつつ役場の裏山に避難をつづけている。

〔盛岡発〕宮古の浸水は鎌ヶ崎、上町、新川町、藤原区、磯鶏村海岸一帯約三百戸床上浸水、宮古測候所下の豊臣久光(四〇)宅は流され、同人は行方不明となっている。

濡れ鼠で避難「盛岡発」岩手県気仙郡大船渡町は地震と同時に沖合遙かに大鳴動が起こり、一時に六尺余の海嘯が押し寄せ、三時まで少しも引かず同町の赤沢、野田茶屋前、笹ヶ崎、長沢、平、下船渡など二百数十戸に浸水、町民はいずれも悲鳴をあげて戸外に飛び出したが、押し流されたものもあり、町の道路内に海岸からの小舟が流れ込み、町民はこれを避けていざれも濡れ鼠で裏山に逃げ出し、火を焚いて水の引けるのを待っているが、午前五時に至り幾分減水を呈して来た。

〔盛岡発〕岩手県気仙郡大船渡町に三日午前三時ごろ海嘯が押し寄せ、道路四尺、床上三尺浸水し、同町大船渡郵便局は浸水二尺に達し、熟睡中の町民はいずれも着のみ着のまま子供をつれ泣きわめきながら裏山に避難しているが、相当被害ある見込みである。

〔盛岡発〕地震と同時に二戸、九戸、気仙三郡を除くほか県下全部電灯が消え、時計の振子は止まり、下閉伊、上閉伊、気仙三郡は海水五尺膨張、釜石方面の警察電話は不通となった。

二カ所で四百戸倒壊「盛岡発」岩手県下閉伊郡山田町川向区、南町区、境田区は地震と同時に海嘯が押し寄せ、大槌電気会社山田支店をはじめ海岸に面した約三百戸はいずれも倒壊した。また同郡船越村田

にさらわれた人はいらしいが、海水を浴びて濡れ鼠になった人は非常に多い。鮎川浜は海岸に材木その他家具類が押し流されて凄惨を呈している。

〔石巻発〕三日午前二時半頃、大地震とともに宮城県牡鹿半島一帯に万雷の落下するかと思われる音をたてて海嘯襲来し、女川港郵便局前は四尺、鮎川港は五、六尺の浸水に達した。石巻地方にも海嘯襲来の恐れがあるので、電灯線切断による暗黒の中に警鐘は乱打され、憤懣の気分が漲っており、海岸住民はいずれも避難準備で人心兢兢としている。

〔三日午前五時鉄道省着電〕宮城県石巻の北一里渡波町は三百戸浸水したが、漸次減水しつつあり、蚕業試験場は無事。盛岡方面は被害なし。〔仙台発〕宮城県下に三日午前二時三十分ごろ、夢を破って猛烈なる地震があり、これがため県下本吉郡大谷村海岸に海嘯襲来し、浸水家屋多数を出し、うち二戸ばかり押し流され、行方不明者二、三名を出した。同地方は明治二十九年の三陸大海嘯の惨害地方であり、海岸一帯は大騒動となり消防、青年団出動、大警戒、捜査につとめている。気仙沼地方では三陸大海嘯以上の大強震である。県下各地は電灯線切断、到るところ暗黒と化した。

不通、東京からの電信、電話、電話線のうち東京・仙台二回線、東京・郡山一回線は地震のため故障、不通となった。電信は東京・青森・東京・小樽、東京・札幌、東京・函館の四回線は不通となった。

釜石出火、三百戸焼き千二百戸流失「盛岡発」釜石町只越に火災起こりたるも、町民は裏山に避難したため火災は鎮火の見込みなく、目下延焼しつつあり、釜石港は人口二万三千、戸数約五千、本邦唯一の大鉄山を擁し、棧橋には三千トン級の船数隻が横づけでき、漁船の出入りもすこぶる多い。

〔中央気象台着電〕釜石では千二百戸流失、三百戸焼失した旨、午前六時半、通報があった。

発動機船二十数隻流失す「盛岡発」岩手県宮古町では地震とともに電線が切断され、海岸通りは海嘯が襲来すると騒ぎたて、群衆は下閉

野浜部落は約百戸破壊された。

〔盛岡発〕盛岡地方は地震の最中、電灯線切断され暗黒となり、いざれも戸外に飛び出し避難したが、電灯は約三十分の後点灯された。盛岡駅待合室付近の大煙突が倒壊、待合室の屋根を大破した。

### ③ 火責め、水責めの釜石

〔昭和八年三月四日 東京日日(夕刊)〕

五百戸全焼「盛岡発」三日午前二時半ごろ、地震とともに三陸沿岸に襲来した大津波は、午前六時、二回目襲来し荒らし廻ったあと、六時半までにほとんど引いて海面は平常に復したので、沿岸民は零下七度の酷寒の最中、濡れ鼠となって残った家屋の取り片付けを開始した。岩手県庁では湯本学務部長を統率者として内陸部の警察官の非常招集を行い、十数台の自動車に分乗して、午前七時、沿岸地方一帯に急援隊を派遣したが、夜が明けて見ると死体、破壊、流失された家屋の現状は全く生き地獄の有様である。一方天をこがす釜石町の大火は、午前六時半に至り学校通り、下通り、尾崎神社等五百戸を全焼、八時半鎮火。なお釜石町大渡川は約五十トンの発動機船が押し入り、その付近には津波に逃げ遅れた人々の死体がここここころがっている。

流失家屋二千五百、漁船破壊五百「盛岡発」岩手県沿岸地方の被害状況(三日午前十時半)、県保安課の発表によれば流失戸数二千五百、死者二百名、行方不明者及び死傷者は数知れぬ状態である。なお焼失家屋は五百戸。(釜石分だけで、下閉伊郡小本村の火災は交通不能で判明せず)また釜石町に押し寄せた津波は水上派出所付近で一丈五尺といわれ、この日のもは大小数回襲来、碇泊中の漁船五百艘を木葉微塵とした。また釜石町で発見された死体は佐藤勇、樽山某女外五名。なお午前五時十一分、釜石町只越及川自動車店隣から出火、十戸を焼失した。

## ④ 釜石、田老は壊滅

〔昭和8年3月4日 東京日日〕

三陸震害、底知れず「盛岡発」岩手県下閉伊郡田老村の津波の被害は本社千葉特派員の踏査によれば全く予想外で、同村の戸数約六百戸の中、残ったものはわずかに小学校、役場、寺院、村民住家三戸、その他は全部津浪襲来とともに倒潰し全く荒野と化した。死傷者は村民三千名の中、海にさらわれたもの、山中に逃げ込んだもの等行方不明のもの実に二千名に達し、うち死亡と認められているもの六百名に及んでいるが、家屋の下に死体が累々と重なり、津波に乗って漂着した人々が焚いた火によって火災が起り、煙の中に逃げ惑って火中に丸焼けとなり、また白骨となっているもの多数に及び、部落全部は懐愴の気に充ちている。津浪で溺死した幼児が立ち木にひっかかっているもの等まさに凄惨の極みで、三日午後、宮古警察署では署員を動員し消防組、自警団を狩り集め、死体の取り片づけに着手したが、収容死体は午後八時までに百五十に及んでおり、なお引き続き捜査中で、生き残ったものは小学校、寺院に収容し、炊き出し或いは負傷者に対しては救護班が手当を加えている。同村長・県会議長関口松太郎氏は暗然として語る。「今度の津浪は前回に比してより以上ひどいものであった。不意を食った人々はいずれも助け合いながら、ついにその家の下敷きとなり死亡したものが五、六百名はあると見ている。小学校の本田首席訓導、赤沼女訓導も梁の下敷きとなって死亡した。大家族が死んだものもあり、五つの子供を残して他の人々が全部死んだものもあり、村はほとんど更生の見込みが立たず、一刻も早く救済の手を待っている」

機上から見る死の街「三日仙台にて今吉本社特派員発」三陸沿岸大震災——大津浪襲来、家屋流失、三陸大津浪の二の舞いか、こうした飛報が次々に深夜の東日編輯局にたたき込まれた。未曾有の大惨事を空から慰問すべく、本社入江機は一路三陸の現地に急行した。牡鹿半島の近く、女川港のはずれには相当大きい崖崩れが見え、赤い旗の立っているのが見えた。このあたり一帯津浪が相当ひどかったと見

は、明けてから「天雲もなく晴朗だ。社旗めざして、「盛岡は？ 宮古は？ 大館は？ 大丈夫ですか」一種異様な恐怖の眼をした村人が取り囲む。

両石部落から釜石まで二里余の曲がりくねった峠道を、土地の青年団員が貸してくれた自転車で飛ばす。ちよつとハンドルをあやまれば、たちまち墜落する難所である。釜石近くなると、坂道で自転車は用をなさない。もう一歩で釜石という鳥ヶ沢のトンネル一町余、真ッ暗闇を突つ走ると眼界が開けた釜石だ。町に入ると雑踏で動けない人だ。家は軒並みに倒れている。町民は震えあがっている。

人夫至急役場に集まれ。流失物その他拾得したものは厳罰に処す。大きな貼紙が壊れた建物の壁や倒れた電柱へ貼られている。

海岸には大きな船体が投げ出され、真ッ二つにわかれたのや引っくり返っているのがあり、皆で二百余隻壊されたという。棧橋も岸壁も魚市場も持つて行かれた。大きな屋根が海中にポカンと浮いている。昨年十万円を投じた埋立工事もおじゃん。倒潰、焼失合わせて六百余戸、死者三十余名といわれているが、まだ十五より死体が発見されていない。小学校には千余名の罹災者が寒さと飢えと恐怖におのっている。三十八年前の惨状は五月節句だったというが、今度はそれが三月の節句にこの大惨事を勃発したものである。

内務省、衣食糧を急送、内務省社会局では三日午後八時、岩手県知事から毛布、寝具、タオルを各一万人分、ミルク五千個、沢庵五百樽、米一十石、天幕二千人分の急送方を依頼されたので、三日夜は保護課員が徹夜で準備に奔走し、天幕は同潤会、警視庁、東京府市から狩り集め、玄米は農林省から政府米を払い下げよう交渉し、毛布、寝具は陸軍省を通じ弘前の第八師団から供給するよう手配し、救護に万全の策を講じ被害現地に急送することになった。

大蔵省も救済対策腐心 三陸地方震災被害状況調査のため大蔵省では三日夜、主税局の谷口書記官を災害地に急派したが、同氏は約一週間の予定で被害状況を詳細に視察するはずで、被害地の国税徴収の猶予ならびに地租、營業収益税、所得税、相続税等の減免については、

え、入江入江はたいい津浪のため川口が三角州のように砂が盛り上がっている。金華山を一またぎすれば、三陸沿岸の海は津波を忘れたかのように小波さえ立っていないが、一隻の船影すら見られず、漁港の多いこの地方だけに漁船がいかに大打撃を受けたかが想像される。釜石——自然の暴威に打ちくだかれ、たたきのめされ、踏みじられて、声もなく横たわる惨憺たる「死の町」釜石が見える。

釜石港には戸といわず障子といわず万物みな藻屑のごとくにただよって、暴虐のいかにはなはだしかったかが窺われる。町の東方地区は町民が避難してしまつたのか、黒煙をあげて民家は焼けるにまかせてある。海岸地帯は津浪の魔手にひき抜かれたように民家は跡形もどめず、泥田のようになって海水がにぶい光をはなつて無気味によどんでいる。下を見れば、民家の焼け跡の死灰の中に呆然として立ちつくしている住民が点々と見える。道には人の姿なく、海にただ顛覆した船が横腹を見せているのみだ。

地獄！ まさしく地獄だ。地震と津浪と加えて火事、釜石町は水火の責め苦にあつて完全に地獄と化し去り、地獄の冷気と声が翼にぐんぐん突き上げて来るような無気味な凄惨な気がする。

宮古も大船渡も女川も大谷も、すべては呪われた死の町の姿である。凶作に悩む三陸沿岸一帯は今また地震と津浪と火事に襲われて、春とはいえず風寒き地方だけに、どん底に突き落とされた住民は空から見た災害状況ではいつ復旧するとも思えぬ。酸鼻の極みである。

惨禍の中心釜石「篠崎、梅野両本社特派員発、青森中継盛岡発」盛岡から長駆二十里、天嶮の笛吹峠を突破し釜石に向かう。釜石より二里余り手前、上閉伊郡鶴ノ住居橋より両石町までしか自動車を通らなない。まずここでその惨状に目を蔽う。九十余の漁民部落は影も形もなくさらわれ、倒潰した木片は木ツ葉微塵に押し寄せられて、道路といわず畑といわず乱雑に積み重なっている。家具も夜具も水と泥に侵され、はだして髪ふり乱した女子供が家の跡に集まって泣き叫んでいる。老婆を、母親を、新妻を奪われた人々は、小舟を漕ぎ出して磯辺に流れついた雑物を突ついている。悲惨な人の前に大暴威を示した自然

同書記官の報告を徴した上大蔵当局で決定し、徴収猶予に關して法律の規定を要するものについては法律案を今議会に提出する方針である。直接国税の減免については次期議会に法律案を提出して、七年度の後半期の租税を減免することとなる。(後略)

## ⑤ 三陸に天無情、今度は吹雪

〔昭和8年3月6日 東京日日〕

救済の手を阻む「釜石にて大沢特派員発」

三陸地方一帯は五日朝来吹雪となり、罹災地は「白雪の廢墟」といった惨状である。あの地震に続いて大津波の災害、それにつづいて吹雪と、五日朝来沿岸一帯は未曾有の時化となり、三重、四重の重なる自然の暴威にたたられて、陸路に代わって海からの救護の手を伸ばさんとすれば、沿岸はわずかに隔てた沖合でも激浪で救護船の出動も危険となり、二十トンくらいの発動機船も五十度くらいの角度に傾き激浪にもまれる有様で、罹災者への食糧配給も不可能で、わずかに岩手県のトロール監視船が食糧、衣類を満載して、五日午後二時釜石を出発し、釜石から北方十里の地点、惨害もつとも甚大なる船越へ危険を冒して急航、救護に当った。このほか海上救護隊の出動は、時化が治まらぬ間はほとんど不可能の状態である。

津浪を目前に無電技師第一報「釜石にて大沢特派員発」三陸地方の震災と大津波の惨禍を逸早く報ずるため、死を賭して無電でSOSを各地に送つた一無電技師の隠れた功績が五日判明し、罹災民から感謝されている。釜石町の無電技師宇佐美敏男君(三四)は、地震に続いて大津浪が襲来するや、一度は町の人達と逃げたが、再び無電室にかけ込んだ。そこには同君が組み立てた無電機がある。室内の電灯は消えて真の暗となつているので、ろうそくの光を頼りに電力を得るためガソリンエンジンを動かし、その力で無電機を活動させ、まず銚子と落石両無電局を呼んだ。妻女のきみ子さん(二四)は夫君の命をかけての奮闘に、窓際に立つて足を浸して来た彼と、直ぐ前に迫つて来た火災の物凄い死の渦巻を警戒しつつ、雄々しくも惨禍の中に無電室

の歩哨に立った。  
どうやら銚子、落石ともSOSをキャッチした。この電波によって第一報が岩手県庁に入ったのである。SOSの急報がキャッチされたので、今度は波長二百二十で三陸沖合にある無電を持つ船舶に向けて陸の状況を報じ、大津浪の災害に対する行動を注意した。この頃沖合には無電装備の船舶が十五、六隻と数隻の漁船が出漁中であつたのだ。無電の威力は宇佐美技師の沈着、機敏な処置により遺憾なく發揮された。手配を終わった宇佐美君は、始めて暗の中に町の損害のあまりにも物凄いのを知った。

⑥ 死者・行方不明者は三千人にも

〔昭和8年3月6日 大阪毎日〕  
五日、内務省に到着した東北、北海道地方震災被害概況は左の通りである。(午後三時現在)〔東京発〕  
死者、傷者、行方不明、家屋流失・倒壊・焼失・浸水計の順

岩手	一、三〇九	五一一	一、三三六	九、六三〇
宮城	一五三	七八	一五五	二、六八六
青森	九	七〇	二一	三一
北海道	一一	—	四	九五
合計	一、四八三	六五九	一、五一六	一二、七二二

⑦ 大きかった津波被害

〔昭和8年3月11日 東京日日〕  
震源地訂正 三陸地方の大震災の実地調査を終えて八日帰京した中央気象台国富技師は十日、この結果について次の通り発表した。  
記録に残っている同地方の最初の地震は、一千六百年前の貞観十一年五月二十六日で、今回のを入れて十二回の大震災である。宮城、岩手両県の海岸はV字形で口の広い湾が多、いわゆるリアス式海岸で、地形も急傾斜をなしている関係から津浪の被害が最もひどい。本年に入つては地震が非常に多く、一月中だけで百二十八回、二月にも

2 宮古測候所所蔵資料

(1) 岩手県下踏査報告(一) 地震時報 第七巻

岩手県下踏査報告

気象台技師 本多弘吉  
技手 田島節夫

昭和八年三月三日午前二時三十一分頃三陸東方沖合に起つた強震は、地震に依る直接の被害は殆んど生じなかつたけれども、之に伴つた津浪に依り、青森、岩手、宮城等の諸県下に甚大な被害を生じた由報ぜられた。該地方は明治二十九年六月十五日の所謂三陸大津浪に依り、二万余の生霊が犠牲となつた所である。地震後直ちに中央気象台長の命に依り出張、主として岩手県東海岸地方を踏査した。次に其の見聞の概要を報告することとする。

踏査日程

- 三月三日 上野発—一関
  - 四日 一関—花巻(釜石迄盛岡測候所辻技手と同行)—釜石
  - 五日 釜石—(船)—大槌(船)—山田—宮古
  - 六日 宮古—(船)—田老—宮古
  - 七日 宮古(盛岡迄、盛岡測候所二宮技手と同行)—磯鶏—宮古—盛岡
  - 八日 盛岡(田島技手帰京、以後盛岡測候所久保技手と同行)—一関—高田—盛
  - 九日 盛—越喜来—吉浜—大石—(船)—小白浜—本郷—(船)—釜石
  - 十日 釜石—花巻—
  - 十一日 早朝帰京
- 釜石町 停車場附近及び釜石鉾山等は平常通り従業してゐる人が多い。海岸から千米余も上流の大渡橋をくゞり、更に二百米位上流の砂上迄発動機船、小船等が押し上げられたまゝ、破損してゐる。水は大渡橋は越えず、此の辺は二・五米の増水であつたらしく、此の辺は浪は二回襲来した由である。

相当多く、これがいわゆる前震ともいわれるべきものである。今度の地震は関東大震災とほぼ同じ程度で、宮城が岩手よりも大きかつたが、災害は岩手がはなはだしかつた。震源地は(前の発表を訂正)東経百四十四度六、北緯三十九度で、これは金華山の東北東約二百五十キロメートル、釜石の東方約二百三十キロメートルである。各地の津浪の高さを明治二十九年の津浪と比較すると、

- 宮城県 石巻三尺(二十九年より一尺高)、大原浜八尺(二尺高)、鮫浦一八尺(八尺高)、雄勝九尺(二尺低)、追波湾相川二尺(三尺低)、小泉、伊里前湾の中間の外洋にある中山、石浜、名足港湾はいずれも四〇尺(二尺高)、志津川一八尺(二尺高)、藤浜八尺(二五尺低)、気仙沼湾鶴浦一尺(三尺低)。
- 岩手県 高田湾長部一五尺(四尺高)、大船渡一尺(二尺低)、釜石一八尺(九尺低)、大槌一二尺、宮古二尺(二六尺低)、田老二〇尺(二八尺低)。

⑧ 救援追加予算、復旧融資決まる

〔昭和8年3月19日 大阪毎日〕  
三陸地方震災対策に要する内務省所管の昭和八年度追加予算に關しては、過般来内務省首脳部間で鋭意調査、研究のところ、十七日深更に至りようやく大体の計数整理を終了したので、直ちに大蔵省に交渉を開始するとともに、十八日、左のごとく発表した。しかしてこれが総額は国庫予算關係において四百二十万円、低利資金關係において三百万円、合計七百二十万円、内訳左のごとし。

整備費補給二十五万円、救護費および救療費補給四十万円、歳入欠陥その他の復旧資金九十五万円、復旧資金の借入に対する利子補給十万円、災害復旧土木事業補助二百二十万円、土地区画整理費補助二十万円、復興事業事務取扱費十万円、合計四百二十万円。  
なお右の各道県別は左の通り。  
岩手県三百二十八万円、宮城県九十万円、青森県二十万円、北海道二百四十万円(低利資金九千円に対する利子)

釜石港附近の海岸一帯の倉庫住宅等は流失又は破壊され、港内の発動機船は殆んど全部が大破、沈没又は町の中に押し上げられた。住宅、倉庫等は船又は木材等が衝突した為に大破したものが多。郵便局、尾崎神社の辺は津浪が退いた後火災を起し、焼失した家屋が大分ある。港の旧棧橋は破壊、其の近くにあるベンゾールタンクには海面上平均約五米半位の所まで海水に浸された痕が残つてゐる。町の人々の談話に依ると

- 一、地震の振動時間が長く不安を感じた、明治二十九年の津波の経験ある此の地方の人々のうち、若干名は海岸に出て海水の模様に注意してゐた所、急に海水が干き始めたので驚いて逃げた。
- 二、同町役場某氏の談に依ると、地震後十分余に大砲の様な音が聞へ、其の三四分後に電話で大槌が津浪との報に接し、警鐘を乱打し、多数の人々は高処に避難することが出来た。
- 三、地震後約十分の頃、音響が三回位聞へた(菊池氏談)。
- 四、第一回の津浪の襲来したのは地震後十五分、二十分或は三十分等と云ひ、人に依つて異り一定しない。
- 五、川端氏の談に依ると、地震後二十分にして急に海水が干き始めた。丁度其の時出漁しようとしてゐた発動機船三隻は、驚いて全速力で沖合に避難しやうとしたが及ばず、干上つた海底に残され、暫くして沖合から襲来した浪の為、岸壁に打上げられ破損した由である。
- 六、岸壁にゐた船は大破したが、少し沖合に碇を投じてゐた船は大抵助かつた。
- 七、釜石町は電灯消へず、津浪の来る時迄点灯してゐたので、避難に都合がよかつた。
- 八、海岸の低地(ス力)に住居してゐた人々のうち、特に他国から来た人は、津浪の経験がなかつた為逃げおくれた人が多い。
- 九、釜石港外の沖合に出漁してゐた発動機船は、丁度其の時刻頃暫くの間潮流が早く船の進みの悪いのを感じた位のもので、午後帰港し始めて津浪の襲来を知つた。

十、海岸の松田氏は、二階から津浪が四回襲来するのを見た。

**大槌町** 棧橋附近の家屋に浸水の痕跡あり、海面上約四米。

**山田町** 棧橋附近の住宅多数破壊、飯岡方面は特に被害が甚しい。

棧橋附近の家屋には海面上四米半の所迄浸水の跡がある。此処では海水は先ず後退し、津浪が最初に襲来したのは地震後約三十分で、二回目ののが最大であった由。

**宮古町** 漁船、漁具等の被害は大きい、建築物等の損傷は割合に少い。

宮古測候所佐々木氏の談に依ると、第一回の津浪襲来の約五分前にゴーと大きな音響が聞へた由、同所金澤氏が同測候所下で観測された所に依ると、

第一回の津浪は三時十二分に北東より来襲、高さ約八尺(二・四米)  
 第二回……………三時二十三分東より……………十二尺(三・六米)  
 第三回……………三時三十五分東より……………十尺(二・〇米)  
 第四回……………三時四十五分東より……………七尺八尺(二・一—二・四米)  
 三時五十分頃から小波となり、四時十分頃には殆んど静止した由。  
 峭の浜では、海岸の岩石に約六—七米の高さ迄海水の痕があったとの事である。又宮古湾口於ける状況を見ようと浄土浜の突端迄行ったが、浪は襲来の余勢で屹立せる岩礁に奔騰し、十二—三米の高さの岩もほんの上部丈位しか見へなかつた由である。

宮古から山田方面に至る街道に当る宮古橋は河口から八百米余も上流であるのに、発動機船数隻が津浪に押し上げられ、激突した為に橋の二ヶ所切り取られ、交通及び救済事業の遂行に大支障を来した。

**宮古湾奥部** 磯鶏村役場の裏手海岸には海面上約二—四米の所迄浸水の痕跡があり、二回目の浪が最も高かつた。高浜では海岸寄りの低地の民家が破壊又は流失し死者四名を生じた。高浜の海岸の山腹に二・四乃至一・九米の辺まで浸水の為、草が変色してゐる所がある。此の辺では津浪は四回位来襲し、湾の最奥部の津石方面から反射して来たものもあると云はれる。

地震の当夜対岸の白浜にゐた人の談に依ると、同地では殆んど被害

二十九年の際の大体三分の一位と称してゐる。

同村長の御談話に依れば津浪は三回襲来し、其のうち二回目のが最大で浪の高さは割合に低かつたが勢は強く大型金庫が百米以上も押し流されたとのことである。

**吉浜村** 吉浜、吉浜湾は漏斗型に外洋に向つて開口し、湾の形状から云へば最も津浪の害を受け易い形となつてゐる。明治二十九年の津浪の際には全村殆んど全滅の惨害を蒙つたのであるが、其の後復興に際し村は山腹の高地に移転した為、今回は本村の人家には殆んど被害がない。唯都合上臨時に海岸の納屋に居住してゐた人のうち、死者四名、行方不明者十四名を生じた。

以前村のあつた海岸の低地は耕地整理をした許りであるのに、津浪に依り一面砂石におほはれ、荒涼たる様を呈してゐる。浪の高さは矢張り非常に高く、海岸の山腹には大体七—八米、最高九米位の高さ迄浸水で草の色が変わつたり、木材の破片等が打ち上げられたりしてゐた。

吉浜小学校長の御話に依ると、強震後弱い余震あり、それから三四分して沖合に大砲の様な音が聞へ、それから十五六分位してから津浪が襲来した。沖に出漁してゐる人で、其の頃火の様なものが垂直又斜に上るのを見たこと云ふ事である。

吉浜湾口に於ける津浪の状況を調べようと根白、千才等を訪ねた。此の辺では海岸は絶壁となり、人家は高地にある為、海浜にあつた漁船、漁具等が流失した他には余り被害がない。一般に湾口近くでは波の速度が大きい為か海岸に打ち当つた波は随分高く迄上昇する様であつて、余りはつきりした事は分り難い。千才で聞く所に依ると、地震後約二十分余して「ザア〜」と大風の様な音がして、それから五分余経つてから最初の津浪襲来、大きな浪は都合三回来り、そのうち二回目が最大であつたと云ふ。

**唐丹村** 大石、比較的湾口に近く、且幾らか湾口に対して影になる様な位置にある為か、浪の高さは約三米半、人家も稍高地にあり、殆んど被害なく、朝迄津浪を知らなかつた人が多い。

小白浜、被害戸数百余、海岸の山腹には七米半位の所迄海水の痕跡

なく浪の高さ約二—四米(又掘内でも被害なく浪の高さも同様に二—四米位)であつた由。

**田老村** 此の部落の被害は最も惨憺たるもので、五百余戸のうち、高所にある小学校、寺院、役場及び十数戸の住家を残した丈で、他は殆んど全部流失し、一面の砂原と化し、人口約三千余中死者及び行方不明者約一千余名を生じ、六日にも尚発掘中であつた。

村の北寄りの湾岸の岩山には海面上約七米半の高所に衣服の片、木片等がひつかつており、其の辺迄樹木が損傷を受けてゐる。海岸より約五百米奥の小学校の南方山腹の草は地上四米の所迄浸水の結果変色してゐる。土地の人々の談に依ると、地震後三十分余経つてから再び微弱な地震を感じ、其から十分位してからゴーと低い音響が二三回聞へ、数分の後津浪が襲来した。此処では最初の浪が最も高かつたと云ふ人が多い。村が低地にあり且つ津浪の勢力の猛烈であつたのは勿論であるが、其の他に、地震後暫くは警戒したが何も異常がないやうなので再び就寝した人が多し。津浪襲来の前にあつた音が低く平素の波の音と紛らはしかつた、村から山迄可なり離れてをり且つ避難に適當な通路が少かつた等の事も多数の犠牲者を生じた原因である様である。

**女遊戸** 湾の奥部海岸で山腹の草が七—八米の高さ迄変色してゐるのが認められた。

**高田町** 殆んど被害なし。

**細浦** 海岸の低地にある為被害甚し。

**大船渡町** 海岸寄りの民家に倒壊又は浸水したものが多し。大船渡の民家の壁が約三米の高さ迄濡れてゐた。

**盛町** 明治二十九年の津浪の際には本町にも被害があつた由であるが、今回は浸水家屋は全然なかつた。

**越喜来村** 海岸寄りの低地には海岸から三四百米の所迄浸水し、相当多数の家屋が流失又は破壊され、相当多数の死者も生じたが、湾口が狭い所為か浪の高さは比較的低く、学校の所で二米余、郵便局の辺で二—三米位の高さまで海水に浸された痕があり、土地の人は明治

がある。浪が斯様に高かつたのにか、はらず、被害が比較的少ないのは、土地が海岸から急に高くなつてゐて、村の大部分は高地にある為被害を受けず、又避難するにも便利であつた為ではあるまいか。

**本郷** 三方山で囲まれた稍広い低地にあつた本部落は、僅かに一戸を余す他は全部流失、人口六百二十余のうち死者及び行方不明者合計二百二十七名を生じ凄惨を極めてゐる。地震と同時に津浪を予想して早速高地に避難した人は勿論助かつたが、津浪に襲はれた人々は適當な避難路が少なく、遂に多数の人々が犠牲になつた様である。

**後記** 今回の津浪地域踏査に依り得た主な事項を二三列記すれば、次の如くである。

**津浪** 地震に依る直接の被害はない。地震と津波襲来との間に大砲の様な音響を聞いた所が多い。最初に海水は著しく後退、其の後三回或は四回に亘つて来襲し、大抵の所では第二回目のが最高、第一回の津浪の来たのは地震後三十分乃至四十分位してからである。岩手県下では津浪の最高は九米位で一般に明治二十九年の際の三分の一位であるらしい。

**被害** 津浪に依る被害は勿論其の土地の地形、湾の形状、深さ、津浪襲来の方向、其の他に支配されるものであるが、概して云へば湾の奥部では被害甚しく、人命、家屋等の莫大な損傷の他に海岸造営物、発動機船、漁船、漁具等の流失又は破損は実に甚大である。又家屋、橋梁等の破損は津浪に依つて打ち上げられた船、木材等の衝突に依つて生じたものが多い。

災害予防に就ては、平素より地震及び潮汐の観測設備を完備し不慮の災に備へるべきは勿論である。此の地方の主な生業である漁業上の能率から云へば困つたことではあるが、明治二十九年の津浪では全滅の憂目を見た吉浜が、復興の際に高地に全部落を移転した為、村落には殆んど被害を受けなかつたのは充分考慮に値する実例である。其の他高地への避難路を準備しておく、津浪襲来を急報する手段を講じておく、防波林・防波堤を作る、橋梁の両側とか海湾に面した建築物等は堅固な木柵等で保護し、船や木材等が直接衝突するのを防ぐ、船は

しつかりつないで置く等、数多の恒久的及び応急的の予防方法があるであらう。何れにせよ、此の實際を斟酌して適當なる災害予防の方法を講ぜられん事を切望する次第である。

終りに臨み、今回の踏査に際し多大の御厚意と便宜を御与へ下さった各位、特に福井盛岡測候所長、同所及び宮古測候所所員諸氏並びに小安岩手県水産試験場長に厚く御礼申上げる次第である。

(2) 三陸沖強震に伴ふ津浪調査報告「験震時報第七卷」

三陸沖強震に伴ふ津浪調査報告

盛岡測候所調査

三月三日午前二時三十一分三十八秒九の強震の震源地は、当地震計の気象観測に依れば、既報の如く震央地は当所より南七十七度東二百六十二秒の地点即ち釜石町真東二百秒の海底殆んど表面に出現したるものなり。此の辺は所謂日本海溝内にして水深約五千五百米なるを以て津浪を誘発し、数十分後には三陸沿岸一帯に巨り激甚なる被害を醸せり、左に津浪実地調査の概要を報告す。

一、津浪襲来の時刻

宮古測候所員の観測に依れば、強震後数回海水に注意したるも何等異状無かりしに、午前三時二分風吹き荒むが如き沖鳴りしたるを以て直ちに湾内を見れば、棧橋に繋留したる発動機船の傾斜せるを認めたり。依って減水し始めたは、午前三時以前と推定す。減水は約六尺なりとす。午前三時八分に至り烈風吹き荒むが如き物凄き音を発しつつ、湾中央部を殆んど直線に暗夜にも波頭白く津浪襲来するを認めたり。而して午前三時十二分藤原須賀に達せり。即ち強震後四十一分なり。

各港湾に就いての時刻は、目撃者の談区々にして詳細知るを得ざるも、大体に於て広田湾より唐丹湾に至る沿岸南部にては強震後二十分乃至三十四分に平均二十九分を要し、釜石湾より宮古湾に至る沿岸中部に於ては強震後二十八分乃至四十五分にして、平均三十三分を要し、宮古湾以北種市海岸に至る沿岸北部にては強震後二十九分乃至四十分にして平均三十五分を要せり。而して沿岸全部の平均は三十二

乃至十五尺、宮古湾測候所下にて十二尺、磯鶏村にて十五尺、田老湾二十八尺なりとす。閉伊半島重茂村千鶴及石浜に於ては四十尺、小本村、田野畑村羅賀、普代村太田名部にては孰れも四十三尺、宇部村、小袖二十七尺、久慈湾十八尺、侍浜村三十五尺、小本村、種市村に於ては共に二十尺なり。各地の津浪の高さ並に襲来時刻を列記すれば左の如し。

津浪の高さ並に襲来時刻調査表

Table with columns: 湾名 (Bay Name), 観測地名 (Observation Location), 津浪の高さ (Wave Height), 第一波襲来時刻 (First Wave Arrival Time), 第二波襲来時刻 (Second Wave Arrival Time), 摘要 (Summary). Rows list various bays like 高田湾, 米田湾, 小田湾, etc., with their respective wave heights and arrival times.

分強なり。

一、津浪襲来の前兆

別項報告の如く沿岸各地に於て、砲声或は遠雷の如き音響を聞き、其後間も無く海水著しく減退したるを認めたる所多し。広田、越喜来、唐丹、釜石、大槌、山田、宮古等にして、時刻は詳かならざるも強震後十分乃至二十分なり。其の爲め津波襲来を予察して高所に避難したるを以て、明治二十九年の津浪当時比較し割合に死者の少なかりしは不幸中の幸なり。

一、津浪の経過

宮古測候所員の観測に依れば、宮古湾に於ける津浪第二回目の襲来は午前三時二十三分に第一回目より十一分後、第三回目は午前三時三十五分に襲来して第二回目より十二分後なり。又第四回目は午前三時四十五分にして第三回目後十分なり。同三時五十分に至り小波となり、午前四時十分湾内沈静せり。即ち十分乃至十二分の周期を以て波浪襲来せり、各港湾に就いて概述すれば広田湾、大船渡湾は津浪第一波より約五分後第二波襲来し、其後も五分間置き位に第三波第四波襲来したるもの、如く、其の周期著しく短く午前六時頃湾内沈静せり。

綾里湾、越喜来湾、吉浜湾、唐丹湾は十五、六分置ききの周期を以て第二、第三波襲来し、午前五時乃至六時に至り湾内静止し、釜石湾、大槌湾、山田湾は約十分の周期を以て波浪を繰り返し、船越湾は周期短く五分乃至十分を以て繰り返したり。閉伊半島重茂村沿岸にては、第一波と第二波間は五分乃至七分を要し、第二波と第三波間は十分を要せり。其他外洋に面したる沿岸北部にては概して周期長く、第一波、第二波間は平均十六分を要し、第二、第三波間は平均十八分を要せり。津浪の最高は、流失を免れたる海岸建築物又は岸壁等に残れる浸水痕跡に依り所員の調査したるものにして、各地共第二回目の波浪最も高く、其後は三回四回となるに従ひ漸次衰へたる如し。広田湾、大船渡湾は十尺乃至十五尺、綾里湾は平均十五尺にして最高四十尺に達したる所あり。越喜来湾十尺、吉浜湾三十尺、唐丹湾二十尺、釜石湾十八尺、大槌湾十二尺乃至十五尺、船越湾十八尺乃至二十尺、山田湾八尺

Table with columns: 湾名 (Bay Name), 襲来時刻 (Arrival Time), 波高 (Wave Height). Rows list various locations like 重茂村, 釜石, 山田, etc., with their wave arrival times and heights.

一、強震津浪に伴ふ管内地鳴報告

管内観測所並に町村役場等の報告を総合すれば、強震後大砲或は遠雷の如き音響を聞きたる所多し。其の時刻は強震直後と報告する所もあり、詳かならざるも大略広田湾より山田湾迄は強震後平均十六分に於ては二十七分乃至三十分を要したる所多し。其の聞きたる方向は地

形等に依り相違あるは勿論なるべきも大体東寄りの所多く、稀れには南東或は北東の方向に聞きたる所あり。盛岡測候所所員の観測したるものを摘記すれば左の如し。

午前二時五十八分(即ち強震後二十七分)屋外にてドンドンと云ふが如き音響を続けて二回聞きたり。方向は東の空稍高く(地平と約三十度の角度)して、余韻全く無くアツと思ふ間瞬時にして止みたり。底力のある音響なりしも割合に弱し。

尚管内観測所並に町村役場等の報告を列記すれば左の如し。  
気仙郡

小友村役場報告 津浪二十分前大爆音を聞く。

吉浜村役場報告 強震後十五分大砲の如き音響を聞きたり。

小友村只出、戸羽太郎氏報告 強震後大砲の如き音響を聞き其の後十五分乃至二十分にして津浪襲来す。

盛農学校長小山幸右衛門氏報告 強震後三十分南東に当りどんと云ふ音響を聞く。

末崎村役場報告 強震後非常に高い短い雷鳴の如き音響あり。

越喜来村役場報告 強震後約十分遠雷の如き音響二回聞く。

上閉伊郡

釜石町役場報告 強震後十分午前二時四十分頃遙るか沖合に当りどんとと底力のある遠雷の如き音響三回聞きたり。其後海水減退せり。

甲子村大橋鉄山報告 強震後砲声の如き音響あり。

下閉伊郡

船越村役場報告 トラック数台疾走し来たるが如き音響を聞きたり。

山田町役場報告 強震後十分どんと云ふ大砲の如き音響を聞く、其れより十分後海水減退し、其後十五分津浪襲来す。

(備考) 宮古測候所並に鮎ヶ崎灯台事務所附近にては音響を聞かず。

九戸郡

種市村役場報告 強震後大音響を聞く、海岸にては汽車の走るが如き音あり。

藤沢町役場報告 強震後約三十分ドンドンと云ふ音響を聞く。

西磐井郡

若柳村小幡徳四郎氏報告 強震後南東に大砲の如き音響を聞く。

一、強震津波に伴ふ発光現象報告

午前二時三十一分の強震未だ歇まざるに、当所より遙るか南方花巻方面に当り発光現象を認めたり。時刻は午前二時三十三分にして地平より上空に向つてポカッポカッと幕電の如く可成りの幅を以て光りたり。色は淡青白にして光度弱き方なり。因に此の発光現象の約一分前に停電消灯し四圍暗黒となりしを以て良く観測するを得たり。尚管内盛町、気仙町、湯口村、浄法寺村に於ても認めたる旨報告あり。時刻は孰れも強震最中にして方向は内陸地方は南寄り、沿岸地方は東寄りなり。

各地の報告を列記すれば左の如し。

気仙郡盛農学校長小山幸右衛門氏報告 強震最中戸外にて東南東の方面に当り明るい青光数回認めたり。

気仙郡気仙町役場報告 津波前東方に発光現象を認めたり。

二戸郡浄法寺村関貞治氏報告 強震最中南東の空に一時発光現象を認めたり。

稗貫郡湯口村中根子阿部竹氏報告 強震避難の爲め玄関の戸口迄出、暫く立ち止つてゐる間に南方の空に当つて突然ピカッと青白い閃光を見たり。其の爲め一瞬間地上を青白く照らしたるも、忽ち消へ星より稍々大きく見へたり。間も無く二度目の閃光が同じ方向に同一の光を發したり。

一、強震津波に伴ふ井戸水変化報告

今回の強震津波に伴ひ沿岸地方に於て井戸水に変化を來したる旨報告する所あり。多くは強震津浪直後より著しく減水したるものらしく、所によつて殆んど渾濁状態となりたるものあり。越喜来村並釜石町より磯鶏村に至る沿岸中部に多く、沿岸北部に於ては侍浜村役場より減水したる旨報告ありたり。

上閉伊郡釜石町役場報告 津波当時より井水著しく減水し、又は殆

き音あり。

宇部村小袖漁業組合報告 強震後(午前三時五分頃)砲声の如き音響二回聞きたり。

野田村役場報告(久喜) 南東に二回ハツパの如き音響を聞きたり。

山根村役場報告 強震後十分地鳴あり。

葛巻村役場報告 強震前後地鳴あり。

二戸郡

浄法寺村関貞治氏報告 強震後に地鳴あり。

田山村小学校報告 強震後三十分南東に地鳴を聞く。

荒沢村役場報告 強震後大砲の如き音響あり。

一戸高等女学校報告 強震後(午前三時頃)砲声の如き音響を聞く。

福岡町役場報告 強震後鳴動あり。

金田一村釜沢事業区事務所報告 強震後(午前三時頃)砲声の如き音響二三回聞く。

岩手郡

西山村葛根田川発電所報告 強震後北東に二回砲声の如き音響を聞く。

浅岸村大志田事業区事務所報告 強震後遠雷の如き地鳴あり。

栗石村役場報告 強震後遠雷の如き音響あり。

松尾村松尾鉱業所報告 地鳴あり。

御堂村亮演氏報告 強震後遠雷の如き音響を聞く。

和賀郡

湯田村役場報告 強震後大砲の如き音響を聞く。

江刺郡

岩谷堂町役場報告 強震後鳴動を聞く。

米里村役場報告 強震後大砲の如き音響三回聞く。

胆沢郡

永岡村役場報告 強震後二回鳴動を聞く。

東磐井郡

大原町小学校報告 強震後東方に鳴動を聞く。

ど渾水したる所もあり、四日午後より漸く常態に復したり。

気仙郡越喜来村役場報告 井戸水一週間前より渾濁又は混濁す。

下閉伊郡船越村役場報告 津浪数日前より井戸水減じ、津浪後は殆んど渾濁状態となりたるものあり。

同 郡織笠村役場報告 掘抜井戸水湧出、量半量以下となる。

同 郡磯鶏村役場報告 津浪前日より井水減少したるものあり。

九戸郡侍浜村役場報告 強震後井戸水減少す。

一、強震津波に伴ふ海底岩石の移動報告

今回の津浪に依り沿岸全部に亘り土砂礫陸上に運積せられ、耕地等多大の被害蒙りたる所多く(別項被害報告参照)殊に宮古測候所員の踏査するところに依れば、下閉伊郡及び九戸の両郡下に於て相当大なる海底岩石の移動したるもの多く、左に報告す。

岩石の大きさ及び移動間数は目測なりとす。

下閉伊郡

田野畑村平賀海岸 海底四尋の所にありし岩石一間半位の大きさのもの西へ約三十間移動す。

普代村太田名部海岸 海底四尋の所にありし岩石南西へ約百間移動す。

九戸郡

野田村海岸 海底四尋の所にありし岩石約二間半位の大きさのもの北へ約三十間移動す。

宇部村小袖海岸 海底岩石約一間位の大きさのもの西へ約六十間移動す。

長内村 海底四尋の所にありし岩石約五尺の大きさのもの海岸に打ち上げられたり。

(3) 山田町田老村方面災害地踏査報告「震害時報第七巻」

山田町田老村方面災害地踏査報告

岩手県測候技手 二宮三郎

命に依り三月三日強震並津浪直後の下閉伊郡山田町方面及被害最も

激甚称さる、田老村方面の災害地実況を踏査すべく、五日早曉出発、陸行宮古測候所に立寄り踏査打合せの上、山田町に至り、翌六日折返し田老村を踏査、七日帰所、即ち其概況を報告す。

山田町

約一杆の極めて狭い湾口を而かも北東に開口し、外洋とは船越半島を以て殆ど完全と言って良い位遮断されてある巾着型の山田湾沿岸の各町村にあつては、其波浪の勢力や被害程度はV状に開口せる本島の他の港湾比し一般に少い模様で、只この湾では前回明治二十九年の三陸大津浪の際と同様、今回も明らかに山田湾に南位せる船越湾々奥に突き当りたる外海よりの直接波浪が右廻りして狭長且つ低湿なる船越地峡を溢流し、山田湾に入り同湾々口より来れる波浪と相前後して、其反射経路に当る海岸町村に暴威を逞うしたるものと推さるゝものがある。

山田町役場にて津波当夜、発震前後山田町南方伝作鼻と称する附近海岸にて作業中の佐々木福松及清川源太郎の両君に就き其語る所を総合するに、地震後約十分にて一回「ドーン」と言ふ砲声に似たる音響を聞き、其後約十分にして海水の引退を目撃し異常なるを直感するたるに、其後再び十二三分を経て津波第一回の波浪が波頭を光らしつゝ、(深夜に拘らず波壠明かに認め得たりと言ふ)、北東より(大沢部方面に当る)押寄せ来りたりと言ふ。而て第二第三の波浪の襲来は其後約十分の間隔をおきたるもの如く、第二回目の波浪の高さが最大なるもの、如し。即六日朝小職の山田町棧橋附近の波浪の痕跡に依り実測せる十五尺を最高波高と推し得べし。

地震の強さに就きても異口同音に緩慢にして且極めて長時間水平に震動し時計止りたると称し、中には棚上もの落下せる所あり。而して地震に依る被害は全く無きものの如く、震度は強震(弱き方)と推して可なるものあり。

津浪による山田町の被害を見るに、其北半に於て流失及倒壊家屋極めて少く、殆ど海岸通の一部に限られるに反し、其南半飯岡方面に甚しき分布状態を示し、飯岡の如きは倒壊家屋算を乱し流失の踏査た

崎山村女遊戸

田老村に向ふ陸路をとり途中崎山村字中の浜部落及女遊戸部落を通す。

漏斗状の小入江の奥にある戸数二十四の小部落なるも汀線より約七百米を距てたるため、僅かに数戸の浸水を見たるのみにて、被害としては漁具其他の流失あり、附近中の浜部落にある土橋の流失より推算するに浪高二十五尺を求めたり。

山田湾沿岸踏査見取図

田老村被害見取図



田老村

明治二十九年の三陸大津浪に際し、釜石以北の最激被害地たりし田老村は、今回も亦沿岸に於て其惨状右に出るものなく、一世の視聽を集めたり。即ち戸数五六〇戸中山手にありし小学校役場及び寺院と少数の民家を残し、流失家屋実に五〇〇余を算し人口二七七三中死者五八四、死亡と推定される不明者三二七、負傷者一二二を出す等、其惨鼻の限りを尽せり。小職踏査中(六日)猶続々死体の発掘あり、実に鬼気迫るものありき。

るものあり、西方七八百米山麓方面迄濁潮を押し上げたり。以て斯る被害分布を遮断せんには尚充分の考究を要するも、湾北大沢海岸よりの反射波を受く衝路に位する外山田町北半の護岸工事の施工しあるに反し、南半飯岡の然らざるに依る事多かるべく、護岸工事の有力なるを如実に示せるものと推す。山田町役場当局の言ふが如く町民の統一訓練の宜しきを得てか、流失家屋二六六戸、倒壊家屋五九戸に比し、人命の損失少なく僅かに死者七名、行衛不明一名を出したるは不幸中の幸と称すべきなり。

織笠村

山田町より南行約二杆にして織笠村に至る。この村落は護岸工事の殆どなき海岸に面せる戸数約三九〇の小漁村なるが、極めて地形的に恵まれたる部落にて、左方で伝作鼻、右方に浪板崎を突き出し防波堤の如く且つ前面には大島小島女郎島の三島嶼を控へ防災には屈竟なる地形にして、之が為には織笠本村にて最高浪高八尺にして僅かに浸水家屋四一戸を出せしのみにて一の倒壊流失家屋なかりき。只織笠川河口近くに架しある橋梁が破壊され、其上流二百米迄発動機船十数隻打上げられたる被害を顕著なりとす。尚里人に依れば、地震後井戸水の半減せるものありと言ふ。

大沢村

山田町より大沢村に向ふ途中、県道附近汀線より三百米辺に大型の発動機船の横はれるを数個所車上より見る。大沢村は山田湾の北岸に位し、船越地峡を奔流し来る波浪と山田湾口より入り来りたる波浪との合流の衝にあるものと想像され得る地点と考へらるべく、流失破片の大半北西方に押し上げられあるを見る。村民の談種々総合するに波勢も山田織笠の比にあらず、恐らく二十尺内外と推され戸数二一七の小漁村ながら五八戸の流失と五十戸の倒壊、三四戸の浸水家屋を出し、一名の死者さへ出せり。其他漁具海産物の被害も相当に上るべく、村内の惨状は如上の事実を物語れり。織笠大沢両村共、地震程度は略山田と相似たるものあり、尚強震直後西方上空に青色の光象を認めしものと、地震後井戸水の減少を唱ふるものあり。

先づ田老本村に至る大平部落を見るに、ここは海岸より遠く地盤も高き為家屋の流失を免れるも全部倒壊飛散しあり。此処より田老本村を望見するに、五百余戸を連ね近く町制施行に村民の意気揚りし本村は、一望何等倒壊流失せる家屋の破片すら無く、荒涼たる砂原と化し黒く一條在りし日の道路の走るあり。山手近く流失を免れたる全壊家屋の残骸の整理に黙々として従事せる村民の心情を憶ふ時、悲愴の氣に打たれたり。

村長関口松太郎氏に來意を述べ、其れより種々当時の状況を見聞し、其結果を纏めるに、地震感覚は各地と同様緩慢にして極めて長き水平震動を続け、僅かに座り悪しき物棚上より落下する程度にて、被害全くなく震度階級強震(弱き方)と推されたり。而して第一回の津浪は本震後約十分に来り、続いて第二回目もの二十分後、第三回は第二回後約十五分に来り、第二回のもの勢力強大なりとは、山田湾に於けるものと相似たるものあり。田老湾は湾と称するも外洋に面する一小入江の如き観ある故、其波浪の襲来し来る方向を視たる人々につき種々聴取せしも真夜且つ波声の特に異状ならざりしために明かならざるものあり。只湾内北部にて断崖状紫草に印せし痕跡に依り宮古測候所金澤技手の実測に依れば、湾奥北部附近に於て最高波高十一米五を示せりと、且つ全村の浸水区域北西方に拡大面積大なる等に依り僅かに波浪の南東寄りより襲来せるを想像し得たり。尚小職の実測に依れば、田老本村入口平坦なる畑地より急隆せる山麓にある(汀線より約八百米)杉木の樹幹に印せし濁潮の痕跡より之を推定するに約二十八尺を算せり。斯くの如き一瞬の激浪にして能く五百余戸の流失家屋と千に近き人命を損せし惨害の跡を考ふる時、其原因種々あらんも地形的不利大なるものありと推意す。即ち田老村は東方海に面し、三方山岳地帯を以て圍繞され、中に極めて平坦且稍広闊なる地域を抱き海岸に平行小砂丘あり、殆んど海面に近き田老村を僅かに波浪より防げるを以て一朝海水の氾濫あらんか瞬時にして怒濤の全村を呑むべき地形にありとす。且つ非常時に際し避難すべき山地の遠き事、其山路の險悪にして登行に容易ならざる事、本村より山手への道路少なく



不便多き事、尙当夜は激震と同時に電灯消えしも暫くして再び点灯せしに依り之が為人心に幾分の安意を与へ再び就寝せしも、今回の惨害を大ならしめたる所以にあらざるやと推意す。  
次に這般の津浪に關し其前兆と覺しきものを種々聴取せしに、村民等しく言ふ所に依れば、例年冬季に入るに先ち不漁となる鰯魚が昨秋以来引続き大漁なりし事等唱へゐたり。

(4) 宮古湾に於ける襲来の観測並びに被害地踏査報告。  
重茂村災害地踏査復命書 (気象庁宮古測候所所蔵資料)

昭和八年三月三日 三陸津波  
一、宮古湾ニ於ケル襲来ノ観測並ニ被害地踏査報告  
一、重茂村災害地踏査復命書  
宮古測候所

報告書

小職儀

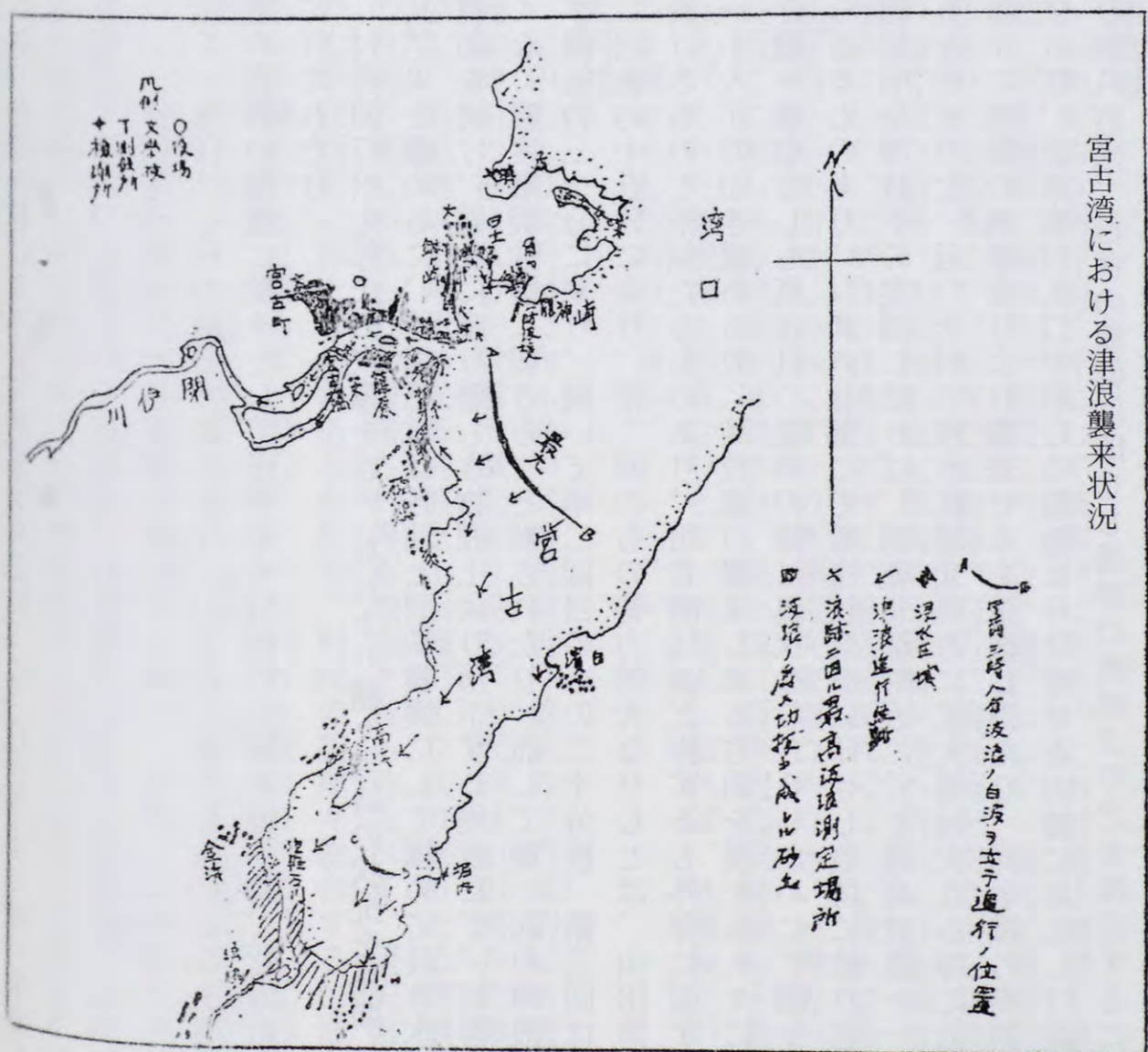
三月三日宮古湾ニ於ケル津浪襲来ノ観測ヲ担任シ、並ニ湾内災害地踏査候ニ付、左記及報告候也。

昭和八年三月五日

宮古測候所長 福井規矩三殿

測候書記 金澤孫次郎

三月三日午前二時三十一分三十五秒強震アリ。振子時計止り、棚ノ物落下ス。小職非番ニテ自宅ニ在リ、強震ニ因リ直チニ出勤ス。途中、川口附近ニテ海水ヲ注目セシガ、何等異常ハナシ。地震計ヲ観レバ尚震動止マズ、時々湾内ヲ諸所見廻ハシタリシモ、異常ヲ認メズ。午前



宮古湾における津浪襲来状況

定スル事能ハザリシハ、異々モ遺憾トスル所ナリ。  
驗潮儀ヲ据付ケタ建物ハ角力浜竜神崎ノ宮古築港事務所作業現場内ニ漂着セリ。築港事務所ニテモ応援シ、各所ニテ景象紙捜索セシモ、全然行方不明ナリ。

三日午前六時半、測候所下ノ自然岩ノ側面ニテ波浪ノ通過セル濡跡ヨリ水面マデ三米三ト測リ、潮差〇米三ヲ加ヘ最高波浪三米六(十二尺)ト算セリ。  
三日午後二時、外海ニ面セル峭ノ浜ニ於テ側面岸壁ノ波浪ノ通過セル濡跡ヨリ水面マデ七米二ト測リ、潮差〇米六ヲ減ジ最高波浪六米六(二十一尺)ト算セリ。  
宮古ニ於ケル被害概況ハ、死者二名、負傷者五名、家屋ノ流失十五戸、半潰十四戸、床上浸水七十四戸、棧橋ノ流失二十四、船舶ノ流失、発動機船十一隻、小舟四十一隻アリ。

磯鶏村ニ於ケル踏査ノ結果ハ、磯鶏ニ於テ強震ハ時計止マル程度、津浪襲来前、海水ノ干退セシハ海岸ヨリ約五十間ニテ、間モナク三時十五分第一回ノ津浪襲来シ、磯鶏須賀ノ南端「カッサゲダチ」(地方名)ノ出崎ヨリ右ニ廻リ、閉伊川河口ニ向フ。此ノ波ハ陸地ニ被害ヲ及ボサズ、約十分後ニ襲来セシ第二回ノ波浪ハ強烈ニシテ、須賀近クニ在ル家屋四戸流失シ、五戸半潰、十九戸浸水セリ。負傷者三名ヲ出し、小舟十隻流失ス。波浪ノ高サ十五尺。第三回ノ波浪ハ第二回後十分ニシテ襲来セリ。何レモ須賀伝ヒニ北ニ向ツテ突進ス。

高浜ニハ磯鶏須賀突端ヨリ分岐セル波浪ノ漸次突入セルモノナリ。部落ノ前方ニ当ツテ広大ナル砂丘(突出セル半島ニテ造船場、鰯粕製造納屋等ノ建物アリ)、此処ニ居リタル男女四名、津浪襲来ニ因リ部落地ニ避難スル際、遂ニ波浪ニ浸ハレ三名溺死セリ。此ノ砂丘ノ陸地ニ接シタル部分、約五十間波浪ノ為切抜カレ、発動機船ノ航行出来得ル深サトナリ、先端部ノ残レルハ今回ノ大ナル痕跡ナリ。部落地ニ浸入シタル波浪ノ高サハ、七尺程度ニテ襲ヘリ。家屋ノ流失二戸、半潰二十四戸、浸水二十四戸、負傷者三名、伝馬船二十隻流失シ、発動機

距離五〇〇米ニシテ、即チ波音アリシヨリ一分間二一二五米ノ速度ナリ。此ノ第一回ノ波浪ニヨリ、測候所下河口附近ノ住宅ノ戸障子ヲ波ヒ取ラレタリ。地図ノA・Bニ至ル直線ノ中、中央部ハ最モ強烈ニシテ、磯鶏須賀ノ突端ニテ分岐シ、一方ハ高浜方面ニ進行シ、一方ハ此処ヨリ右ニ廻リ磯鶏須賀・藤原須賀ヲ洗ヒツ、閉伊川ノ河口ニ向ヒテ進行ス。其ノ勢殊ニ激烈ニシテ、第二回、三時二十三分ノ波浪ト合シツ、増々勢ヲ逞シウシ、川口側ノ家屋ヲ粉砕微塵ニ折碎キ、其ノ物凄キ惨状ハ眼前ニ見テ居ラレヌ程ノ状景ナリキ。波ノ高サ三米六(十二尺)ニ及ベリ。此ノ河口附近ヲ襲撃セシ波浪ハ、強烈ナルモノハ漸次湾内ニ進ミ、第三回ノ波浪ヲ合シツ、鉦ヶ崎海岸ヲ襲ヘリ。一方閉伊川筋ヲ廻ルモノハ其ノ勢烈シカラザルモ、中央部ハ河岸ノ通路ヨリ高ク、山成リヲナシテ、川筋ニ繋留セル発動機船八隻、宮古橋上方マデ押シ運ビ宮古橋ニ二ヶ所大ナル毀損ヲ生ゼリ。河口附近ヨリ二号金庫ヲ上流ニ向ケ約七百米持運ヒタリ。河岸一帯ノ家屋ハ大ナル被害ナク、浸水セシノミナリ。鉦ヶ崎海岸ヲ襲フモノハ殊ニ甚ダシク、三時三十五分第三回ノ波浪ト合シ漸次右廻リヲナシ、海岸ノ家屋ハ殆ンド玄關部ハ破壊サレ、全潰シタル家屋モ数戸アリ。発動機船ノ道路ニ打揚ガレルアリ、枕木ノ道路ヲ埋メ、通行不能トナル所夥シ。此ノ波ノ高サハ三米(十尺)ノ高サデ右廻リヲシ、日立浜ヨリ角力浜マデ達セリ。此処ニ至ルモ波浪ノ勢ハ衰ヘズ、波高三米ヲ降ラズ。第四回ノ波浪ハ、三時四十五分約二米(七・八尺)ノ高サデ襲来セリ、是ヨリ湾内ハ尚騒擾シキ波音ハ絶エズ、午前四時十分ニ至リテ湾内ハ全ク静穏ニ復セリ。

此ノ津浪ノ襲来シタル時ノ潮位ニ就テハ、三月一日午前三時十分ハ一七五糎、同二日ハ一七三糎ナレバ、三日ノ午前三時十分ノ潮位ハ一七一糎ト概算セリ。宮古湾ニ於ケル平均潮位ハ一六八糎ナレバ、即チ津浪襲来時ハ平均潮位時ナリ。  
三日午前五時、日立浜ニ据付ケタル驗潮所ニ至リ検分セシガ、驗潮所ハ跡形モナク流失シ、僅カ波打際ニ器械ノ大破セルモノヲ拾得セリ。肝腎ノ景象紙ハ取外レ、正確ナル海水ノ干退ノ模様ヤ波浪ノ高サヲ算

船五隻破損ヲ蒙レリ。

金浜ニハ約五・六尺ノ波浪襲来ス。非住家一棟流失、半潰家屋四戸、浸水四戸、伝馬船十隻流失ス。人畜ニ被害ナシ。此ノ浸水地一帯ニ鰈・ドンコ等ノ魚類打揚ゲラレタリ。

津軽石村ノ内法ノ脇ニハ五尺程度ノ波浪襲来シ、床上ニ浸水シタル家屋四戸、床下浸水五戸アリ。

大字赤前ニ於ケル津浪襲来ノ模様ハ、午前三時八分宮古地方ニテ始メテ波浪ノ音セシ時ハ、遠方ニ轟カニ轟々ト云フ音ヲ聞キタリト云フ。

此ノ音、次第ニ高クナリ（高浜・金浜ニ襲来セシ時ナルベシ）、三時十五分頃ヨリ海水急激ニ干退ス。此処ノ海岸ハ遠浅ナル為メ、干退セシハ七・八十間ニ及ベリト云フ。三時二十二分第一回ノ波浪襲来ス。

此処ニ襲来セシ波浪ハ磯鶏村ヲ襲撃セルモノトハ別個ニシテ、堀内沖ニテ始メテ波浪頭ハレ押寄セシモノナリ。此ノ部落ノ東側、釜ヶ沢ヨリ右廻リシテ、津軽石川ニ向ツテ進行ス。海岸ノ保安林松木多数、南西方ニ向ヒテ打倒サレタルアリ。第二回ノ波浪ハ最大ニシテ、第一回ヨリ十分後襲来シ、海岸ヨリ五百米以上モ浸入セシガ、家屋ハ大抵高地ニ在ル為メ大ナル被害ヲ免カレタリ。平地ニ在ル家屋二戸流失、一戸全潰、浸水家屋六戸、鰯粕製造納屋七棟流失、最大ナル波浪ノ高サハ、痕跡ヨリ海面マデ十五尺ト推定セリ。

伝馬船十隻、小舟十五隻流失セリ。釜ヶ沢海岸ノ里道ノ石垣、五十間崩壊ス。人畜ニハ被害ナシ。第三回ノ波浪ハ、第二回ヨリ約十分後ニシテ勢弱ク押寄せタリ。尚海面ハ騒擾シク、四時頃静止セリ。海岸又ハ部落地ノ流失シタル間ノ所々ニ、柱ヲ土中ニ打挿シテ建テタル鰯粕製造納屋ノ残存セルハ、特ニ注意ヲ要スル所ナリ。

浸水地ニ打揚ゲラレタル魚族ハ、鰈・鰻等アリ。鰈ハ殊ニ夥シク部落民ハ籠ニテ幾十トナク笈運ベリト云フ。貝類ハアカガヒ多数打揚ゲラレタリ。

堀内ハ岸海急斜ニシテ、第二回ノ最大ナルモノ五・六尺ノ高サニテ、緩慢ナル波浪襲来シ、鰯粕製造納屋一棟全潰シ、小舟数隻流失セルノミ、家屋ノ被害ナシ。

象モ何等認メズ、三日午前十時頃村落ニ津浪ガ襲来シタルノ報ニ接シ、庁員ヲ派シタル次第アルトノコトナリ。灯台ハ岸壁上ニ二十九米、直下ノ水深ハ四十尋ニシテ津浪ニ因ル増水ハセシ模様ナルモ、波ノ音ハ全然聞エザリシ由。

是ヨリ山道ヲ越エ姉吉ニ至ル。此処ハ重茂部落中最モ悲惨ヲ極メ、部落十四戸全部流失、外ニ根滝建網ノ漁具置納屋アリテ漁具ノ流失ハ多大ノ損害ヲ蒙レリ。住民百二十名ノ内、辛ジテ三名ノミ生存、九十九名ノ行方不明者ト十八名ノ死者トアリ。部落地ハ全ク荒野ト化シ、石河原トナリ、唯一ツノ屋敷跡ト認ムルコソクリート面ニ餅搗臼ト電燈変圧器一個アルノミ。踏査中一人ノ人影モ無ク、実ニ静寂其者ナリキ。

此ノ部落地ハ海岸広ク奥地狭ク、波浪ノ奥地ニ襲来スルニ随ヒ、益々浪高ヲ増シ、四十尺ノ高地ニ在ル家屋モ流失セリ。殊ニ両側ノ山ハ断崖ヲ成シ、避難スベキ術モナシ。海岸ノ北側山ノ中腹目通り五寸乃至八寸ノ松木数本沖ノ方ニ向ヒテ根拔ギ或ハ途中折レトナレルアリ。此処ヨリ海面マデ十二米三（四十一尺）ト測定セリ。海岸ヨリ七百五十米ノ奥地マデ浸水セリ。此ノ部落地ノ奥地ヨリ海岸方面ヲ眺ムルニ、宛然ニ枚屏風ヲ立テタル如ク、部落ハ其ノ狭キ部分ニ位ス。是等ガ全滅ノ原因ナルベシ。

是ヨリ千鶏ニ至リ踏査ス。此ノ部落ハ海面上四十尺ノ高地ニ在リ、波浪ハ北側ヨリ此ノ高地ニ乗越シ、海岸ニ近キ家屋一戸・長屋一棟ヲ流失ス。死者二名・傷者三名アリ。千鶏分教場訓導昆伝次郎氏ノ談ニ依レバ、強震ハ可ナリノ動揺ナリシモ地盤堅牢ナル為メ、時計ノ止リタルハ稀ニテ、柵ノ物落下シタルハ無ク、地震ニ因ル被害ハナイ。強震後一度ピカッと青白ク光リタルヲ認メリ。方向ハ何レナリシカ唯眼前ニ閃キタリト云フ。音響ハ聞カザリシ由。二時五十三分頃平常ノ波音絶エタル為メ、海面ヲ観レバ海水約十二・三間干退シ、間モナク三時轟々ト云フ音ト共ニ東南東ヨリ津浪襲来ス。校舎ノ硝子戸非常ニ振動セリト云フ。此ノ波浪ハ部落地ニ達セズ、約七分ニシテ第二回ノ最大ナル波浪襲来シ、部落地ニ乗越ヘ家屋ヲ流失ス。約十分ニシテ第三回ノ波浪襲来セルモ部落地ニ達セズ。海岸ハ騒擾シキ波音絶エズ、四時

昭和八年三月五日

宮古測候所

測候書記 金澤孫次郎

宮古測候所長 福井規矩三殿

三月三日宮古湾ニ於ケル災害地踏査ニ依ル報告書中、津軽石村大字赤前ニ於テ津浪襲来ノ波浪ノ高サ記入洩ニ付、左記及追報候也。

赤前尋常小学校前、浸水家屋ノ障子ニ波ノ南西ニ通過シタ濡跡ヨリ地面マデ五尺アリ。是ヨリ平均海面マデ十尺トシ、最大ナル波浪ノ高サヲ十五尺ト推定セリ。

② 復命書

小職儀

三月三日津浪ニ因ル災害地踏査ノ為メ重茂村へ出張ヲ命ザラレ、十九日出発二十一日帰所候ニ付、左記及復命候也

昭和八年三月二十一日

測候書記 金澤孫次郎

宮古測候所長 福井規矩三殿

十九日午前五時出発、磯鶏村神林ヨリ渡船ニテ白浜ニ渡リ、九時重茂ニ着、日程ノ都合ニ依リ、先ツ鮭ヶ崎灯台ニ向ケて出発スルコトニセリ。途中種刺ノ海岸（長サ約六十間ノ須賀）一帯ニ流失物（家材ノ破壊セルモノ、家具・衣類・其他）ノ小山ノ如ク山積セルアリ、海流ノ関係カ。斯ク夥シク打寄せタルハ珍シキ現象ニテ他ニ認メズ。此ノ海岸ニ木材搬出ノ人夫三十三名小屋ニ居リ、津浪ノ為メ浚ハレ死者二名、十六名ノ行方不明、傷者数名ヲ出セリト云フ。十一時半灯台ニ着、看守長外庁員ノ方ニ面会、津浪当時ノ模様ニ就キ伺ヒタルニ、強震ハ可ナリノ振動デアツタガ何等被害ナク、庁員一同無線電信室ニ火鉢ヲ囲ミ雑談ニ耽リ徹宵シタガ、津浪ニ就テハ更ニ無感覺ニテ音響・発光現

頃平常ニ復セリト云フ。

波ノ高サハ北側ニ於テ四十五尺、南側ニ於テ二十尺程度ナリ。此ノ地ニテ川口附近ニ在リシ供養塔、長サ一八〇糎、幅上部五五糎・下部八〇糎、厚サ五〇糎ノモノハ上流ニ向ヒ二十五米押運バレ、同下台石ノ縦一六〇糎、横一二五糎、厚サ五〇糎ノモノハ上流ニ向ヒ五十米ノ処ニ押運バレ在リ。

昆訓導ノ記録セル所ニ依レバ、七年四月上旬ヨリ中旬マデ鞭藻類（クラゲノ如キモノ）ノ群集浮流シ根滝建網ニ取群リ、為ニ網起シ不能トナリ、終ニ約十日間網揚ゲ（漁獲中止）ノ止ムナキニ至レリト云フ。此ノ鞭藻類ヲ学名ニテ「アンフィデニウム」「オペルカラテーム」又「スピロデニウム」「クラッサム」等称ス。此ノ異常ナル現象ニ就テハ或ハ海流等ニ変化ノアリタルヤ目下専門部ノ研究中ナリト云フ。

是ヨリ石浜ニ至ル。此ノ部落ハ北側海面ヨリ三十余尺ノ高地ニ在ル家屋二戸流失、余程引上ガリタル家屋一戸半潰セリ。南側十尺余ノ高地ニ在ル家屋一戸倒潰セリ。死傷者二名ヲ出ス。波浪ハ北側ヨリ南側ニ向ヒテ襲ヒ、波ノ高サ北側ニ於テ四十尺、南側ニ於テ十五尺ト推定セリ。

川代ハ前方ハ山田湾ノ小根ヶ崎突出シテ居ル為メ波浪比較的弱ク、最大十五尺程度ノ波浪襲来シ、家屋一戸流失、鮮人土工ノ死傷者数名アリ、小舟十数隻流失セリ。

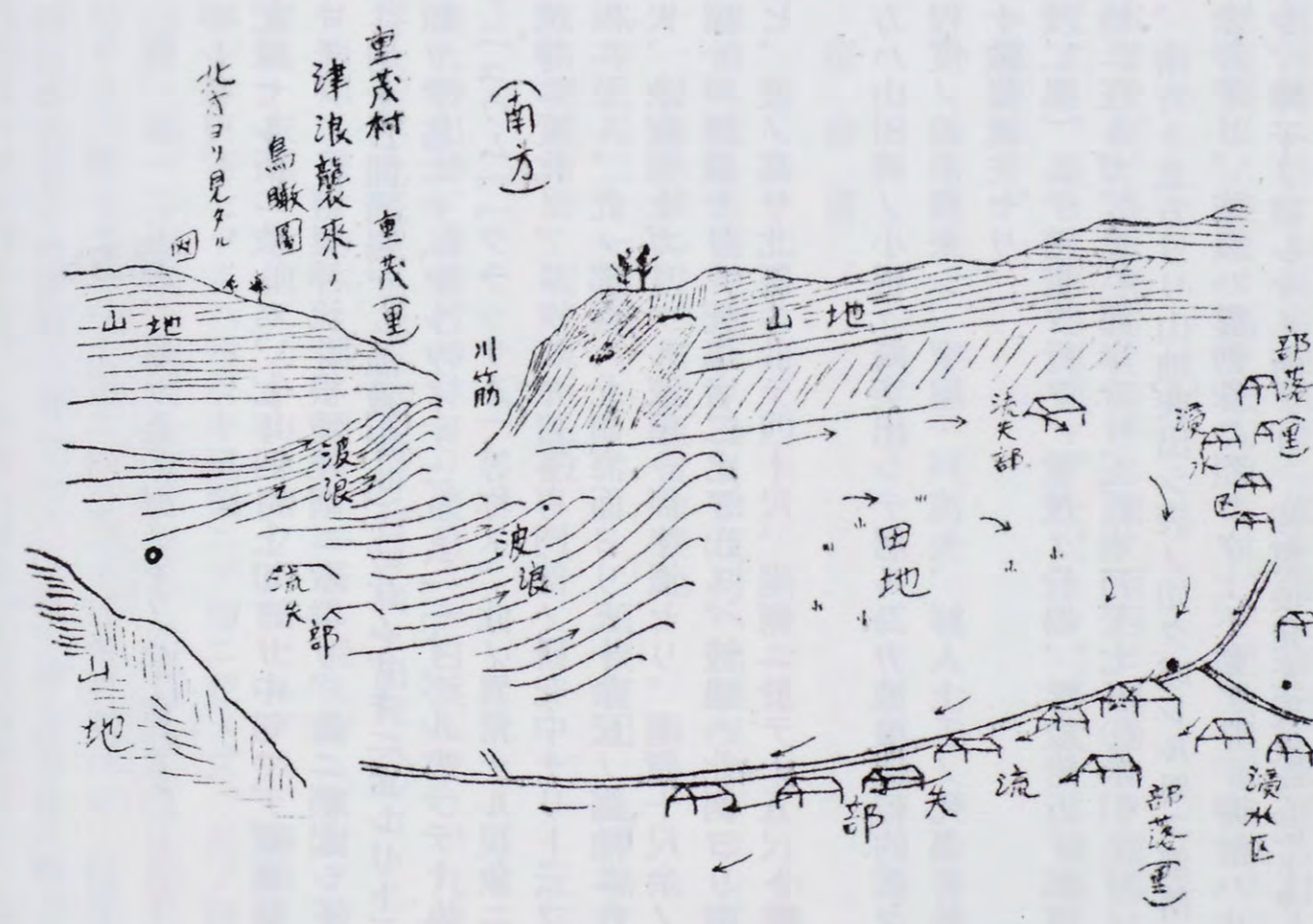
二十日重茂（里）ニテ踏査ヲ行フ。重茂ノ役場、学校附近ノ部落ハ可ナリノ高地ニ在ルガ、里ハ海岸ヨリ五百米乃至七五〇米引上リノ平地ニ在リテ、南方ト北方ヨリ山地突出シ袋ノ如ク成レル処ニ部落アリ、戸数五十余戸アリ。強震ハ震動殊ニ烈シク上下動アリ、時計ハ止リ柵ノ物落下シ、障子ノ破レタル所アリ。強震後発光現象ヲ認メタル由、三度閃キタリト云フ。明治二十九年ノ大海嘯ノ際ハ殆ト全滅シタル所ナリ。部落民ハ大震後、全部戸外ニ出テ火ヲ焚キ警戒シタル由。三時海岸ニ轟々ト波音聞エタリ。津波襲来セリトテ、全部高地役場方面へ避難シ、牛馬モ皆引揚ゲ、為二人畜ニハ被害ナキモ家屋ハ二十四戸流失シ、岸漁用小舟ハ全部流失セリ。半潰家屋二戸、浸水家屋三戸アリ。

北側ノ山林内ニ避難シ、津浪襲来ノ模様ヲ目撃シタル人ノ談ニ依レバ、第一回ノ波浪ハ勢弱ク田地附近マデ襲来シタガ、約五分後凄シキ浪音ト共ニ部落地ニ襲来シ、鳥瞰図ノ如ク南側山地ノ出鼻ヨリ分岐シテ一方ハ川筋伝ヒニ進行シ、一方ハ山岸伝ヒニ部落ニ突入ス。中央部ノ浪頭高ク両側ニ低ク、ゴツゴツゴツト云フ浪音ト共ニ襲来スル状態ハ、宛然電ノ頭ヲ立テ手ヲ拵ゲテ襲フニ似タリ云フ。浪ノ高サ十尺余、此ノ最高部分ヲ中心トシテ山岸ヨリ右方ニ廻リ始メ、家屋ヲ押流シツ、一周シテ海岸ニ向ヒ進行セリト云フ。石垣ニテ組立テタル高サ四尺ノ里道ノ南側ニ有リシ、長サ七尺ニシテ一尺四方角ノ石材十四個ヲ全部北側ニ持運ビタリ。石垣ヲ崩壊セザルハ奇異トス。約十分後、第三回ノ波浪襲来シタル模様ナルモ、海岸附近ニ押寄セ部落地ニ浸入セズ、三時五十分海面平常ニ復セリ。海岸ニテ最大波浪ノ高サ、岩壁上ノ痕跡ヨリ海面マデ十米九(三十六尺)ト測定セリ。

役場ニ立寄り挨拶ヲ述べ、種々参考トナルベキ事ヲ聴取セリ。昨年二月頃ヨリ、此ノ地方ノ沿岸ニ厄水流レ来リ(丁度フノリヲ湯ニシテ溶カシタ如キ濁水)五・六月甚ダシク八月頃マデ継続ス、為ニ多クノ海藻類ハ枯死シ、海藻採集ハ全ク不能ト成レリ。石芥草密生ス。但シ重茂村ハ根滝以北ガ著シカリシ由、是等ノ異常現象ハ沿岸地方ニテハ稀有ニシテ、濁流ノ原因等ニ就テハ今回ノ前兆トシテモ深キ研究ヲ要スベク、沿岸漁民ノ痛ク宿望スル所ナリト云フ。全村ニ於ケル被害概況ハ、死者四十一名、負傷者九名、行方不明者八一三三名、流失家屋五十戸、浸水家屋六戸アリ。

是ヨリ首部ニ至リ踏査ス。此ノ部落ハ、平地ニ在ル部分ハ里ト相似テ強震ハ振動烈シク、振り時計止リ、柵ノ物落下ス。海岸高ク家屋ハ山岸ノ小高イ所、又ハ奥部ニ在ル為メ被害少シ。波浪ノ高サハ海岸ニテ痕跡マデ二十五尺ト推定セリ。部落地ニ五・六尺ノ波浪、南側ヨリ北側ニ廻リテ襲来シ、家屋一戸流失、漁具置納屋四戸倒潰シ、小舟十数隻流失セリ。人畜ニハ被害ナシ。津浪襲来前五分頃、海水約七・八間干退シ、間モナク三時三十分云フ音ト同時ニ東南東方ヨリ第一回ノ波浪襲来シ、海岸ニノミ押寄セタリ。約五分ニシテ第二回ノ最大ナル波

重茂村重茂(里)  
津浪襲来ノ鳥瞰図  
北方ヨリ見タル図

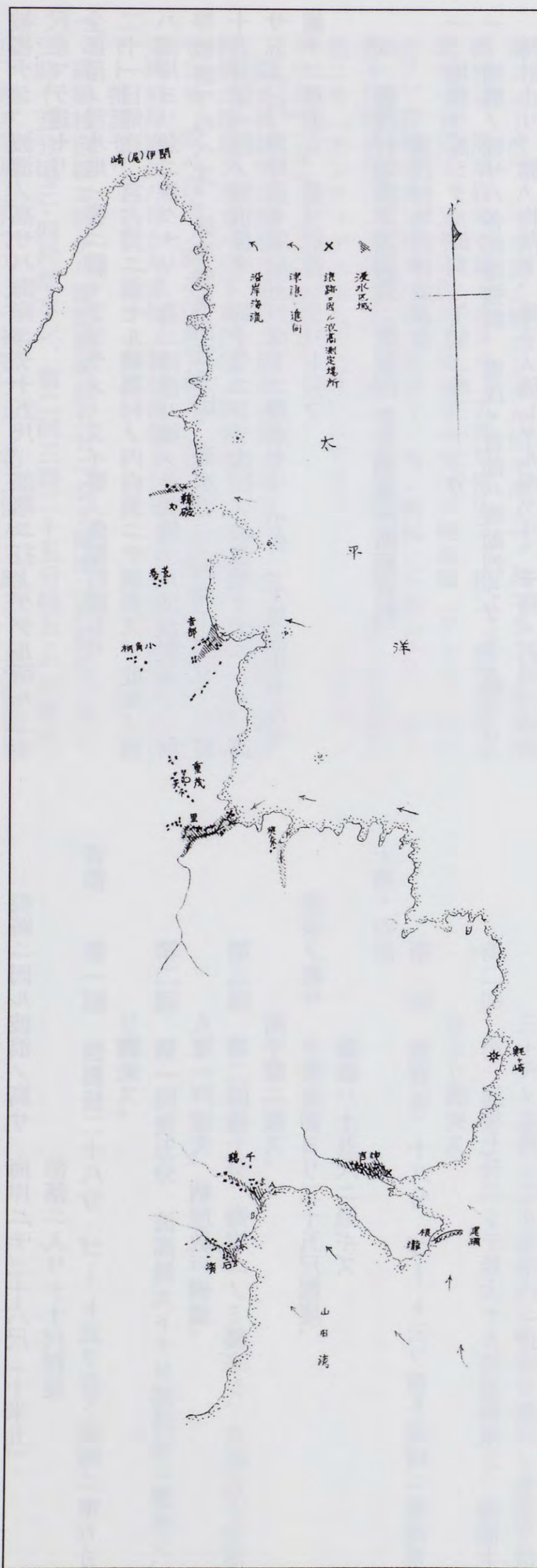


浪襲来シ、部落地ニ浸入ス。十分ニシテ第三回ノ波浪襲来セルモ、部

重茂村海嘯襲来状況

津波襲来時刻  
第一回午前三時乃至三時二分  
第二回第一回後五分乃至七分  
第三回第二回後十分、四時平常ニ復ス

浪跡ニ因ル最高波浪測定  
波向ニ対スル側面岩上ノ草木倒レタル跡ヨリ海面マデヲ測リ、  
是ニ當時刻ニ於ケル潮差ヲ加減ス  
重茂(里)  
海岸ニ於テ 十米九(三十六尺)  
姉吉  
海岸ニ於テ十二米三(四十一尺)  
(測定場所撮影)



各部落最高波浪	傾斜地水辺ヨリノ浸水距離
重茂(里) 海岸ニ於テ 三十三尺程度	七五〇米
首部 海岸ニ於テ二十五尺	五〇〇米
千鶏 北側Aニ於テ 二十尺	二一〇米
石浜 北側Bニ於テ 十五尺	五〇〇米
姉吉 海岸ニ於テ 四十尺	七五〇米
川代 部落地ニ入りテ 十五尺ノ増水ニ過ギズ	二〇〇米

落地ニ達セズ、三時五十分海上平常ニ復セリ。

鵜磯ハ海岸狭ク、且部落ハ高地ニ在リ、海岸近クニ在ル家屋一戸流失、

須賀二建テタル漁具置納屋四棟流失シ、小舟十隻流失セリ。人畜二ハ被害ナシ。波浪ノ高サハ海岸ニテ十五尺、部落二打上ゲタル所ハ二十尺余マデ達セリ。全部落ノ浸水地一帯ニ鰈・アブラメ・スイ等ノ魚類打揚レリ。二十一日帰途、宮古湾ニ面セル磯鶏村ノ内白浜ニテ調査ス。此処ノ海岸ヨリ急ニ深クナリ、為ニ津浪ハ極メテ緩慢ナル波浪襲来シ、何等被害ヲ与ヘズ。津浪襲来前五分頃、海水ガ三・四間干退シ、三時十五分第一回ノ波浪襲来、約十分ニシテ次回ノ波浪稍々大ニシテ、高サ五・六尺、海岸近キ家屋五戸床下ニ浸水セリ。小舟二十隻流失セルモ、直チニ搜索シ、是ヲ拾得シタリト云フ。

(5) 重茂村地震津浪調査 (気象庁宮古測候所所蔵資料)

重茂村地震津浪調査

一、地震ヲ感ジタル時刻 午前二時三十二分  
一、地震ノ強サハ各部落強震。重茂・音部ハ振動烈シク上下動アリ。時計止リ、柵ノ物落下、障子ノ破レタル所アリ。千鶏・石浜ハ時計止レル所稀ニアリ。音響ハ各所聞カズ。  
一、発光現象ニ就テハ、重茂ニ於テ強震直後三度ビカッテ青白ク光ルヲ見ル。音部・千鶏ニテモ強震後一度光リタルヲ見ル。何レモ方向ヲ認定スルヲ得ズ、唯眼前一帯ニ閃キタリト云フ。  
一、津浪襲来前五分頃、千鶏・音部ニテ海水ノ干退スルヲ認め、約七・八尺。間モナク三時ゴート云フ音ト同時ニ東南東ヨリ津浪襲来ス。

一、津浪襲来時刻 重茂(里)

第一回 強震後三十分 ゴート東方海岸ヨリ襲来ス。  
第二回 第一回後五分 第一回ノ津浪減退セザルニ追カケテ襲来シ、凶面矢ノ示ス如ク部落平地内ヲ廻襲シ二十四戸ヲ流失ス。  
第三回 第二回後十分 海岸ニノミ襲来シ、三時五十分海

面平常ニ復ス。  
浪跡ニ因ル波浪ノ高サ 海岸ニテ三十六尺(十米九)

音部 第一回 強震後二十八分 ゴート云フ音ト同時ニ東方ヨリ襲来ス。  
第二回 第一回後五分 波最高トナリ部落地ニ襲来シ、人家一戸流失、納屋数戸倒潰。  
第三回 第二回後十分 海岸ニノミ襲来シ、三時五十分海面平常ニ復ス。  
波浪ノ高サ 平常海面ヨリ二十五尺程度、  
鵜磯八十五尺ニ過ギズ

千鶏・石浜 第一回 強震後二十八分 ゴート云フ音ト同時ニ東南東方ヨリ襲来ス。  
第二回 第一回後七分ニシテ最大ナル波浪襲来シ、海面上三十尺ノ高地ニ在ル部落内ニ押寄セ数戸ノ家屋ヲ流失・倒潰ス。  
第三回 第二回後十分 殆ンド小波ニテ、唯海岸騷擾シキ波音ノミ、四時海面平常ニ復ス。

波浪ノ高サ 千鶏ニ於テ、北側四十尺・南側二十尺。  
石浜ニ於テ、北側四十尺・南側十五尺。  
川代八十五尺ノ増水ニ過ギズ。  
姉吉ハ、海岸ニ於テ浪跡(撮影)ニ至ル。四十一尺増水セリ。部落地ハV状ヲ成シ、奥深ク襲来スルニ随ヒ益々水量ヲ増シ、四十尺(十二米三)ノ高所ニ在ル家屋モ流失ス。部落十四戸全部流失、住民百二十名ノ内三名生存、九十九名ノ不明者ト十八名ノ死亡者トアリ、部落地ニハ何物モ無シ。  
鯨ヶ崎灯台ニテハ、強震後何等異状現象ヲ認めズ、津浪襲来ニ就テハ更ニ無感覺ナリト云フ。岩上ハ二十九米、直下水深四十尋ニシテ津浪ニ因ル増水ハセシ模様ナルモ波浪ノ音更ニ聞エズト云

フ。

一、重茂村全部落ニ於ケル被害概況

(イ) 死者 四十一名 (ロ) 負傷者 九名  
(ハ) 不明者一三三名 (ニ) 流失家屋五十戸  
(ホ) 浸水家屋 六戸

一、地震津浪ニ伴フ異状現象並ニ今回ノ前兆ト認メラル、モノ地震ニ因リ異状現象ト認ムベキモノナク、津浪ニ因リ大ナル石塊ノ数十米移動セルハ諸所ニアリ。千鶏ニ於テ長サ一八〇種、横下部八〇種・上部五五種、厚サ五〇種ノ供養塔(石)河口附近ニ在リシモノ、上流ニ向ヒテ二十五米押運バレ、同下台石縦一六〇種、横一二五種、厚サ五〇種ハ上流ニ向ッテ五十米ノ処ニ押シ運バレ在リタリ。浸水地一帯ニ魚類、カレヒ・ドンコ・アブラメ・スイ等打揚ゲアリ。

前兆ト認メラルモノトシテ、昨七年二月頃ヨリ沿岸海水濁潮ヲ呈シ(丁度フノリヲ湯ニ解カシタル如キ濁水)、為ニ多クノ海草類枯死シ、海草採集不能ト成レリ。石芥草密生ス。但シ、重茂根滝以北ナリト云フ。又七年四月上旬ヨリ中旬マデ鞭藻類(クラゲノ如キモノ)群集浮流シ根滝建網ニ取群リ、為ニ網起シ不能トナリ、終ニ約十日間網揚ゲ(漁獲中止)ノ止ムナキニ至リタリ。此ノ鞭藻類学名ニテ「アンフィデニユム」「オペルカラテーム」又「スピロデニユウム」「クラッサム」等称ス。

斯ル異状ナル現象ハ地方ニ於テ未知ノ事ニテ、此ノ鞭藻類ノ海中何処ニ棲息スルカハ目下専門部ノ研究中ナリト云フ。濁流ノ岸寄りセシモ、或ハ深海ノ海水流動ヲ起シ、沿岸近ク来襲セシヤモ知レズ、兎角沿岸漁民ハ珍シキ未知ノ異状現象トシテ、又今回ノ前兆ナラズヤト推測セリ。

一、磯鶏村白浜ニ於テハ津浪襲来前五分ニシテ海水三尺程度干退シ、三時十五分頃三・四尺増水シ、第二回三時二十五分頃五・六尺増水、床下浸水家屋五戸アリシモ被害ナシ。第三回八三時三十五分頃海岸ニノミ増水ノ模様ナリ。

(6) 昭和三陸地震津浪被害状況「験震時報 第七卷」

- ① 昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告 中央気象台「昭和八年三月三日」
- ② 津浪の高さ(岩手県)
- ③ 昭和八年三月三日の三陸津浪による被害(県別)
- ④ 明治二十九年六月十五日の三陸津浪に依る被害
- ⑤ 昭和八年三月三日の三陸津浪被害(岩手県)
- ⑥ 三陸津浪岩手県下被害報告(其の1) 人及家屋の被害(其の2) 船舶及漁具類の被害(其の3) 家畜・耕地・道路等の被害
- ⑦ //

津浪の高さ(岩手県)(二)

郡名	町村名	地名	浪高(米)	明治29年津浪高(米)	差(米)	
下閉伊(山田湾)	山田町	山田町	4.5	5.5	-1.0	
		大沢村	6.0	4.0	+2.0	
下閉伊(山田湾)	同	重茂村	4.5			
		川代	12.0			
		石浜	13.6	17.1	-3.5	
下閉伊(外洋)	同	千鶏北側	6.0			
		姉吉	12.4	18.9	-6.5	
		里	10.9			
		重茂	10.8	11.0	-0.2	
下閉伊(宮古湾)	同	音部	7.6	9.2	-1.6	
		磯	4.5			
		磯鶏村	2.1	8.5	-6.4	
		同	堀内	1.7	12.2	-10.5
		津軽石村	2.1			
下閉伊(外洋)	同	磯鶏村	1.6			
		金浜	1.2	4.0	-2.8	
		磯鶏	4.5	6.1	-1.6	
		宮古	3.6	4.6	-1.0	
		鎌ヶ崎町	6.7			
		蛸ノ浜	7.5			
下閉伊(外洋)	同	女遊戸	7.5			
		田老	10.1	14.6	-3.5	
下閉伊(外洋)	同	小本	13.0	12.2	+0.8	
		島ノ越	9.7			
		平井賀	8.2			
九戸(外洋)	同	羅賀	13.0	22.9	-9.9	
		明戸	16.9	12.2	-1.6	
		太田名部	13.0	15.2	-2.2	
		普代	11.5			
		野田	5.8	18.3	-12.5	
九戸(久慈湾)	同	野田	5.5			
		久喜	5.5	12.2	-6.7	
		小袖	8.2	13.7	-5.5	
九戸(外洋)	同	久慈町	5.5			
		久慈海岸	4.5			
九戸(外洋)	同	湊	6.0			
		海岸	10.6			
		侍浜	7.0			
		中野	6.0	10.7	-4.7	
		種市	6.0	9.1	-3.1	

三陸沖強震及津浪に就て「験震時報 第七巻」昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告 中央気象台より作成

① 津浪の高さ(岩手県)(一)

郡名	町村名	地名	浪高(米)	明治29年津浪高(米)	差(米)
気仙(広田湾)	同	福伏	3.2		
		長部	3.2	3.4	-0.2
		高田町海岸	3.0		
		脇沢	3.2		
		砂浜	4.5		
		両替	3.0		
気仙(大野湾)	同	三日市	1.0	2.4	-1.4
		泊港	4.5	7.6	-3.1
		根岬	11.2		
		六ヶ浦	3.5		
気仙(門之浜湾)	同	大野湾奥	4.0		
		唯出	3.4	10.7	-7.3
気仙(外洋)	同	梅真	3.5		
		泊里	5.7		
気仙(大船渡湾)	同	碁石	3.5		
		細浦	3.1	6.7	-3.6
		石浜	4.5		
		船河原	3.9		
		丸森	4.2		
		下船渡	3.0	5.5	-2.5
		永沢	3.3		
		大船渡	2.4	3.4	-1.0
		盛町海岸	3.6		
		生形	2.8		
気仙	同	蛸ノ浦	4.3		
		長崎	4.3		
		合足	7.3		
		綾里	4.5	10.7	-6.2
気仙(綾里湾)	同	綾里港	23.0	22.0	+1.0
		白浜	2.3		
気仙(越喜来湾)	同	砂子浜	2.3		
		小石浜	3.8	10.4	-6.6
		下甫嶺	4.2		
		越喜来	3.0	10.4	-7.4
		泊	4.0		
		浦浜	3.2	9.8	-6.6
		浦浜川岸	7.0		
		吉浜	9.0	24.4	-15.4
		千歳	6.0		
		大石	3.0		
上閉伊(釜石湾)	同	小白浜	6.0	16.7	-10.7
		本郷	6.0	14.0	-8.0
		嬉石	4.2	4.4	-0.1
上閉伊(両石湾)	同	釜石	5.4	5.4	-2.8
		海水	7.0		
上閉伊(大槌湾)	同	両石海岸	6.4	11.6	-5.2
		海岸	4.5		
		片岸	5.4		
		室ノ浜	5.2		
		大槌町	3.9	2.7	+1.2
上閉伊(船越湾)	同	安渡	4.2	4.3	-0.1
		赤浜	4.6		
		吉里吉里	6.0	10.7	-4.7
下閉伊(船越湾)	同	浪板	5.5	10.7	-5.2
		船越	6.0	10.5	-4.5
下閉伊(山田湾)	同	田ノ浜	6.0	9.2	-3.2
		織笠	2.4	3.4	-1.0

④ 昭和八年三月三日の三陸津浪による被害（岩手県）

Table with 16 columns: 町村名, 部落名, 死者, 行衛不明, 傷者, 計, 流失, 全壊, 半壊, 床上浸水, 床下浸水, 焼失, 計, 戸数, 人口, 備考. Rows include 気仙郡 広田村, 気仙郡 小友村, 気仙郡 末崎村, 気仙郡 大船渡町, 気仙郡 赤崎村, 気仙郡 綾里村.

② 昭和八年三月三日の三陸津浪による被害（県別）

Table with 8 columns: 府県別, 岩手県, 宮城県, 青森県, 北海道, 福島県, 山形県, 合計. Rows include 死者, 傷者, 行方不明, 流失, 倒潰, 浸水, 焼失, 破損, 其ノ他, 損害見積額.

表中括弧を附したものは内務省警保局の調査によるもの。

◆三陸津浪に依る被害調査「験震時報 第七巻」「昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告」中央気象台より作成

③ 明治二十九年六月十五日の三陸津浪による被害

Table with 5 columns: 県別, 岩手県, 宮城県, 青森県, 合計. Rows include 死者, 傷者, 行方不明, 流失, 倒潰, 焼失, 浸水, 破損, 其ノ他.

震災予防調査会報告第十一号による。

◆三陸津浪に依る被害調査「験震時報 第七巻」「昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告」

中央気象台より作成

(\*印は、計算が合わない。)

Table with columns: 町村名, 部落名, 死者, 行衛不明, 傷者, 計, 流失, 全壊, 半壊, 床上浸水, 床下浸水, 焼失, 計, 戸数, 人口, 備考. Includes data for 下閉伊郡 重茂村, 磯鶏村, 田老村, 小本村, 田野畑村, 普代村, 野田村, 宇部村, 長内村.

Table with columns: 町村名, 部落名, 死者, 行衛不明, 傷者, 計, 流失, 全壊, 半壊, 床上浸水, 床下浸水, 焼失, 計, 戸数, 人口, 備考. Includes data for 気仙郡 感喜来村, 唐丹村, 釜石町, 上閉伊郡 大滝町, 船越村, 下閉伊郡 織笠村, 山田町, 大沢村, 下閉伊郡 重茂村.

⑤ 三陸津浪岩手県下被害報告（其の1）人及び家屋の被害

郡名	町村名	総戸数	総人口	死亡	行方不明	負傷	流失	倒壊		浸水		焼失	
								全壊	半壊	床上	床下		
気仙	広田村	562	3,896	20	25	14	117	15	5	5	9	—	
	同	小友村	455	2,785	8	10	2	32	6	11	49	—	
	同	同	末崎村	541	3,936	29	10	25	—	18	29	—	
	同	同	気仙町	704	4,472	31	1	18	1	13	11	4	
	同	同	高田町	932	5,108	3	—	—	3	1	—	—	
	同	同	米崎村	449	3,003	—	—	—	—	—	—	—	
	同	同	大船渡町	731	4,239	1	—	26	21	31	175	37	
	同	同	赤崎村	577	4,026	81	19	95	27	31	45	17	
	同	同	綾里村	516	3,545	94	84	19	243	1	5	12	8
	同	同	越喜来村	521	3,403	57	30	34	112	26	15	15	7
	同	同	吉浜村	273	1,869	3	14	1	10	4	1	4	1
	同	同	唐丹村	564	3,770	134	226	40	240	9	9	8	—
		計	6,825	44,052	461	419	276	1,053	113	140	353	83	—
	上閉伊	釜石町	4,743	25,146	22	15	126	112	189	409	460	564	249
同		鵜住居村	580	4,342	3	4	15	132	13	20	26	25	
同		大槌町	7,143	12,033	61	—	99	395	88	150	205	111	
	計	*7,066	41,521	86	19	240	639	290	579	691	700	249	
下閉伊	船越村	577	3,758	4	1	5	211	—	17	27	—	—	
	同	同	織笠村	389	2,328	—	6	—	10	60	—	—	
	同	同	山田村	1,042	6,685	7	1	26	—	59	62	181	
	同	同	大沢村	216	1,417	1	—	—	15	35	34	10	
	同	同	重茂村	321	2,311	37	137	10	50	6	6	—	
	同	同	津軽石村	511	3,806	2	1	—	3	—	6	8	
	同	同	磯鶏村	368	2,958	4	—	6	7	4	29	16	33
	同	同	宮古町	3,184	18,277	32	13	5	4	14	14	14	20
	同	同	崎山村	166	1,297	—	—	1	—	1	—	2	—
	同	同	田老村	835	4,983	584	327	122	500	—	1	6	2
	同	同	小本村	475	2,963	143	13	32	93	4	1	—	50
	同	同	田野畑村	725	4,341	47	36	11	127	4	—	—	—
	同	同	普代村	520	3,145	28	109	81	79	—	10	13	25
		計	9,329	58,269	889	644	299	1,400	47	183	*316	323	—
九戸	野田村	601	3,893	6	2	8	89	9	9	43	17	—	
	同	同	宇部村	472	3,008	1	5	—	5	—	2	—	
	同	同	長内村	680	4,091	7	3	5	35	1	—	—	
	同	同	久慈町	1,298	6,695	—	—	1	1	—	1	9	
	同	同	夏井村	398	2,308	1	—	7	1	1	—	9	
	同	同	侍浜村	341	2,071	2	2	2	—	—	—	—	
	同	同	中野村	415	2,513	3	3	1	3	—	4	—	1
	同	同	種市村	1,223	7,712	67	34	39	53	—	7	—	6
	計	5,428	32,391	87	49	63	187	11	*27	53	35	—	
	総計	*28,648	176,133										

\*は誤りと思われる数字

◆盛岡測候所による  
◆三陸津浪岩手県下被害報告「験震時報 第七巻」 「昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告」 中央気象台より作成

町村名	部落名	死者	行方不明	傷者	計	流失	全壊	半壊	床上浸水	床下浸水	焼失	計	戸数	人口	備考
九戸郡 久慈町	久慈港	—	—	1	1	35	—	1	1	9	—	46	35	242	他に漁業用納屋47棟 船小屋81棟 船揚場破損
	源道	—	—	—	—	33	—	—	—	—	—	33	—	—	
	上門前	—	—	—	—	4	—	—	—	—	—	4	—	—	
久慈町	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2	—	—		
久慈町	小計	—	—	1	1	74	—	1	1	9	—	85	—	—	
九戸郡 夏井村	閉伊口	—	—	1	1	1	—	—	2	—	—	3	73	399	
	大崎	1	—	6	7	—	1	—	7	—	—	8	55	288	
夏井村	小計	1	—	7	8	1	1	—	9	—	—	11	128	687	
九戸郡 侍浜村	横沼	—	2	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	桑畑	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
侍浜村	小計	2	2	2	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
九戸郡 中野村	中野	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	205	1,385	
	有家	—	2	—	2	—	—	—	—	—	—	—	117	827	
中野村	小計	3	1	1	5	2	—	3	—	1	—	6	98	683	
中野村	小計	3	3	1	7	3	—	3	—	1	—	7	420	2,895	
九戸郡 種市村	八木	45	34	35	114	37	—	4	—	3	—	44	98	487	
	大浜	22	—	4	26	8	—	—	—	1	—	9	22	132	
	川尻	—	—	—	—	8	—	3	—	2	—	13	99	490	
種市村	小計	67	34	39	140	53	—	7	—	6	—	66	219	1,109	
	総計	1,522	1,136	881	3,539	3,850	1,585	—	2,520	249	8,204				

盛岡測候所報告による。

◆三陸津浪に依る被害調査「験震時報 第七巻」 「昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告」 中央気象台より作成

(\*印は、計算が合わない。)



⑦ 三陸津浪岩手県下被害報告(其の3) 家畜、耕地、道路等の被害

Table with 11 columns: 郡名, 町村名, 家畜の被害 (牛, 馬, 豚, 鶏), 田畑の浸水又は土砂礫運積 (水田, 畑地), 道路の被害, 橋梁の被害, 堤防等の被害. Rows include 気仙, 上閉伊, 下閉伊, 九戸 counties and various municipalities.

\*は誤りと思われる数字

(ア) 田老村馬1頭6,001円のものあり

◆盛岡測候所による

◆三陸津浪岩手県下被害報告「験震時報 第七巻」 「昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告」 中央気象台より作成

⑥ 三陸津浪岩手県下被害報告(其の2) 漁船及漁具類の被害

Table with 7 columns: 郡名, 町村名, 発動機船の被害 (隻数, 見積金額), 漁船の被害 (隻数, 見積金額), 漁具類被害 (件数, 見積金額). Rows include 気仙, 上閉伊, 下閉伊, 九戸 counties and various municipalities.

\*は誤りと思われる数字

◆盛岡測候所による

◆三陸津浪岩手県下被害報告「験震時報 第七巻」 「昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告」 中央気象台より作成

3 三陸地方津浪災害予防調査報告書

調査書「三陸地方津浪災害予防調査報告書」農林水産局

岩手県下閉伊郡

(1) 重茂村大字石浜

調査要領

本調査ニテ視察セル重茂村石浜以下四部落ハ皆同様ニ山間ノU字型低地ニテ中央ニ小川流レ川ノ両側ハ数段ニ稍高キ住宅地ヲ形成ス流失住家ハ最低地ニアリシ一棟ニシテ被害ノ輕微ナリシハ住宅地周囲ニ在来ノ護岸アリシ為メ波力ヲ輕減シタルモノト認定シ得依リテ本調査ニ於テハ道路添ヒニ延長一三〇米、共同用地側ニ長四〇米合計長一七〇米ノ護岸(背面埋立共)ヲ計画シ一層住宅地ヲ安全ニ防護セントス

甲、基礎的調査事項

一、津浪襲来ノ方向及経路

イ、方向 北東微北

ロ、経路 震源地ヨリノ浪ハ根瀧岬ニヨリ方向ヲ転ジ反リ浪トナツテ本部落ニ襲来セリ

二、浸水区域並ニ津浪ノ高サ

イ、浸水区域 図示ノ通り

ロ、津浪ノ高サ 九・七米(干潮面上)

三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫方津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ定繋ノ位置

護岸ハ本部落ノ中央ヲ流レル小川ノ南側ハ石垣作りニシテ高サ約六尺位其ノ上方ニ人家数戸アリタルモ石垣ノ為メ浪ハ遮ギラレ人家ハ低地ノ処ノミ被害ヲ受ケタリ  
漁船ハ海中ニ定繋セルモノハ一隻モナク海岸上部ニ曳揚ゲテアツタ船ハ殆ンド全部流失セリ、夫等漁船ニ依リテハ人家ニ害ヲ及ボサズ  
住宅地護岸施設方防浪ノ効アリ一箇例ナリ

四、各部落ニ於ケル主要漁業

種類 柔魚釣、鮑採捕、雑小延繩、海藻採捕、鰯網、

定置漁業

漁船数 無動力船三十二隻、動力付漁船(五噸乃至三噸)二隻

漁獲高ハ重茂村漁業組合全部ノモノヲ里部落ノ調査事項ニ記ス 部落別ノモノハ判明セズ

乙、漁村復旧計画ニ関スル調査事項

一、予防施設ニ関スル事項

(一) 護岸

イ、定置 平面図ニ示ス

ロ、延長 一七〇米 天端幅 〇・六

總高 五・二米

ハ、構造概要 栗石混泥土

ニ、計画説明

災害ノ実例ヨリミテ本設備ヲ適當トス、本護岸ノ後方ニ住宅適地ノ余地充分アリ、共同施設用地モ同様ナリ、船揚場トシテ従来通り海浜ヲ利用ス

ホ、必要ナル経費概算

種別	数量	單位	單價	金額	備考
護岸	延長 一七〇	米	一四〇	一五三〇〇	
用地	三四〇	平米	九〇	一、〇二〇〇	
雜費	一	米	一	一、〇〇〇	
計				一八、〇〇〇	

二、漁村住宅ニ関スル事項

(一) 職業別戸数調(石浜)

(昭和八年罹災前現在)

職業別	兼業	兼業	商業	工業	計
戸数	二〇	七			二七
口数					一八九

(2) 重茂村大字千鷲

調査要領

住家ハ一般ニ高地ニアリシモ、地形U字型ヲナスヲ以テ津浪ハ激衝シ海岸ニ近キ二棟ヲ流失シ、死者十人ニ及ビタリ本災害ニ鑑ミ、高地ノ端部ニ防浪堤長一〇〇米ヲ背面住宅地並ニ漁業共同施設用地ヲ防護ス

甲、基礎的調査事項

一、津浪襲来ノ方向及経路

イ、方向 北東微北

ロ、経路 津震源地ヨリノ浪ハ根瀧岬ニヨリ方向ヲ転ジ反リ浪トナツテ本部落ニ襲来セリ

二、浸水区域及津浪ノ高サ

イ、浸水区域 図示ス

ロ、津浪ノ高サ 一・二米(干潮面上)

三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫方津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ定繋ノ位置

漁船ハ海中ニ定繋セルモノナク船揚場ニアリシモノ殆ンド全部流失セリ現在ノ船揚場ハ附近海岸ノ谷間ニ設置セリ夫等漁船ハ流失ノ際人家ニハ害ヲ及ボサズ  
四、各部落ニ於ケル主要漁業  
種類 柔魚釣、鮑採捕、藻類採捕、鰯網、雑小延長、  
定置漁業

漁船数 無動力船、二十七隻、動力付ナシ

漁獲高ニ付キテハ前記石浜部落ト同様

乙、漁村復旧計画ニ関スル事項

一、予防施設ニ関スル事項

(一) 防浪堤

イ、位置 平面図ニ示ス

ロ、延長 一〇〇米 天端幅 三米

總高 七米

(3) 重茂村大字里

調査要領

住家ハ一般ニ高地ニアリシモ、地形U字型ヲナスヲ以テ津浪ハ激衝シ海岸ニ近キ二棟ヲ流失シ、死者十人ニ及ビタリ本災害ニ鑑ミ、高地ノ端部ニ防浪堤長一〇〇米ヲ背面住宅地並ニ漁業共同施設用地ヲ防護ス

甲、基礎的調査事項

一、津浪襲来ノ方向及経路

イ、方向 北東微北

ロ、経路 津震源地ヨリノ浪ハ根瀧岬ニヨリ方向ヲ転ジ反リ浪トナツテ本部落ニ襲来セリ

二、浸水区域及津浪ノ高サ

イ、浸水区域 図示ス

ロ、津浪ノ高サ 一・二米(干潮面上)

三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫方津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ定繋ノ位置

漁船ハ海中ニ定繋セルモノナク船揚場ニアリシモノ殆ンド全部流失セリ現在ノ船揚場ハ附近海岸ノ谷間ニ設置セリ夫等漁船ハ流失ノ際人家ニハ害ヲ及ボサズ  
四、各部落ニ於ケル主要漁業  
種類 柔魚釣、鮑採捕、藻類採捕、鰯網、雑小延長、  
定置漁業

漁船数 無動力船、二十七隻、動力付ナシ

漁獲高ニ付キテハ前記石浜部落ト同様

乙、漁村復旧計画ニ関スル事項

一、予防施設ニ関スル事項

(一) 防浪堤

イ、位置 平面図ニ示ス

ロ、延長 一〇〇米 天端幅 三米

總高 七米

ハ、構造概要 前面及天端、栗石混泥土造、背部土砂堤  
ニ、計画説明 本施設ニ依リ後方ニ安全ナル住宅及共同施設用地ヲ得 船揚場ハ既設ノモノアリ  
ホ、必要ナル経費概算

種別	数量	單位	單價	金額	備考
防波堤	延長 一〇〇	米	一四〇	一四、〇〇〇	
用地	幅 八〇〇	平米	一	一、二〇〇	
雜費	長 一〇〇	米	一	一、〇〇〇	
計				一七、〇〇〇	

二、漁村住宅ニ関スル事項

(一) 職業別戸数調(千鷲)

(昭和八年罹災前現在)

職業別	兼業	兼業	商業	工業	計
戸数	二三	七	一		三〇
口数					二二四

(3) 重茂村大字里

調査要領

本部落ヨリ本村ヲ經由シテ磯鶏村白浜(宮古湾沿岸)ニ通ズル道路ハ巾三米乃至四米アリテ両端ハ坂道ナレ共中央ハ平坦ナリ、重茂村ノ漁業ノ中心地ニシテ漁船数モ漁獲高モ最モ多ク、役場所在地タル本村ニ近接ス

地形ハ山間ノU字型地形ナルヲ以テ津浪ハ奥地迄モ激衝シ流失家屋二七、死者四七人等ノ大被害ヲ与ヘタリ

本調査ニ於イテハ陸上適地ニ防浪堤延長二五〇米ヲ計画シ其背面ニアル住宅並ニ漁業共同施設用地ヲ防護ス、本堤ヨリ海岸迄ノ土地ハ漁

重茂村漁業組合全体ノ漁獲高

漁業ノ種類	昭和四年度		昭和五年度		昭和六年度		備考
	数量	金額	数量	金額	数量	金額	
沿岸漁業							
鰯	三三、一八六六	二九、八六八	二五、〇三三	一五、〇二二	三四七、八〇〇	二〇、八六八	昭和四年度 漁船
鯖	三三、一〇六	九、九三一	三一、五九〇	五、〇四三	六四七、二二	五、一七七	動力付 其ノ他
鮭	四九、九〇五	六九、八六七	三五、五二五	四九、七四九	五六、六二〇	七六、四三七	動力付 其ノ他
鱈	二七、〇	二七	二七	二七	三六、一九二	三三、五五	動力付 其ノ他
鯛	一七、七二四	一七、七二九	一〇九、六〇四	六〇、二八二	三三、五五	三三、五五	動力付 其ノ他
鰺	五九九	七一九	五九〇	四七二	五五四	五五四	動力付 其ノ他
鰹	一、四九〇	四四七	一、六一一	二四二	三、三〇〇	八二五	動力付 其ノ他
鱈	八、四八三	二、九六九	四、〇八四	五三五	二、〇〇七	三〇一	動力付 其ノ他
鮭	一八五	二七八	七四二	五九四	一五、一七一	八、六九〇	動力付 其ノ他
鰯	七、二〇八	八、六五〇	六、〇五〇	三、〇二五	一九、三一二	一二七	動力付 其ノ他
鮭	一六、六八二	八、三四一	九七一	六八	一、八二〇	一、二七	動力付 其ノ他
鰹	一〇、五六〇	一、五八四	四〇、五一一	一〇、八〇〇	二、四〇四	五〇九	動力付 其ノ他
鮭	三四、一六三	四六、一一〇	三四、七五九	四〇、五一一	一、一九九	一〇、九〇	動力付 其ノ他
鰯	二七、五〇一	一、二〇〇	五二、〇〇〇	一〇、四〇〇	六四〇〇〇	二、四〇四	動力付 其ノ他
鰹	三、九六三	一、〇八	四四九四	八〇九	二〇〇	四〇	動力付 其ノ他
鰯	一一〇	三三	二〇〇	一四	二〇〇	四〇	動力付 其ノ他
鰯	二五三、三四一	三八、〇〇〇	三四二、九二〇	三、四二九	三、九八九	三、九八九	動力付 其ノ他
鰯	二四、〇四七	九、六一九	六一、八四〇	三、〇九二	二、九三七	二、九三七	動力付 其ノ他
鰯	二、三八〇	九五二	一、八四〇	五五二	一、七六八	三五四	動力付 其ノ他
鰯	一、七四二	八七一	五、二七二	二、五二七	一、五六〇	八三〇	動力付 其ノ他
合計	二六九、〇九九	二六、九〇九	二二六、四五四	二二、六四四	二二七、六三五	二二、六三五	平均

業用地ニ充当ス、別途県災害復旧費ヲ以テ河川改良工事並ニ船溜防波堤工事ノ施行確定セルヲ以テ全部竣功ノ曉ニハ本部落八面目ヲ一新シ本村漁業ノ根拠地トシテ其機能ヲ發揮スベシ

甲、基礎的調査事項

一、津浪襲来ノ方向及経路

イ、方向 東

二、浸水区域及津浪ノ高サ

イ、浸水区域 図示ス

口、津浪ノ高サ 九.三米(干潮面上)

三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫ガ津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ定繋ノ位置

津浪前ニハ別段ニ何等設備ナシ

種別	数量	単位	単価	金額	備考
防浪堤	長 一五〇	米	一七〇円	四二、五〇〇円	
用地費	三、〇〇〇	平米	一	三、〇〇〇	
雑計				四九、〇〇〇	

乙、漁村復旧計画ニ関スル調査事項

一、予防施設ニ関スル事項

(一) 防浪堤

イ、位置 図示ス

口、延長 二五〇米 天端幅員 三米 高サ 九米

ハ、構造概要 天端及正面混凝土造、堤心土砂

ニ、計画説明 本施設ニヨリ後方ニ安全ナル住宅並ニ共同施設用地ヲ充分ニ得ラル

別途船溜ハ船揚場ノ実施ト相待ツテ本村随一ノ漁業根拠地トシテ機能ヲ發揮シ得ベシ

ホ、必要ナル経費概算

漁船ハ海浜広場ニ曳上シモノ殆ンド全部流失セリ

四、各部落ニ於ケル主要漁業

種別 鰯揚操網、柔魚釣、雑小延縄、貝類及藻類捕(本村ノ漁業ハ里部落ト同様ナリ本村漁業ノ中心地ナリ)

現在漁船数(建造中ノモノヲ含ム)

動力付五噸四隻、十噸六隻、無動力船三一二隻(里部落ノ分)

動力付五噸三隻、十噸一隻、二噸一隻、無動力船八〇隻(本村部落ノ分)

(一) 緩衝地区

イ、位置 図示

口、常時ニ於ケル利用方法 道路、干場

二、漁村住宅ニ関スル事項 道路、干場

(二) 職業別戸数調(里、本村)

(昭和八年罹災前現在)

区別	職業別		商業	工業	計
	人口数	兼業			
漁業	兼業	兼業	六		八二
農業	兼業	兼業			八二
商業			六		八二
工業					八二
計					五八六

(二) 従来ノ住宅地並ニ移転スベキ住宅地ノ適否

区別	事項
従来ノ住宅地	低地ノ住宅ハ流失セルモ高地ノモノハ異常ナク防浪堤築設迄ハ高地ニ建築ノ要アリ
移転スベキ住宅地	目下ノ処新住宅地造成ノ計画無シ

(4) 重茂村大字音部

調査要領

本部落モ本村、石浜ト同型ノ地形ニシテ中間ノ小川添ハ低キ畑地ヲナシ山際ノ稍高キ平地ニ住宅アリ、為ニ流失セル住家ハ二棟ノミナリ海岸ニ略並行スル道路ニ添イテ胞壁付護岸並ニ共同施設用地護岸合計延長一八〇米ヲ築設セントス

甲、基礎的調査事項

一、津浪襲来ノ方向及経路

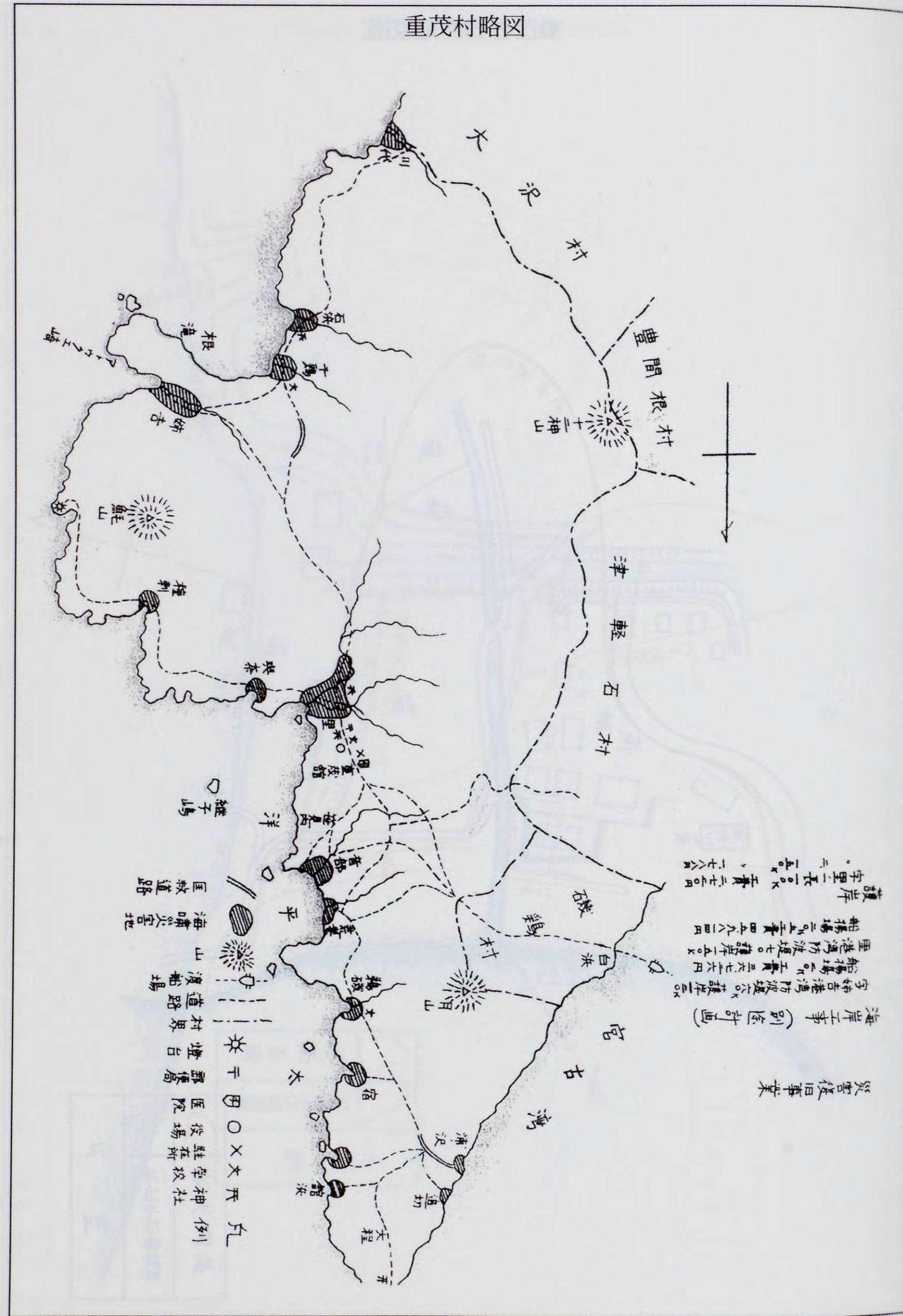
イ、方向 東方ヨリ

二、浸水区域及津浪ノ高サ

イ、浸水区域 図示ス

口、津浪ノ高サ 干潮面上 七.四米

重茂村略図



二、漁村住宅ニ関スル事項  
(一) 職業別戸数調(音部)

種別	数量	単位	単価	金額	備考
雑護岸	延長一八〇	米	七五円	一三、五〇〇円	県施行災害道路復旧工事ト相マツテ施行ラベトス
				一、五〇〇 一五、〇〇〇	

(昭和八年罹災前現在)

- 三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫方津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ定繋ノ位置
- 海岸ハ海面上七尺位ノ高サヲ有スル天然砂利玉石ノ浜ヲ有シソノ上方二個人及二三名ノ共同製造場及倉庫ガ立チ並ビテアリシメメ浪ノ侵入ヲ防ギ比較的人家ニハ被害少ナシ
- 漁船ハ前方ノ海岸ニ曳揚ゲテアリシモノ全部流失セリ
- 四、各部落ニ於ケル主要漁業
- 種類 柔魚釣漁業、雑小延縄漁業、貝類及藻類採取業
- 漁獲高 重茂村漁業組合漁獲高二合併
- 漁船数 動力付八噸一隻、三噸一隻、無動力船六四隻
- 乙、漁村復旧計画ニ関スル調査事項
- 一、予防施設ニ関スル事項
- (一) 護岸
- イ、位置 図示
- ロ、延長 一八〇米 天端幅 〇・六米 総高 五米
- ハ、構造概要 栗石混凝土
- 二、計画説明 本設備ニ依リ住宅地及共同施設用地ヲ防護シ著シク被害ヲ輕微シ得ベシ、中央部畑地ハ緩衝地ニトナル、前面海浜ハ船揚場、干場トシテ使用スル広サヲ有ス
- ホ、必要ナル経費ノ概算

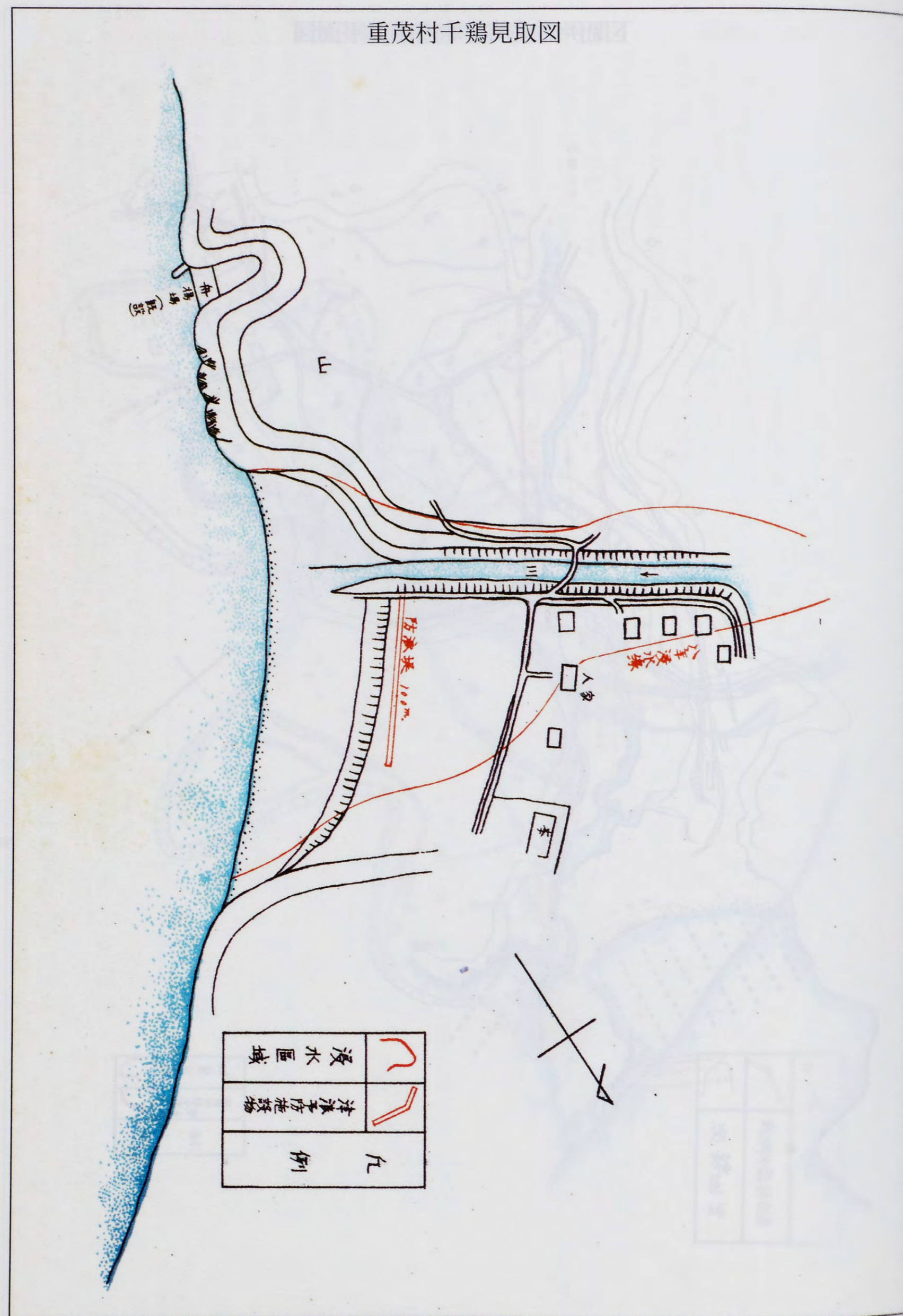
区別	職業別	戸数
	漁業	
	農業	
	商業	一
	工業	
	計	四四〇 五八〇

(二) 従来ノ住宅並ニ移転スベキ住宅地ノ適否

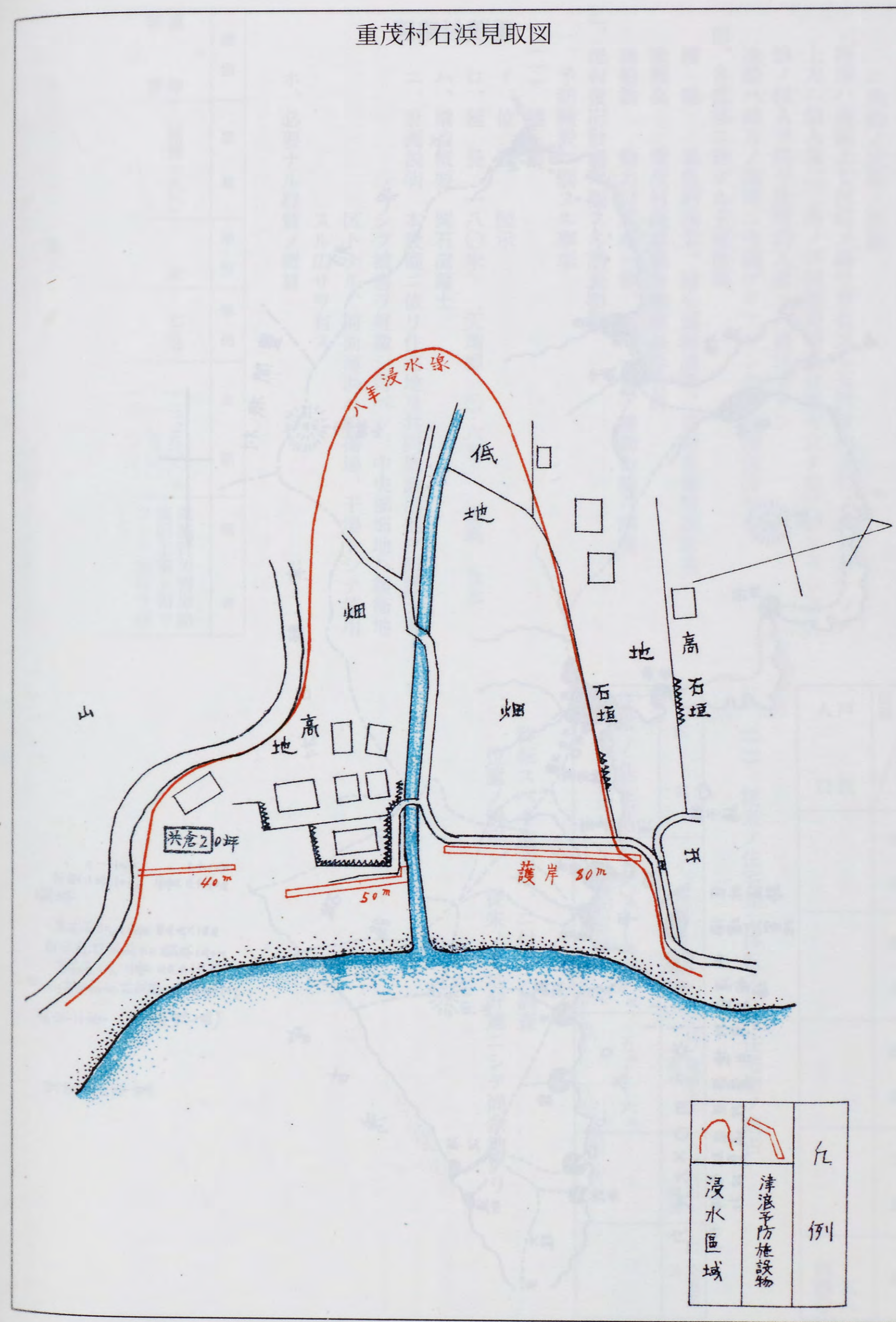
区別	イ、海岸ヨリノ距離	ロ、海面上ノ高サ	ハ、河川トノ関係	ニ、交通関係
従来ノ住宅地	一五〇米—三〇〇米	五米—六米		
移転スベキ住宅地				

移転スベキ住宅地、二付テノ調査位置ノ決定 従来ノ宅地好適ニシテ尚余地アリ

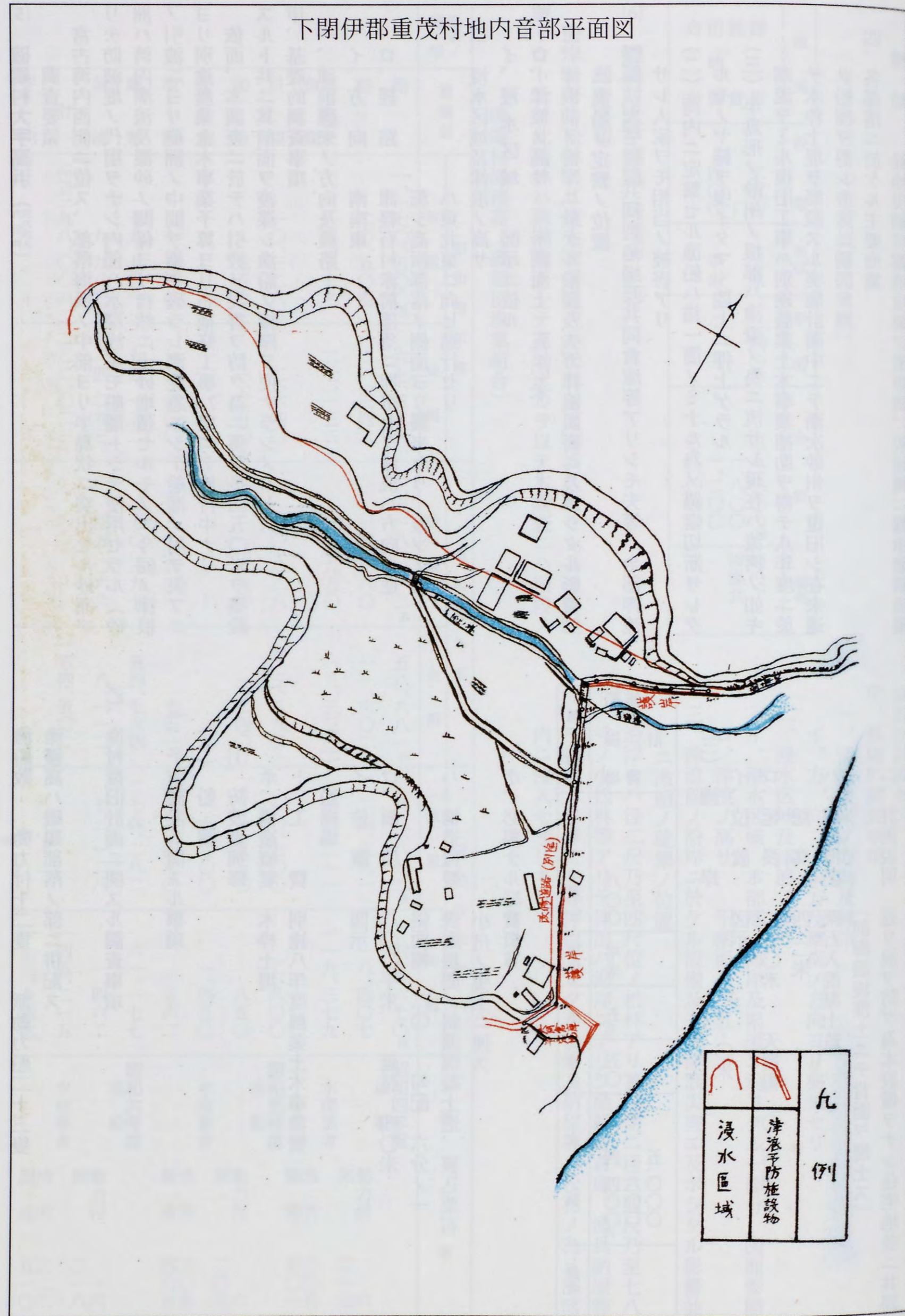
重茂村千鷲見取図



重茂村石浜見取図



下閉伊郡重茂村地内音部平面図



下閉伊郡重茂村地内字里平面図



(5) 磯鶏村大字高浜 (九三九)

調査要領

宮古湾内西側二位ス、部落海浜ノ中部ヨリ半島状ニ突出セル砂洲アリテ防波堤ノ代用ヲナシ内部ハ水深浅キモ船溜トシテ使用セラル(砂洲ハ湾内潮流及漂砂ノ関係ヨリ自然ニ土砂堆積セルモノ)今回ノ津浪ノ引波ニヨリ砂洲ノ中間ヲ衝キ破ラレ潮流急ニシテ船溜ノ用ヲ失フニヨリ別途農業土木事業予算ヨリ右補修工事ハ県ニテ施行中ナリ依而、本調査ニ於テハ引波ノ災害ヲ防ク為ニ護岸長二五〇米ヲ築設スルト共ニ其前面ヲ浚渫シ漁船ノ接岸ヲ便ナラシメムトス

甲、基礎的調査事項

- 一、津浪襲来ノ方向及経路
イ、方向 南南東
ロ、経路 津軽石村赤前部落ニ押寄せタ津浪ハ方向ヲ逆転シ高浜部落ノ側面ヨリ襲来セリ、後ソノ浪ハ東北東ニ向ヒ進行セリ
二、浸水区域及津浪ノ高サ
イ、浸水区域 図示ニ依ル
ロ、津浪ノ高サ 干潮面上 五・〇米

三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫ガ津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ定繋ノ位置

(一) 沿岸ニハ共同製造場及共同倉庫等アリシモ夫等ハ全部押流サレ人家ヲモ相当ノ被害アリ

(二) 湾内ニ定繋セル漁船ハ一箇ノミナル為メ錨索切断サレタルモノヤ錨ヲ曳イタマ、陸上ニ押上ゲラル

(三) 半島形ノ砂州ノ根部ハ津浪ノ為ニ流サレ現在ハ流河ノ如キ潮流ヲミル復旧工事ハ別途農業土木事業補助ヲ得テ八年度ニ於テ木柵土堤ヲ築設スル実施計画中ニテ漸次砂州ヲ復旧シ在来通ノ船溜ヲ得ントス(別図参照)

四、各部落ニ於ケル主要漁業
種類 鮭地曳網、鰯地曳網、柔魚釣、鮫延縄、鰯巾着網漁業

漁船数 動力付十二隻 無動力船二十三隻
漁獲高ハ磯鶏部落ノ部ニ併記ス

乙、漁村復旧計画ニ関スル調査事項

一、予防施設ニ関スル事項

(一) 船溜

ホ、構造概要 木柵土堤
ト、工費 別途八年度農業土木事業費

(二) 防波堤補修

イ、位置 図示
ロ、面積 八〇〇平米 延長 四〇米
ハ、構造概要 表面根固メ斜面混泥土造、裏込栗石小舟ノ曳上ニ便ス

ホ、必要ナル経費概算

Table with 6 columns: 種別, 数量, 単位, 単価, 金額, 備考. Includes rows for 雑船, 揚場, 費場.

(三) 護岸

イ、位置 図示
ロ、延長 二五〇米 天端幅 〇・六米
ハ、構造概要 栗石入混泥土造

(前海面浚渫土ニテ背面ヲ埋土ス)

二、計画説明 返り浪ヲ防ク為本設備ヲナシ住宅地並ニ共同

施設用地ノ安全ヲ期スト同時ニ漁船接岸設備トナス
ホ、必要ナル経費概算

Table with 6 columns: 種別, 数量, 単位, 単価, 金額, 備考. Includes rows for 護岸, 雑費, 用地, 合計.

施設ヲ計画セズ
甲、基礎的調査事項

一、津浪襲来ノ方向及経路

- イ、方向 東方及東南ノ方向ヨリ襲来セリ
二、浸水区域及津浪ノ高サ
イ、浸水区域 本部落ノ海岸及県道ニ沿フタル一部分 図面参照
ロ、津浪ノ高サ 干潮面上 五・〇米
三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫ガ津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ定繋ノ位置

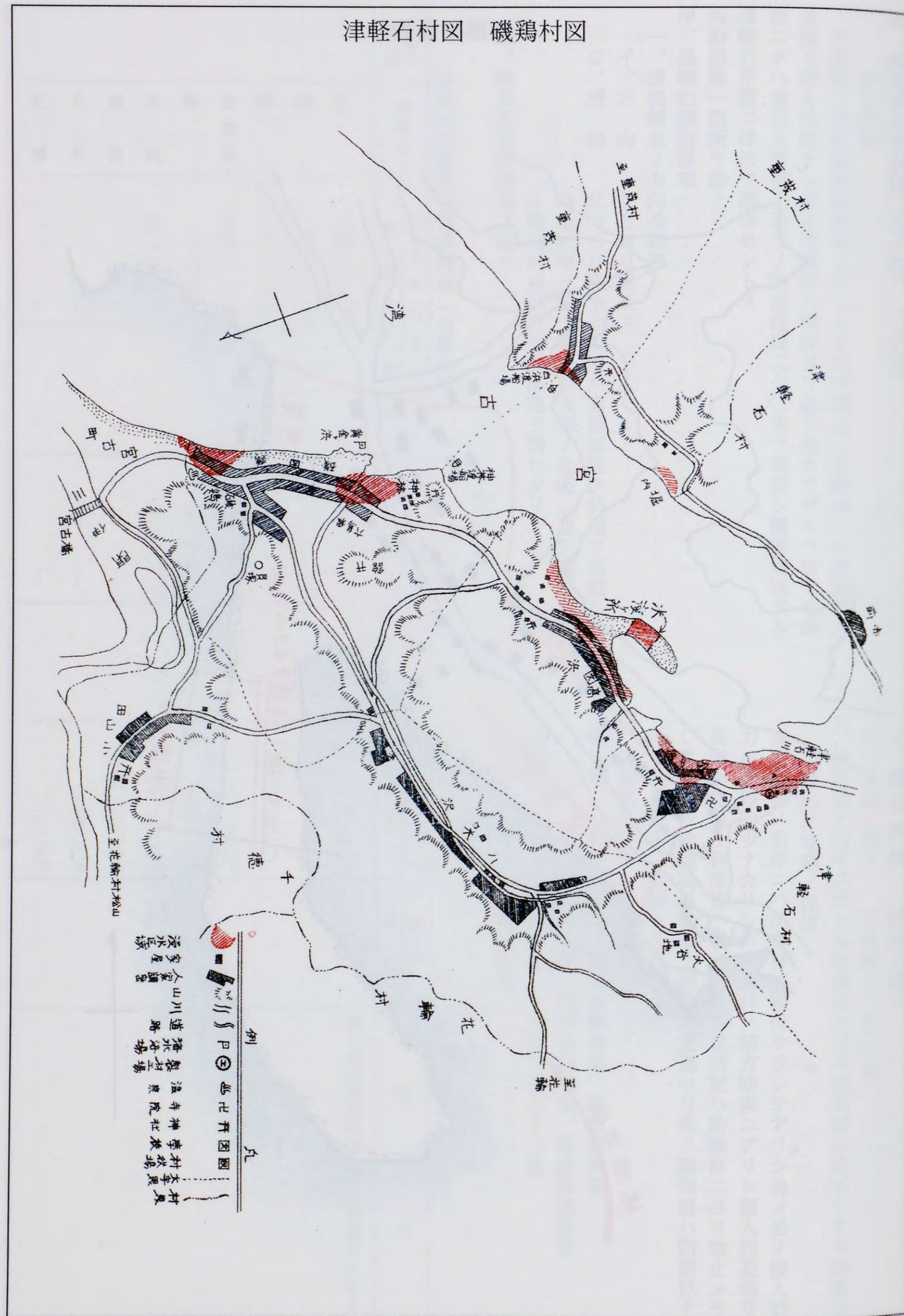
(6) 磯鶏村大字磯鶏 (九三九)

調査要領

沿岸ニハ松林アリ流失家屋五戸ハ松林前面海浜ニ在リシ為被害ヲ蒙リシト云フ此松林ハ防潮林トシテ有効ナルヲ以テ本調査ニハ別段ノ磯鶏村漁獲高(磯鶏浜漁業組合)

Main table with 6 columns: 種類, 数量, 金額, 昭和四年度, 昭和五年度, 昭和六年度. Includes rows for 鮭, 其ノ他ノ魚類, 貝類, 柔魚, 干鰯, 塩鰯, 鮭油, 平均計.

津軽石村図 磯鶏村図



四、各部落ニ於ケル主要漁業  
 種類 鰯地曳網、鰯巾着網、柔魚釣、鮭地曳網、小雑延縄、突棒  
 漁船数 動力船二隻、無動力船三十一隻、其他一八隻

(7) 磯鶏村大字金浜 (五重村)

調査要領

本部落沿岸ニ津軽石川流木材荷揚設備トシテ目下混凝土造護岸並ニ埋立工事実施中ニシテ竣工ノ暁ハ津浪予防ニ関シ有効ナリト被認ヲ以テ本調査ニハ其ノ施設ヲ省略ス

甲、基礎的調査事項

- 一、津浪襲来ノ方向及経路
- イ、方 向 東南東
- ロ、経 路 津浪ハ津軽石村赤前部落ニ突当リタル余波ガ本部落ニ押寄セタル為メ被害少ナシ

二、浸水区域及津浪ノ高サ

イ、浸水区域 図示ニ依ル

ロ、津浪ノ高サ 干潮面上 五・〇米

三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫ガ津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ碇繋ノ位置

沿岸ニ八個人製造場及共同製造場並ニ倉庫等七棟アリタルモ全部押流サル

漁船ハ海岸ニ曳揚ゲテアリシモノ、ミナルヲ以テ夫等ハ全部押流サル

四、各部落ニ於ケル主要漁業

- 種類 鰯揚操網漁業、海苔採取業
- 漁船数 無動力船十二隻
- 漁獲高 磯鶏部落ノトコロニ併記ス



種類別	昭和五年度		昭和六年度		昭和七年度		備考
	数量	金額	数量	金額	数量	金額	
鮭	五四、〇〇〇毛		五〇、五〇〇毛		一一、〇五〇毛		鮎ハ地曳網及川溜ニ依リ漁獲セルモノ
鯛	一五、三八〇貫		一六、五三〇貫		一七、三五〇貫		
鯛	一二六、〇三〇		九七、一二五		一六〇、五二〇		
北寄貝	三四、二〇〇圓		二七、五六〇圓		二八、三五〇圓		
蛸	七、三五〇升		五、四〇〇升		五、六〇〇升		
赤貝	三〇、五〇〇圓		二九、三〇〇圓		二七、八五〇圓		
海苔	—		—		一五〇、〇〇〇枚		
ホヤ	—		—		二、五〇〇貫		
牡蠣	—		—		一一、二五〇石		

津軽石村漁業組合漁獲高(金額不明)

(8) 津軽石大字赤前(法ノ脇) (一五七五)

調査要領

本部落ハ宮古湾奥部南側二位スルヲ以テ津浪ノ主動向ニハ直面セズ余波ヲ蒙ル位置ナレ共宅地高位ハ海面ヨリ余リ高カラザルヲ以テ本調査ニテハ栗石入混凝土造リノ防浪堤長二七〇米ヲ築設シ緩衝地区タル津軽石平野ニ津浪ヲ誘導セントス

尚船揚場一箇所ヲ設ク

甲、基礎的調査事項

一、津浪襲来ノ方向及経路

イ、方向 北方ヨリ襲来ス

ロ、経路 北方ヨリ襲来セル浪ハ赤前部落ノ前面ヲ真直ニ砂浜及松原ヲ超ヘ襲来シ夫等ノ余波(返シ浪)ハ逆ニ磯鶏村金浜及高浜部落ヲ襲ヒタリ

二、浸水区域及津浪ノ高さ

イ、浸水区域 図示ノ通り

ロ、津浪ノ高さ 干潮面上 五・六米

三、津波前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫ガ津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ碇繋ノ位置

宮古湾奥ノ沿岸ニハ防潮林ガ植付ケラレテアリシ為メ浪ノ侵入勢カハ比較的少ナカリシガ防潮林ノ前方砂浜ニアリシ個人製造場及共同製造場及倉庫等ハ破壊セラレ其残骸ハ防潮林ニヨリ喰止メラレタリ従ツテ漁船モ同様ノ運命ニ遭遇セリ法ノ脇部落ハ防潮林ナキモ只夕浸水ノ程度ナリキ

四、各部落ニ於ケル主要漁業

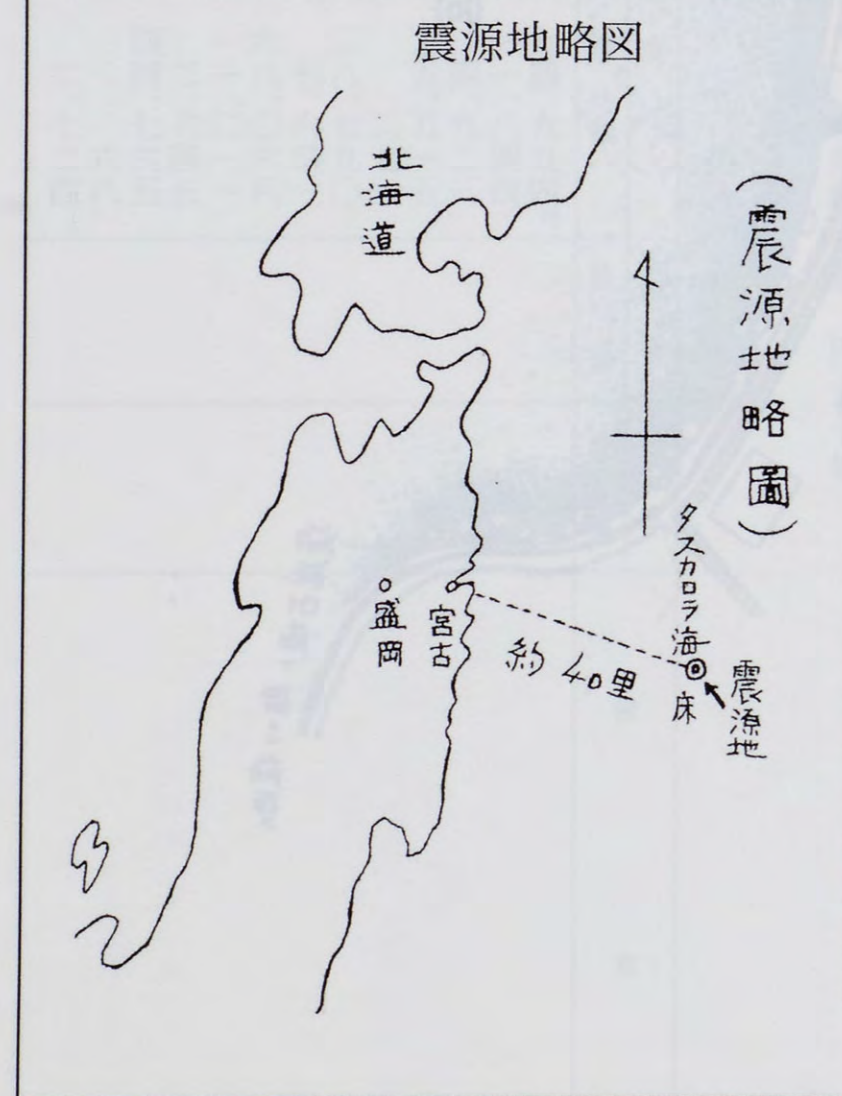
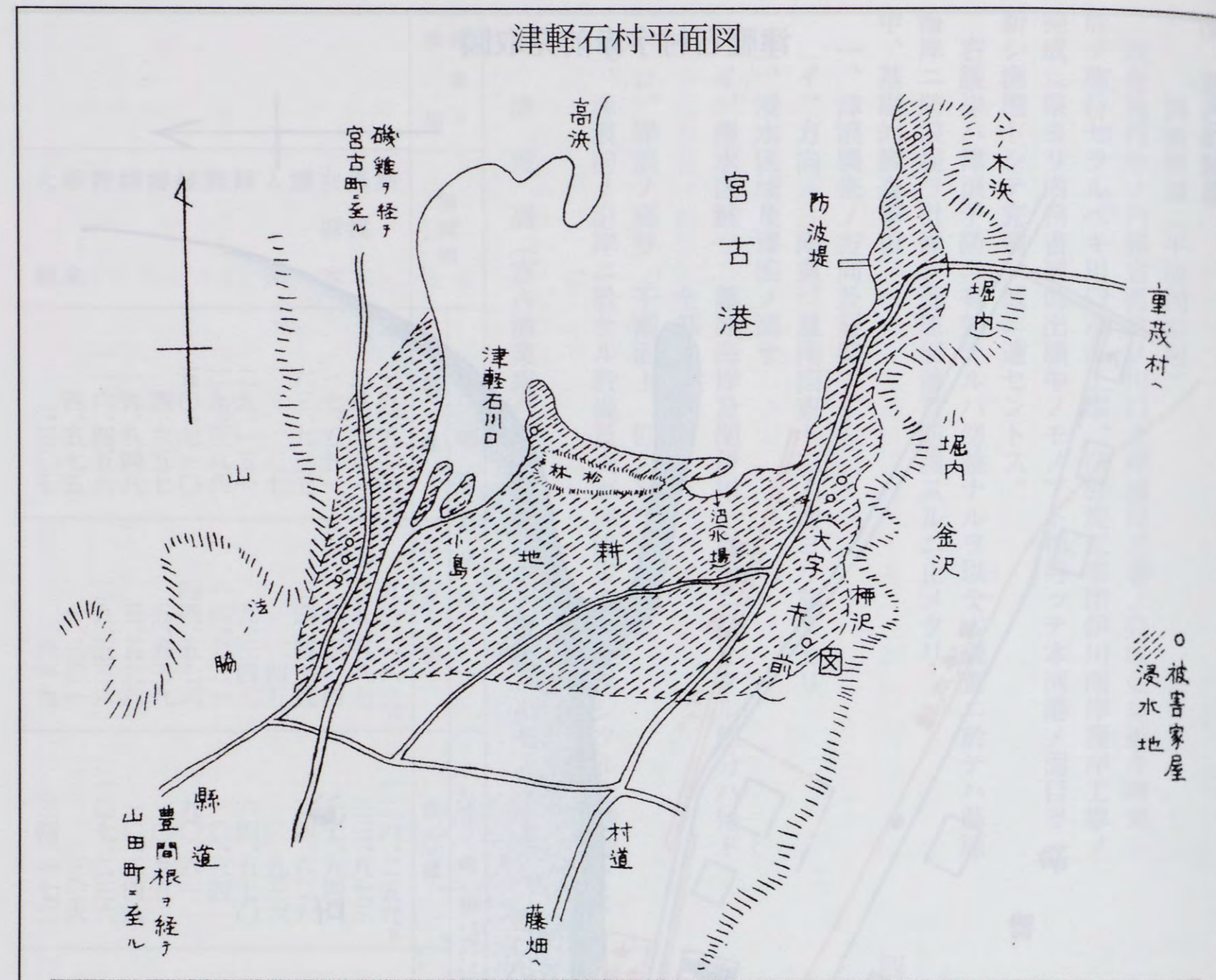
種類 鮭曳網漁業、鯛地曳網漁業、柔魚釣漁業、貝藻類採捕漁業、鯛巾着網漁業、鯛揚操網漁業

漁船數 動力付漁船二隻 無動力船三十二隻

其ノ他運搬船四隻

高浜港平面図





記 事

一、発震時刻 午前二時三十一分三十九秒  
 二、人体感覚時間 約二分間余  
 三、有感区域 北、樺太、南、九州  
 四、最大震幅 二種一  
 五、津浪襲来時刻  
 第一回 強震後 三分位  
 第二回 第一回後 一五分位  
 第三回 第二回後 二分位  
 六、波浪高々 最高約五米  
 七、海面平常ニ歸リタル時 午前五時頃  
 八、前田、津波ヨリ三十八年目ニシテ今日マデ四十年内外ニ一度宛、未ダ襲来ナリト聞ク

乙、漁村復旧計画ニ関スル調査事項

一、予防施設ニ関スル事項

(一) 船揚場

イ、位置 図示

ロ、面積 八〇〇平米 延長 四〇 斜面幅 二〇  
 勾配 六分の一

ハ、構造概要 混凝土造斜面  
 ニ、必要ナル経費概算

種別	数量	単位	単価	金額	備考
船揚場	八〇〇	平米	五円	四、〇〇〇円	
雑費			五〇	四、〇〇〇円	
計				五、〇〇〇円	

(二) 防浪堤

イ、位置 図示

ロ、延長 二七〇米 幅員 上幅〇・六米 下幅 一・六米  
 高さ 三・六(根入共)

ハ、構造概要 栗石混凝土造  
 ニ、必要ナル経費概算

種別	数量	単位	単価	金額	備考
防浪堤	二七〇	米	五五円	一四、八五〇円	
雑費			二	一、二八六	
計				一七、〇〇〇	

(七) 緩衝地区

イ、位置 前面ノ田畑

其他参考事項 本村内、堀内部落ニ関シテハ別途八年度農

業土木事業トシテ防波堤築設ノ実施計画中ナリ

種 類	種 類 別	昭 和 五 年 度		昭 和 六 年 度		昭 和 七 年 度		備 考
		数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額	
真鮪	真鮪	七九、五二一	九〇、一八三	一一、二五九	九四、九九四			
女鯛	女鯛	二八、二八一	二九、五八七	一一、九七三	一一、八四四			
入鯛	入鯛	一七、五五一	八、三二四	一七、九四八	一四、九三三			
鱒	鱒	六三、九三七	三四、四一五	一一、六二六	三五、五二五			
鮭	鮭	二九、一三一	九、三四三	六四、五七〇	三八、七九〇			
鱒	鱒	二九、三三八	一六、七二一	一〇、三五一	六八、〇六八			
鱒	鱒	五〇、七一〇	四四、五七六	九〇、六一一	一一、二五一			
鱒	鱒	四、六五七	五、五九八	一〇、二四八	二、六四五			
鱒	鱒	一、八四八	三、五三六	一〇、二四八	四、七六五			
鱒	鱒	二、六四八	一、三〇一	三〇、二二六	四、七六五			
鱒	鱒	三、三〇七	一、四一九	三四、一七二	二、七二四			

漁獲 高(宮古漁業組合共同販売所ニ取扱タルモノ、ミ)

現在施行中ノ内務省直営ノ川口北岸護岸工事ノ完成並ニ近キ将来ニ於テ施行セラルベキ川口浚渫工事、防砂堤工事閉伊川南岸護岸工事ノ完成(県ヨリ内務省補助出願中ノモノ)ト相待ツテ本河港ノ面目ヲ一新シ漁港トシテ完備ノ域ニ達セントス。

右護岸ハ津浪予防ニ有効ナルハ勿論ナルヲ以テ本調査ニ於テハ藤原海岸ニ防浪堤ヲ計画シ藤原部落ヲ防護スルニ止メタリ

甲、基礎的調査事項

一、津浪襲来ノ方向及経路

イ、方向 南東、及南南東ト二方面ヨリ襲来セリ

二、浸水区域及津浪ノ高サ

イ、浸水区域 藤原海岸及閉伊川ノ河岸ニ沿ヒタル部分ハ殆ト全部

ロ、津浪ノ高サ 干潮面上 四・〇米

三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫方津浪災害ニ及ボシタル影響並

二漁船ノ碇繋ノ位置

藤原海岸ニ個人製造場及干場アリ海岸ニ沿フテ高サ五尺位ノ防波土堤アリタル為メ其ノ部分ノ上方ニアリシ人家及製造場ニハ被害ナシ

閉伊川中ニ碇繋セル漁船及運搬船等各種船舶ハ津浪ノ為メ川上ニ押流サレ藤原及宮古ヲ連絡セル橋梁ヲ破壊シ交通杜絶ス

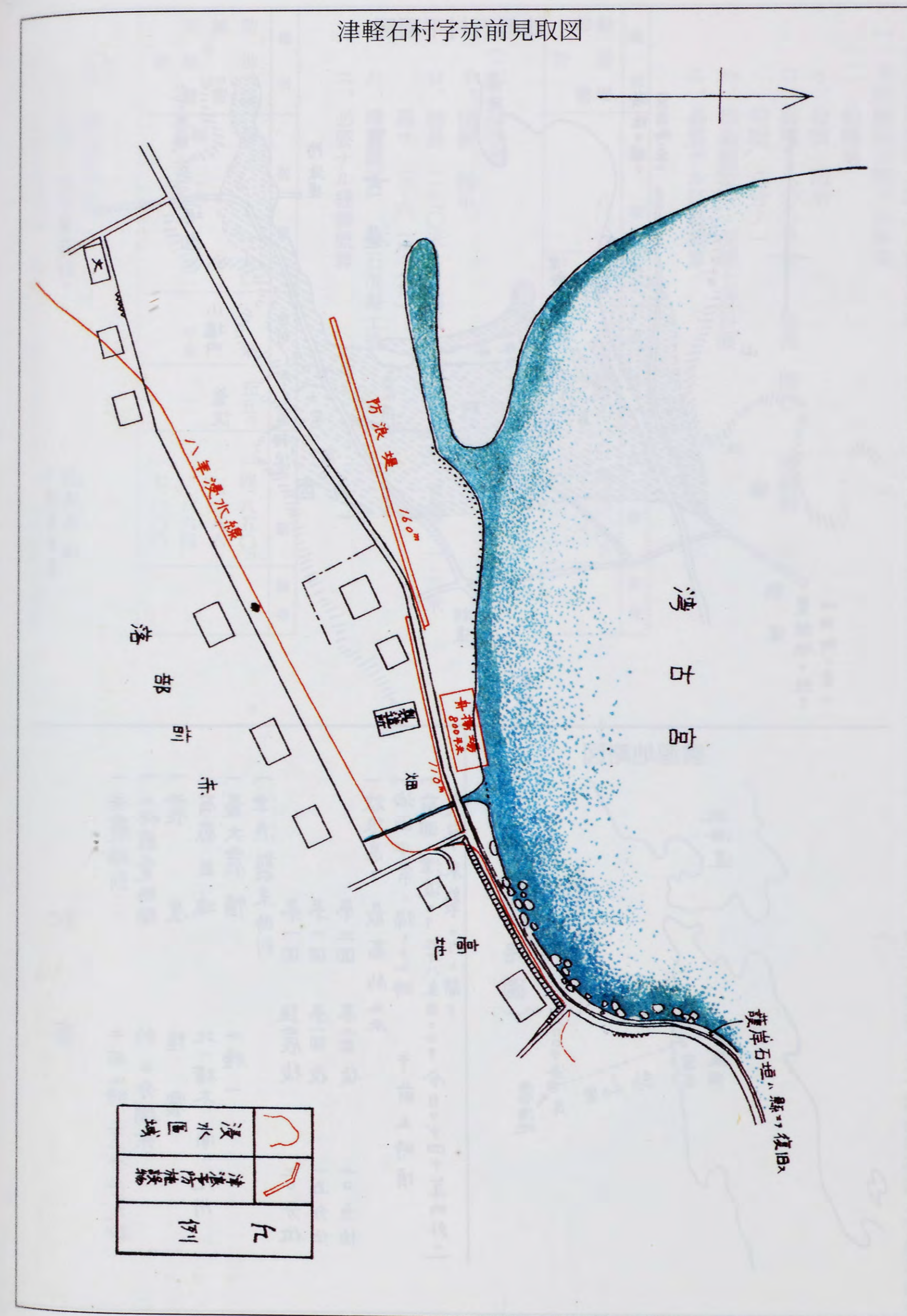
然ルニ宮古湾内ニ内務省港湾築港工事ニ依リ防波堤工事中ナレドモ其ノ為メ浪ノ勢力ハ減退シタルモノガ襲来セリ

四、各部落ニ於ケル主要漁業種類

鰹釣、鮪延縄、鱒流網、鮪流網、秋刀魚流刺網、鮪巾着及揚操網、柔魚釣、鮭延縄及流刺網、鮪延縄機船手操其ノ他、定置漁業

漁船數 動力船 五十噸以上 一隻 二十噸以上 四隻  
 十五噸以上 五八隻 十噸以上 十五隻  
 十噸以下 十八隻 計 九六隻  
 無動力船 四十七隻

津軽石村字赤前見取図



種類	数量	昭和五年度		昭和六年度		備考	
		数量	金額	数量	金額		
鮑	11,833	7,925	11,562	9,518		鮪等ノ如キ鮮魚ハ主トシテ 宮古共同販売所ニ於テ販売ス 二ヶ年平均七九、三六三円 (販売所取扱分)	
蛸	837	1,359	1,504	6,873			
海栗	1,115	167	168	580			
鹿角	28,090	7,913	3,089	1,819			
細布	29,944	1,557	5,298	1,819			
鯛	72,075	23,967	14,034	34,764			
貝	3,982	1,654	1,400	3,764			
鮎	39,736	2,698	2,775	2,475			
鮮魚	24,020	8,174	22,875	22,875			
委託魚類	211,527	65,419	131,847	93,307			
計							

乙、漁村復旧計画ニ関スル調査事項

一、津浪予防施設

(六) 防浪堤

イ、位置 平面図示

ロ、延長 四八〇米 幅員 天端 三米 高サ 一米八〇

ハ、構造概要 表面 玉石入混凝土造(天端共) 堤心土砂裏面 芝張

二、必要ナル経費概算

種別	数量	単位	単価	金額	備考
防波堤	長 三、四八〇	米	一一〇円	五二、八〇〇円	
雑用地	四八〇	平米	一	四八〇	
計				五三、二八〇	

宮古町戸数及人口海嘯被害調査書 (昭和八年三月三日)

被害前ノ戸数	被害前ノ人口	流失全戸数	半潰戸数	浸水戸数	死亡人員	負傷人員	船舶ノ流失破損隻数
三、四二〇	一八、二二六	一八	一四	八四	三三	五	一一一
							付分損
							有セザルモノノ流失全潰
							同上分損
							一五一

備考 其ノ他道路橋梁、棧橋、漁具漁網、船舶附属品、機具機械、木材類、肥料等ノ流失、破損ノ被害多ク損害見積総額約百万円

二、住宅地移転ノ必要ハナシ

(10) 宮古町欽ヶ崎 調査要領(宮古平面図参照)

漁獲高(欽ヶ崎漁業組合取扱ノモノ)

種類	種類別	昭和五年度		昭和六年度		備考	
		数量	金額	数量	金額		
鮑	鮑	11,833	7,925	11,562	9,518	鮪等ノ如キ鮮魚ハ主トシテ 宮古共同販売所ニ於テ販売ス 二ヶ年平均七九、三六三円 (販売所取扱分)	
蛸	蛸	837	1,359	1,504	6,873		
海栗	海栗	1,115	167	168	580		
鹿角	鹿角	28,090	7,913	3,089	1,819		
細布	細布	29,944	1,557	5,298	1,819		
鯛	鯛	72,075	23,967	14,034	34,764		
貝	貝	3,982	1,654	1,400	3,764		
鮎	鮎	39,736	2,698	2,775	2,475		
鮮魚	鮮魚	24,020	8,174	22,875	22,875		
委託魚類	委託魚類	211,527	65,419	131,847	93,307		
計							

前記ノ如ク引波ノ襲来ヲ受ケタルモ被害輕微ナリ、内務省直管ノ防波堤並ニ岸壁埋立工事方近キ将来ニ於テ完成ノ暁ニハ商、漁港トシテ有効ナルハ勿論一方津浪ニ対シテ防護ノ効力大ニシテ一層被害率ヲ輕減スベキト信スルヲ以テ本調査ニハ別段ノ施設ヲ認メズ

甲、基礎的調査事項

一、津浪襲来ノ方向及経路

イ、方向 南方

ロ、経路 宮古湾奥津輕石村迄侵入セル津浪ノ帰り波(引波)ハ正面ヨリ本湾ヲ襲ヒ真正面ニ当レル北方沿岸家屋ニ大ナル漁船ヲ衝突セシメタリ

二、浸水区域及津浪ノ高サ

イ、浸水区域 図示ニ依ル

ロ、津浪ノ高サ 干潮面上 五〇米

三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫方津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ碇繋ノ位置

乙、漁村復旧計画ニ関スル調査事項

一、津浪予防施設

(六) 防浪堤

イ、位置 平面図示

ロ、延長 四八〇米 幅員 天端 三米 高サ 一米八〇

ハ、構造概要 表面 玉石入混凝土造(天端共) 堤心土砂裏面 芝張

二、必要ナル経費概算

備考 其ノ他道路橋梁、棧橋、漁具漁網、船舶附属品、機具機械、木材類、肥料等ノ流失、破損ノ被害多ク損害見積総額約百万円

二、住宅地移転ノ必要ハナシ

(10) 宮古町欽ヶ崎 調査要領(宮古平面図参照)

護岸、水上警察署、共同販売所、其ノ他海中ニハ目下工事中ノ岸壁ノ基礎工事及防波堤等ノ為当部落ハ非常ニ被害少ナシ

只夕正面ニ当ル共同販売所及水上警察署及三陸冷蔵株式会社其ノ他個人家宅等相当基礎工事ノ堅固ナル建物ガアリタル為メ後方ノ人家ニハ被害ナク只夕浸水ノ程度ナリ

従ツテ沿岸道路ニ沿フタル家屋ハ入口、戸及其ノ他ノ板囲ヲ破ラレタル程度ナリ

四、各部落ニ於ケル主要漁業種類 鰹釣、鮪延縄、鱈延縄、秋刀魚流刺網、鮭鱒流刺網、柔魚釣発動機手操貝藻類採捕

漁船数 動力付二三隻 無動力船四〇〇隻(内破損一六二隻)

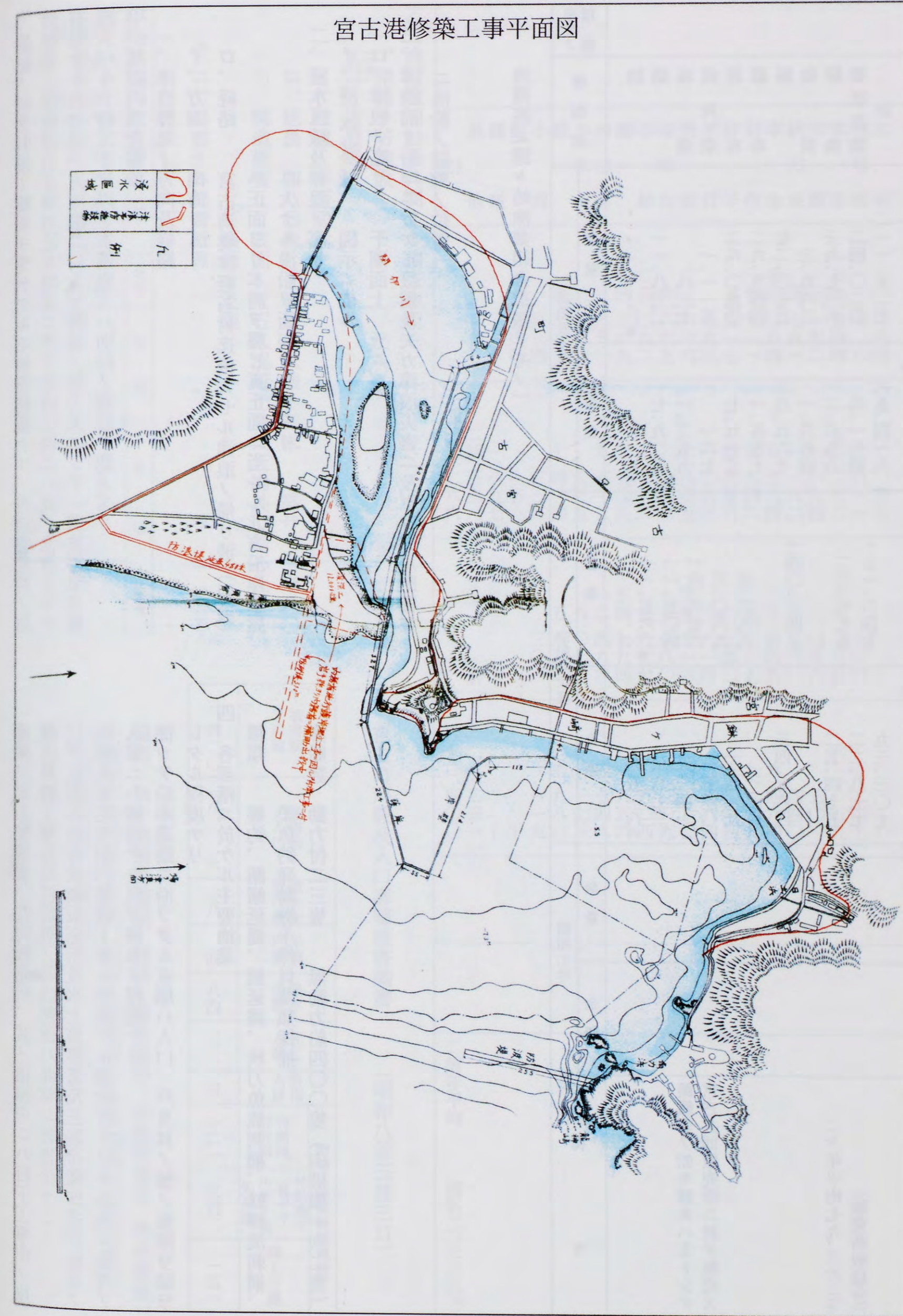
種 類	種 類 別	昭和五年度		昭和六年度		昭和七年度		備 考
		数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額	
鮪	鮪	四〇、三〇〇	二、〇五一	二二、四〇〇	一、一七〇	三四〇、〇〇〇	二八〇、五〇〇	（女遊部部落ノ漁獲高ハ上記ノ約二割五分以内トス）
鱈	鱈	二二、五〇〇	四二、八四九	六二、〇〇〇	一、〇〇〇	一五、〇〇〇	二二、〇〇〇	
鮭	鮭	一一、二〇〇	二五、九一六	一〇、〇〇〇	八、六二〇	八、五〇〇	三、八〇〇	
鱒	鱒	一一、二〇〇	一一、三〇〇	二、八〇〇	三、二〇〇	四、〇〇〇	一一、二八五	
鮑	鮑	一六、六〇〇	六、〇〇〇	二、八〇〇	三、二〇〇	二、三〇〇	四、五〇〇	
雲丹	雲丹	一、八〇〇	一一、八五〇	九八〇	一一、三五〇	一、〇〇〇	二、〇三〇	
蛸	蛸	一三、〇〇〇	一一、二八〇	八二〇	一、六七〇	一、〇〇〇	二、〇三〇	
昆布	昆布	七、二〇〇	二、三〇〇	二、四五〇	三、〇七〇	一、〇〇〇	三、二三〇	
若布	若布	一、三〇〇	一、四〇〇	五八〇	三、〇七〇	一、〇〇〇	一、〇八〇	
角魚	角魚	一、二〇〇	一、八〇〇	二六〇	三、八〇〇	三、〇〇〇	三、九〇〇	
合計		一一一、四二〇	四八、一九〇	四八、一九〇	八五、五二〇	八五、五二〇	三箇年平均八一、七三〇	

崎山浦漁業組合漁獲高

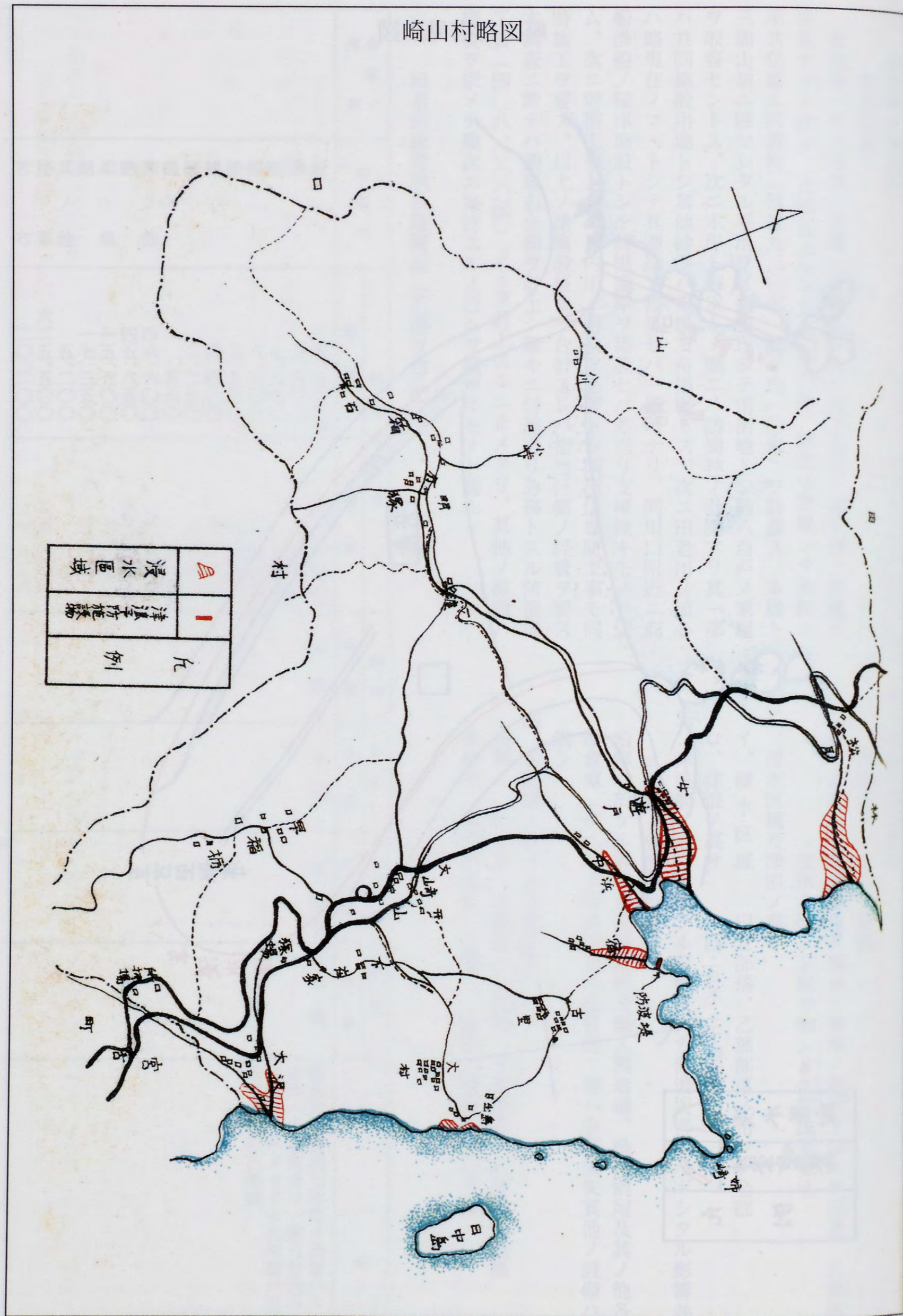
(11) 崎山村大字宿 (女遊部) 調査要領 (崎山村略図参照)  
 女遊部部落住宅地ハ海岸ヲ距ツル七百米ノ陸上奥地ニ在リ今回海岸ト部落トノ中間地域ニ防潮林ノ計画アルヲ以テ災害予防ノ目的ヲ達シ得ベシ  
 本海浜ハ外洋ニ直面シ波高ク船着悪シ  
 女遊部、宿、古里等部落ノ漁船ハ宿ノ浜ヲ其ノ根拠地トシ時化ノ時ハ小舟ハ陸上ニ引揚ゲ動力付漁船ハ遠ク嶽ヶ崎ニ避難スル状況ナリ宿ノ浜ノ東端ヨリ北方ニ向ツテ天然ノ岩礁海上ニ羅列シテ東北ノ風浪ヲ遮リ適當ナル船溜ナリ然レ共尚岩礁ノ間隙ヨリ風浪ノ侵入スルアリ  
 本調査ニ於テハ之等岩礁ヲ基礎トシ防波堤延長八〇米ヲ計画ス  
 甲、基礎的調査事項  
 一、津浪襲来ノ方向及経路

イ、方向 北東  
 二、浸水区域及津浪ノ高サ  
 一、浸水区域 図示ニ依ル  
 口、津浪ノ高サ 干潮面上 五・七米  
 三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫方津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ碇繋ノ位置  
 漁具庫、漁夫宿泊所等アリシモ全部流失セリ 人家ハ海岸ヨリ七百米ヲ距テタル陸上奥地ニ在リ砂浜ニ曳揚ゲテアリタル漁船ハ殆ド全部流失  
 四、各部落ニ於ケル主要漁業  
 種類 定置漁業、柔魚釣、稚小延縄、貝類及藻類採取業  
 漁船数 (崎山村) 動力付七隻 無動力船 大二七隻 小一八〇隻

宮古港修築工事平面図



崎山村略図



乙、漁村復旧計画ニ関スル調査事項  
一、津浪災害予防施設

(二) 船溜

(1) 防波堤

イ、位置 海中岩礁中ニ設置ス

ロ、方向 平面図示

ハ、長さ 八〇米

ニ、幅員 三・五米 高さ 五米

ホ、構造概要 混泥土単塊堤、基礎岩磐(一部八捨石)

(4) 必要ナル経費概算

種別	数量	単位	単価	金額	備考
防波堤	八〇	米	三〇〇円	二四〇〇〇円	
器具機械費	—			二、五〇〇	
雑費	—			二、五〇〇	
計				二九〇〇〇	損料

種 類	種 類 別	昭和五年度		昭和六年度		昭和七年度		備 考
		数 量	金 額	数 量	金 額	数 量	金 額	
若 昆 其 蛸 柔 鮑 其 鱒 鯉 鮪 鮫 鰈 鱈 鱒 鮭	ノ ノ	三、五、五〇〇	三、一、九、五〇	不明	不明	不明	不明	昭和六年度及七年度ノ漁獲ハ六年度ハ五年度ヨリ一割五分内外ノ増額ヲ示メセドモ七年度ハ五年度ヨリ約三割減
布 布 他 魚 他		六、二、五〇〇 二〇、二、五〇〇	一、八、三、六〇〇 二、五、〇〇〇	不明	不明	不明	不明	
		一、七、三、五〇〇 四、五、八、五〇〇	三、一、二、三〇〇 五、九、六、〇〇	不明	不明	不明	不明	
		四、六、六、五〇〇 二、二、五〇〇	六、三、九、五〇〇 一、〇、一、三〇〇	不明	不明	不明	不明	
		八、五、五〇〇 三、五、〇〇〇	一、五、七、四〇〇 一、〇、五〇〇	不明	不明	不明	不明	
		七、五、〇〇〇 四、四、五〇〇	一、五、七、四〇〇 七、一、二〇〇	不明	不明	不明	不明	
		五、五、〇〇〇 二、二、五〇〇	三、一、二、三〇〇 一、〇、一、三〇〇	不明	不明	不明	不明	

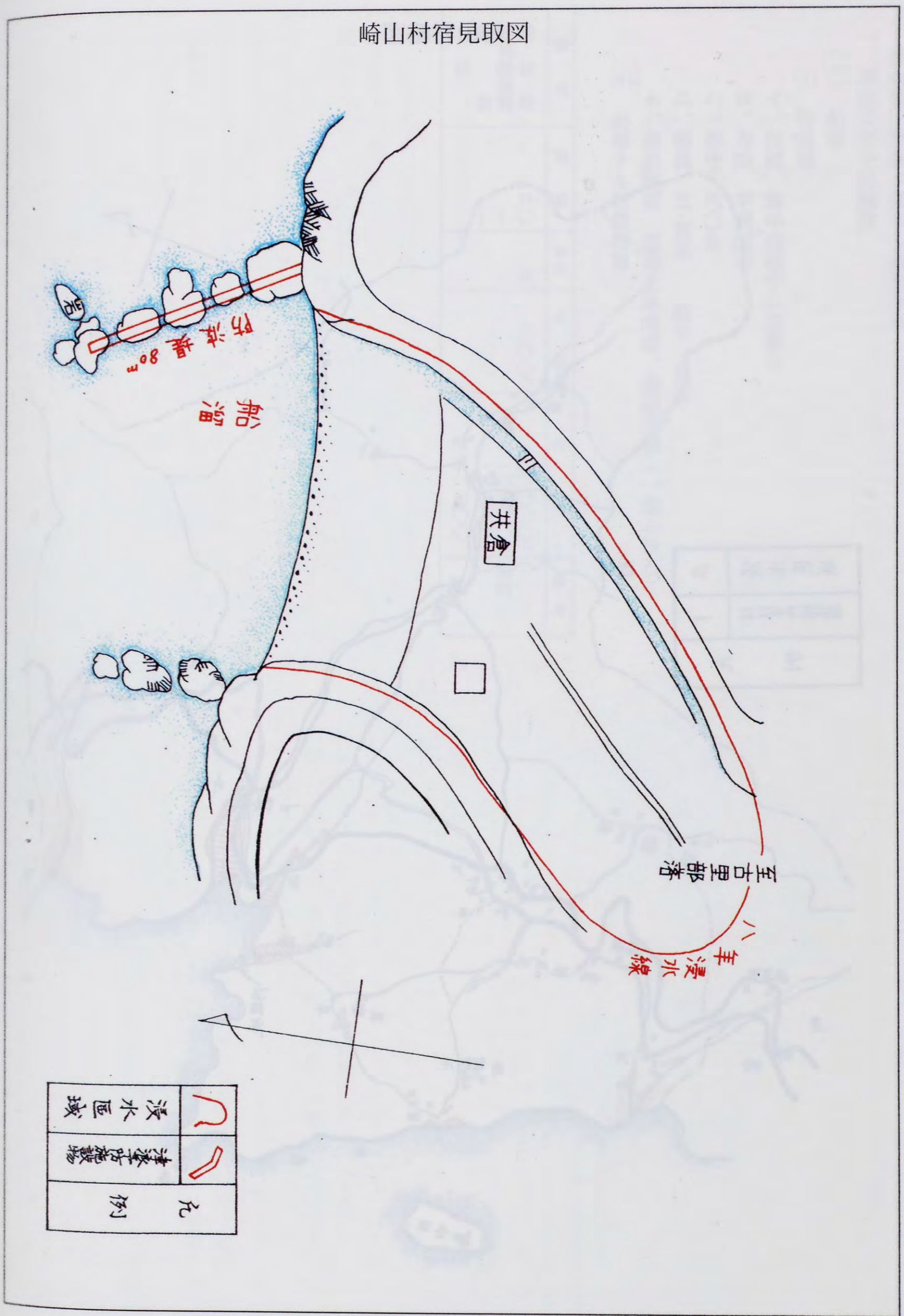
田老浜漁業組合漁獲高(乙部ヲ含ム)

(12) 田老村大字田老 調査要領

本部落ハ殆ド全滅ノ悲運ニ遭遇シタルニ鑑ミ先以テ住宅地ノ防護ヲ急務ナリト認メ、本調査ニ於テハ略県当局ノ計画ヲ踏襲シテ別図ニ示ス位置ニ防浪堤(延長九三〇米 高平均一〇米)ヲ設置ス、本堤ト三面山岳ニ囲マレタル平地ヲ区画整理シテ市街地トシ約八百戸ノ家屋ヲ收容セントス、次ニ本堤ト海浜トノ間ニハ防潮林ノ計画アリ其一部ハ共同施設用地トシ其他砂浜ハ干場及舟揚場トス、次ニ田老川ノ流心ハ略現在ノマ、トシテ其護岸ヲ修築セバ一層可ナリ、同川口附近ニ商船漁船ノ接岸施設トシテ荷揚護岸ヲ築設セバ差当リ支障無キモノト認ム、次ニ附帯工事トシテ長内川ノ附換ヲ必要トシ同河川堤防工事モ同時施工ヲ要ス、以上ノ諸施設経費ヲ合計スレバ相当巨額ノ経費ヲ要ス本調査ニ於テハ到底石全部ヲ計上シ難キニ付差当リ急務トスル防浪堤工費(四〇八、〇〇〇円)ノミヲ計上スルニ止メタリ、其他ノ施設ハ経費ヲ求メテ順次ニ施行スルノ已ムヲ得ザルモノト認ム

甲、基礎的調査事項

- 一、津浪襲来ノ方向及経路
- 二、浸水区域及津浪ノ高さ
- 三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫方津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ碇繋ノ位置
- 四、各部落ニ於ケル主要漁業種類 柔魚釣、雑延繩、鮪流網、定置漁業、貝藻類採捕業 漁船数 動力付漁船 五隻 無動力漁船 三〇五隻



製 造 物	魚獲高	石花菜	海菜	其ノ他	錫	干鮑	干昆布	干若布	其ノ他	合計
	八五〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	九五四	八〇〇	一〇〇	一〇〇	二〇八	二〇八
計	員數	八五〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇 九五四 八〇〇 一〇〇 一〇〇 二〇八 二〇八								
		合計	二五、五五二							

乙、漁村復旧計画ニ関スル調査事項

一、津浪災害予防施設

- (六) 防浪堤
- イ、位置 図示
- ロ、延長 九三〇米 幅員 天端三・五米 下敷一六・五  
高サ 一〇米 胸壁高 二米
- ハ、構造概要 堤前面栗石入混凝土壁、堤心土石 天端及背面混凝土張
- ニ、必要ナル経費概算

種別	數量	單位	單價	金額	備考
防波堤	九三〇	米	一	九三〇	
雜費	一八六〇〇	米	四〇〇	七、四〇〇	
用地費	九三〇〇	平米	一	九三〇	
計				四〇八、〇〇〇	

二、漁村住宅ニ関スル事項

(二) 職業別戸數調(田老、乙部合併)(昭和八年三月罹災前現在)

職業別	戸數	計
漁業	四五〇	
農業	二二〇	
商業	九〇	
工業	二〇	
其他	二一	
計	一、〇〇一	四、三七五

(二) 従来ノ住宅地位ニ移転スベキ住宅地ノ適否

區別	イ、海岸ヨリノ距離	ロ、海面上ノ高サ	ハ、河川トノ關係	ニ、交通關係
従来ノ住宅地	一〇〇—五〇〇米	一—三米		
移転スベキ住宅地	同	同		

移転スベキ住宅地ニ付テノ調査

ト、位置ノ決定 従来ノ位置ニ區画整理ヲ施シテ住宅地トシ防浪堤ニテ防備ス

(13) 田老大字乙部

- 甲、基礎的調査事項
- 一、津浪襲来ノ方向及経路
- イ、方向 乙部部落ノ船揚場及漁船ノ定繋場所ハ田老浜ヲ共用セル關係上本項ハ田老部落ニ準ズ
- 二、浸水区域及津浪ノ高サ 一四・五米
- ロ、津浪ノ高サ 一四・五米
- 三、津浪前ノ沿岸ニ於ケル設備及夫ガ津浪災害ニ及ボシタル影響並ニ漁船ノ碇繋ノ位置

- 沿岸ニ設備ナシ
- 四、各部落ニ於ケル主要漁業種類 柔魚釣、鱒延縄、鮑採捕、藻類採捕
- 漁船數 動力付五隻 無動力三二五隻
- 水産業復旧計画書 乙部浜漁業組合(本年七月田老浜漁業組合ト合併ス)

項目	員數	金額	實 施 計 画		増 減	低利資金 所要金額	助成金交付額	備 考
			員數	金額				
漁船復旧費	二九八	二〇、四三〇						
一、無動力漁船復旧	五	一、〇〇〇						
二、動力付漁船復旧	五	一、〇〇〇						
三、動力付漁船就業資金	五	一、〇〇〇						
漁具復旧費	二九八	一〇、四五〇						
一、小漁具復旧	七	一〇、四五〇						
二、曳網類復旧	二九八	三、一五〇						
三、延縄類復旧	三	一〇、二〇〇						
四、刺網類復旧	四	六、一五〇						
五、定置漁具ノ復旧	一〇	一、五〇〇						
共同施設復旧	一一	二、〇〇〇						
一、共同販売所復旧	一一	二、〇〇〇						
二、共同製造場復旧	一一	二、〇〇〇						
三、共同製造場就業資金	一一	一、五〇〇						
四、共同倉庫復旧	一一	二、〇〇〇						
七、個人製造場復旧	一一	二、〇〇〇						
計		六九、六八〇						

(14) 田老村大字撰待(執事)

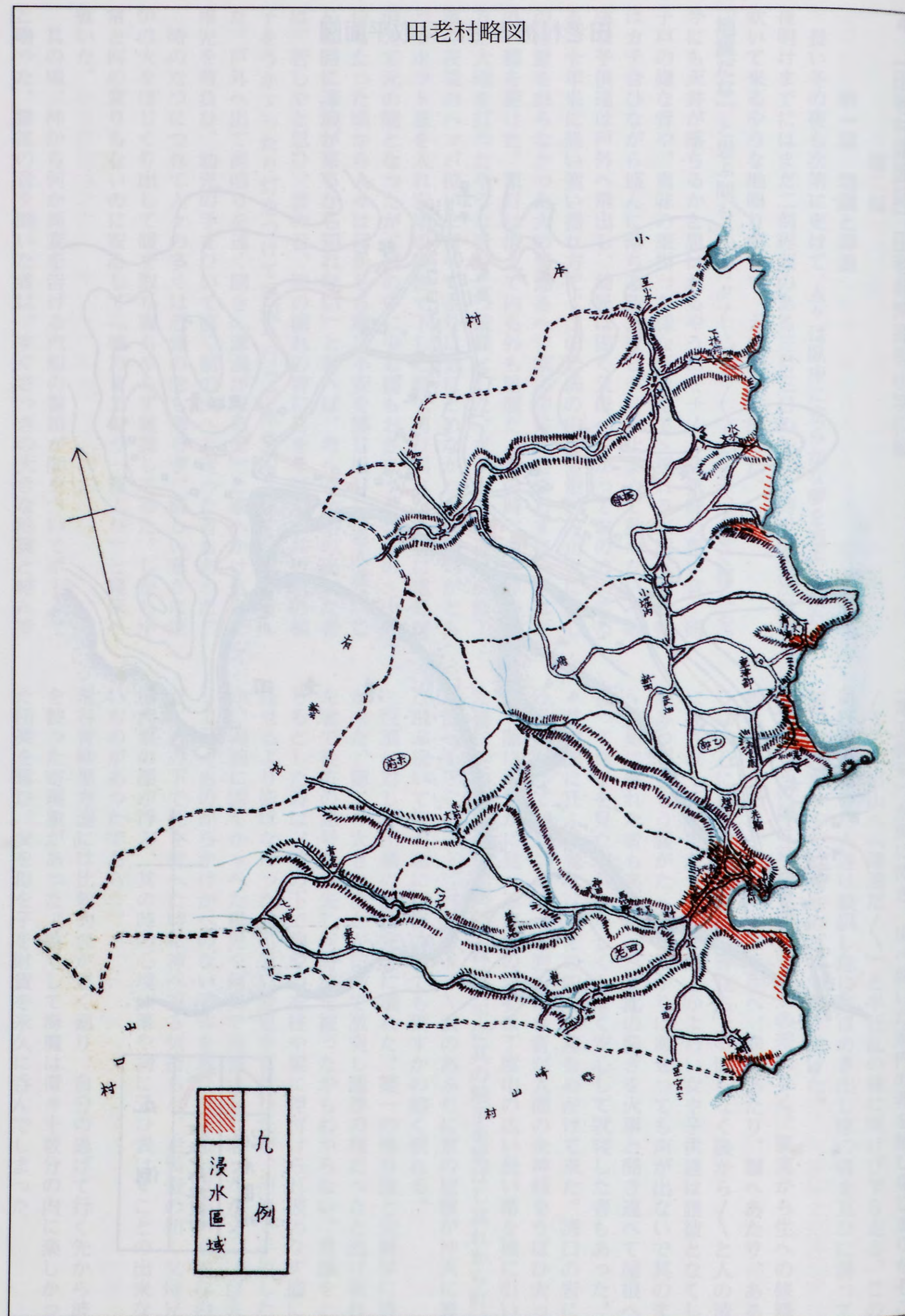
調査要領

山間ノU字型低地ニテ本部落ハ海岸ヨリ十数町ヲ距ツル奥地ニアリ

其間ノ谷間ニハ松林雑樹林アリテ防浪ノ効ヲナシ部落ノ被害ハ輕微ナリ

海岸高地ニ小漁船ヲ曳上げオク小許ノ漁業用地アリ共同仮倉庫アル





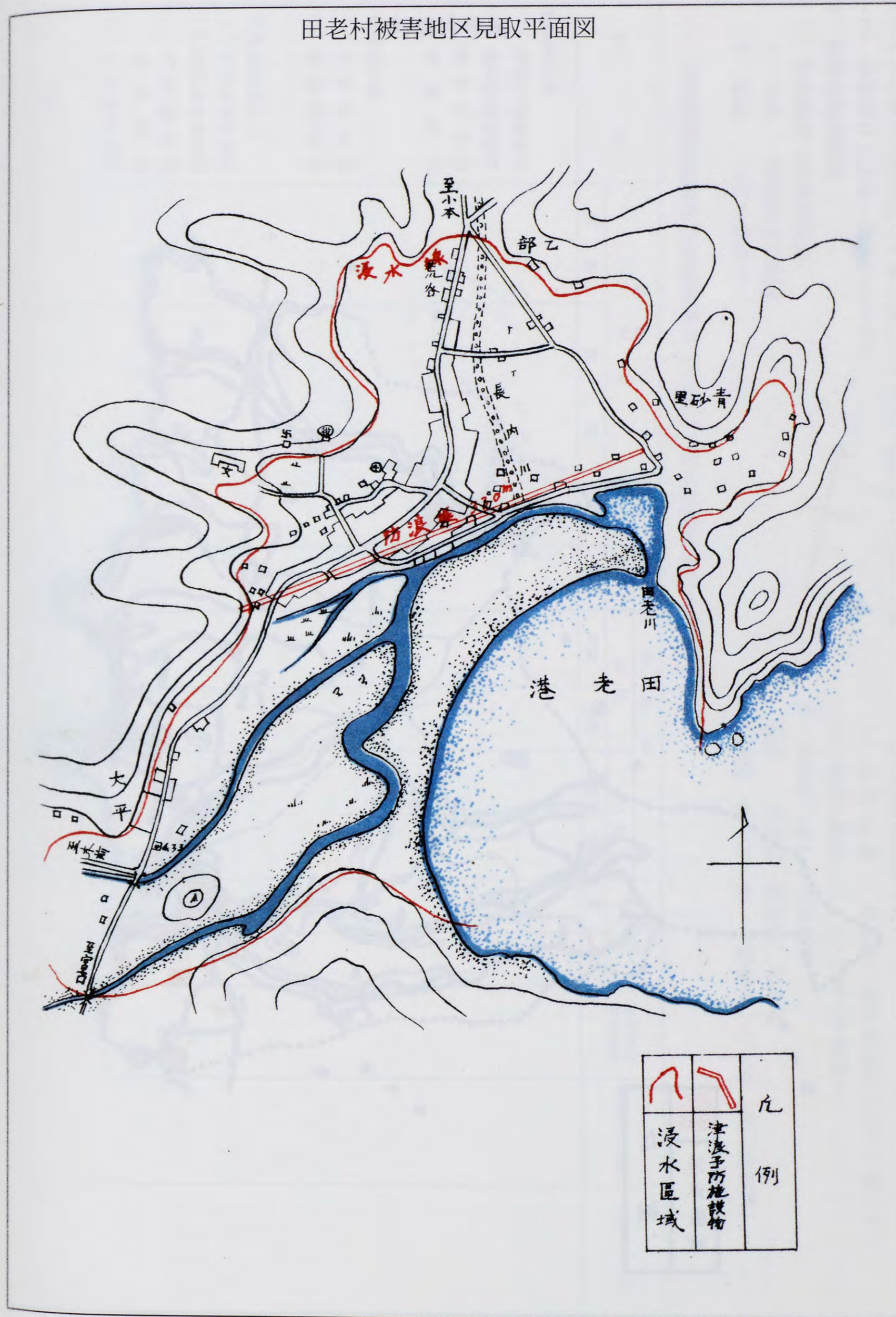
ノミニテ住家ナク部落民ハ半農半漁ニシテ出漁ノ際海岸ニ出向クヲ常トス 本調査ニハ別段ノ施設ヲ計上セズ  
 甲、基礎的調査事項  
 一、津浪襲来ノ方向及経路  
 イ、方向 東南東ヨリ襲来  
 ロ、経路 三段ニ襲来セリ

二、浸水区域及津浪ノ高サ  
 イ、浸水区域 本部落ノ海岸及川岸ニ沿フテ浸水セリ  
 ロ、津浪ノ高サ 一六・八米(干潮面上)  
 四、各部落ニ於ケル主要漁業  
 種類 柔魚釣、鱒延縄、鮫延縄  
 漁船数 動力付一隻 無動力二七隻(復旧決定数)

水産業復旧計画撰待浜漁業組合(八年七月田老浜漁業組合ト合併ス)

項目	予 定		実 施 計 画	対 比		備 考
	員 数	金 額		増 減	低利資金 所要金額	
漁船復旧費						
一、無動力漁船復旧	一一八	七、九二〇				
二、動力付漁船復旧	一	一、五〇〇				
三、動力付漁船 就 業 資 金	一隻分	二〇〇				
漁具復旧費						
一、小漁具復旧	一一八	四、一三〇				
五、刺網類復旧	二三〇	三、四五〇				
共同施設復旧						
一、共同販売所復旧	一	一、〇〇〇				
二、共同製造場復旧	一	二、〇〇〇				
三、共同製造場 就 業 資 金	一	一、〇〇〇				
四、共同倉庫復旧	一	一、五〇〇				
計		二二、七〇〇				

田老村被害地区見取平面図



4 「田老村津浪誌」 田老尋常高等小学校編

第一章 地震と津浪

長い冬の夜も次第に更けて、人々は臥床に安らかな夢を追ふてゐた。夜明けまでにはまだ二刻程間のある三月三日の午前二時半頃突然風の吹いて来るやうな地鳴りがして、大地が揺れ出した。

「地震だな」と思ふ間もなくガタ／＼上へ下へ大きく揺れる。今にも天井が落ちるかと思はれるやうにミチ／＼薄気味の悪い音、硝子戸の嫌な音や、重味の乗掛った様な音をたて、揺れる家屋、柵の物はカチ合ひながら盛んに落ちる時計はピタリと止まって動かない。敏感な子供達は戸外へ飛出し、幼児は固く父母へすがつておののいてゐる。十年来に無い強い揺れ方だ、この恐怖の中にも炬炉の止火に細心の注意を怠らなかつた大の男達さへ、家の中に居たまらずに一旦は戸外へ難を避けた。電灯は消えて内も外も暗闇だ、其の時、遠く沖の彼方で大砲を打ったやうな音が二つ続様にした。だが人々は道路改修工事の夜業のハッパ位に考へて余りに気にとめなかつた。電灯がともつてホット息を入れ安堵の胸撫で下した時、再び揺れた地震に電灯は消えて元の闇となつたが、其の中に少し揺れもおさまつた。ものゝ十分位もたつた頃から人々は何かしら胸に不安を感じ出した。老人達は「こんな時に津浪が来るかも知れない」と言へば、考へる余裕の出来た者は、若しやと思ひ、波の音、川の流れの音に耳をそばだて井戸水の様子をうかがつたり灯をつけて浜辺へ行つて水の引く様子を見たりした。戸外へ出て潮鳴りを遠く聞き「津浪が来るぞ」と家へかけ込んで稚児を背負ひ、幼児の手をひいて直ぐ前の山へと走つた者もあつた。時のたつにつれて人々の多くは恐怖の念も薄らぎ、厳しい寒さに炬炉の火をほじくり出して暖を取り寝もやらず雑談してゐた。しかし平常と何の変りもないのに安心して「暁方までもう一寝入り」と寢床へ就いた。

其の頃、沖から何か異変を告げる汽船の警笛が闇をついてポー／＼と鳴つた。警笛の音を聞いた者は、すぐさっきの大きな地震と結んで

「津浪襲来」が頭に閃き、床へ就いた家内の者を起し身じまりもそこ／＼に赤沼山へ「津浪だ／＼」と半狂乱の様に叫び乍ら走る、この叫び声を聞いた人達は狼狽し急にざはめき出し家の者を互ひに誘つて闇の中をまっすぐに高地めざして走り続けた。

「津浪」此の詞は貧富貴賤老若男女の差別なく、現実から生への修羅場と化さしめた。唯生へ、唯々生へ、柵へあたり、扉へあたり、あるひは小石に足をとられて転ぶ等立ち上る間もなく後から／＼と人の波に押されて転び重なり。人の山、かよい女や子供達は誰彼となくしがみつく、もう腰がたゞず気ばかりはあせつても声が出ないで其のまゝ、其処に倒れた者もあつた、だが此の騒ぎを火事と聞き違へて屋根へ登つて様子を見たが其れらしくもなく安心して就寝した者もあつた。

其の間に狂ふ海魔は、速ての如くに陸をめぐけて来た。湾口の岩にうちあたつて、ゴゴゴと岩をかむ音が人間の全神経をうばひ去つた。闇にかすかに見える海魔の容姿は丁度巾の広い長い帯を横に引いた様に。向風を伴ひ、先づ小林、大平に其の触手を延ばし其れから町、乙部へ………。パリ／＼／＼浪のあふりに家の屋根が冲天に舞ひ飛ぶ続いて家が順に将棋の駒でも倒すかの如く倒れる。

巨浪に対して団楽の團は完全に壊れた、第一の帰り波と矢継早に襲ひ来た、第二の大きな波とが口湾で激突し龍巻の様だつたと逃げ後れた者で後方の怒号に妄失し何時波を被つたかもわからない、意識をとりもどした時は、波の下で胸や頭を柱や梁に押付けられ波のなす儘に任せるより術はなかつた、可愛い愛児を背負つたが、何処で手放したか、両腕に固くかゝへた稚児を何処で海魔は奪ひ取つたか……。自失して行くものからかけかへない子等を奪ひ取る位は易いものなのだ。波の下で死を考へた時に神へ祈る気持ちと、走馬燈の如く父母兄弟肉親の顔が浮ぶ、其の時の心境は筆や詞に云ひ表はずことの出来な

いものがあつたであらう。荒谷青砂里方面には比較的波が遅く廻り、自分の逃げて行く先から波を被つた奇現象があつた。斯くして海魔は僅々十数分の内に楽しかつた団楽を奪ひ、父を母を子を財貨を永久に呑んでしまつた。